

未来という名の航海

たか丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Aqoursのメンバー渡辺曜と、Aqoursのマネージャー秋月孝宏は幼馴染み。

孝宏が告白して今は曜と恋人同士。Aqoursで過ごす日々や、2人だけの時間、2人はあまりく過ごしているけど……いろんなトラブルに巻き込まれたりして?!

ハチャメチャだけどラブラブな2人が織り成す奇跡(?)のストーリー!

物語は、「全速前進、ヨーソロー!」

——あなたも未来に向かって、航海の旅に出航しませんか?

メインヒロインは「渡辺曜」

目次

はじまりの物語

僕の幼馴染 ————— 1

久しぶりのデートは激甘で……？

10

Awaken the power

of ”S—DERE” ————— 22

姉貴、襲来 ————— 32

姉貴、襲来 ————— ?

夏空と海水浴場と水着と…… ————— 52

過去編 ————— 輝きを求めて —————

過去編 其ノ壺 ① ————— 62

過去編 其ノ壺 ② ————— 72

過去編 其ノ壺 ③ ————— 93

過去編 其ノ壺 ④ ————— 104

過去編 其ノ壺 ⑤ ————— 123

過去編 其ノ壺 ⑥ ————— 142

松浦果南は付き合いたい編

逃走者を捕まえる！ ————— 159

この蒼い海に誓う ————— 182

激闘！ライバル編

ライバル ————— 時を経た邂逅 —————

208

ライバル ————— 妬かれたみかんと妬い

た月 ————— 224

ライバル ————— 邂逅 in contact

				0	
				ライバル	――欠けた核心――
		251			
			番外編		
				バレンタインデー&ホワイト	
			デー合併特別編	――	
				262	
		274		渡辺曜生誕祝賀祭2019	前編
		288		渡辺曜生誕祝賀祭2019	後編
					白百合の恋愛抒情歌
					――
					渡辺曜生誕祝賀祭2020
					――
					343
					322
304	e c o a s t s t r e e t.				
	I, m w a i t i n g o n t h				

はじまりの物語

僕の幼馴染

? side

いつからだろう、あの子のことが気になって仕方がなくなつたのは。いつからだろう、あの子のことが忘れられなくなつたのは。

この気持ちに、なんて名前をつけるのが相応しいんだろう……

そうか、これが、”恋”……なんだね、曜ちゃん

? side off

曜 side

曜 「んーっ！今日もいい天気であります！」

私は空に向かって敬礼しながら言った。今日もまた、1日が始まる！千歌ちゃんや梨子ちゃんたちとたくさん話したいなく。そんな期待を胸に私はバスに乗り込み、最後尾の座席に座った。

? 「まつ、まつてえく!!!」

曜「むむっ、この声は……」

聞き覚えのある声でしたから後ろを見てみると、パンを啜えて走ってくる男の子がいた。

出発時刻ギリギリで乗車してきた男の子。

？「はあはあはあ、お、おはヨーソロー！曜ちゃん！」

曜「おはヨーソロー！ギリギリじゃん、孝宏くん！」

乗ってきたのは私の幼馴染み秋月孝宏くん。あきつきたかひろ

少し赤みがかった綺麗な髪色で、少し長め。優しそうな碧眼と端正な顔立ちで、学校でも指折りのイケメン！

孝「あははは、ちよ……と寝坊しちゃって……えへへ……」

曜「ちよつとじゃこんな時間にならないよ！もー、いつもそんなこと言って遅刻するんだから……」

孝「あはは……曜ちゃんが起こしてくれたら寝坊なんてしないだろうなく、なんて！」

あゝ、孝宏くんそんなこと言うんだ。じゃあこつちにも策があるもんね〜だ！

曜「じゃあ、孝宏くんのお嫁さんになればいいのかな？」

孝「えっ?!あ、いやあ……そのお……／／／」

へへっ、やっぱり照れた！そんな孝宏くんをもっと照れさせちやいたいなく……
曜「毎朝私^が起こしに行つて、耳元であま〜く囁くの！「早く起きて、あな[・]た[・]♡」つて！」

孝「よよよ、曜ちゃん！あんまりからかわないでよもー！／／／

曜「あははっ、ごめんごめん！」

そんなこと思つてたら千歌ちゃんと梨子ちゃんが乗つてきた。

千「曜ちゃん！孝宏くん！おはよー！」

梨「2人ともおはよう！」

曜「おはよー！」

孝「おはよっ！」

いつもの仲良し4人組しゅーごーう！

千「あれ、今日の一限つてなんだつたっけ？」

孝「今日は現国だよ〜」

梨「えっ、今日は授業変更で数Ⅱじゃなかった？」

千&孝「「えっ!?!」」

曜「昨日、帰りのHRで言つてたよ〜」

真面目に聞いてたのつて梨子ちゃんと私だけだったの……

孝「数ⅠⅠかゝ、どうしても好きになれないんだよな〜」

曜「じゃあ今度一緒に勉強しようよ！」

孝「いいの!?!ありがと曜ちゃん！」

なんだかんだ話している間に、バスは学校に着いた。

曜「やっぱり今日はいい日になりそうだね！」

孝「うん、そんな感じがする」

曜 side off

天の声 side

ここは静岡は内浦にある浦の星学院。4年前まで女子校だったが、生徒数が減少傾向にあつたため、共学にして生徒数を増やした。つまり、孝宏たちは共学になってから2期生である。今では生徒数も格段に増え、廃校という説は消えてなくなった。

孝「ふいふ、今日もなんとか乗り切った……さて、部活部活〜」

そういつて孝宏が向かったのは体育館。そこにある部屋へと入っていった。その部屋は、「スクールアイドル部」。隣に×印が付いていて、その脇に部と改めて書いてある札が付いている。

そう、この学校が廃校を免れたのも、このスクールアイドル“Aqours”の活躍

があつたのが1番の要因だった。A q o u r s は最初、千歌、曜、梨子の2年生3人だったが、1年生と3年生をそれぞれ3人ずつ迎え、9人で活動している。9人になってからA q o u r s の快進撃が始まった。まさに、飛ぶ鳥を落とす勢いでファンを集め、ライブでも優勝し、つい先日行われたA q o u r s だけのライブでは、会場に収まらないほどのファンが集まった。

孝宏は、そんなA q o u r s のマネージャーを3人だったころからやっている。

孝「おつ、今日は一番乗りかな？」

鞠「残念デース、今日はマリーが一番乗りデース！」

ダ「まったく、職権乱用ですわ！理事長としての仕事がなんだとか言つて、結局ここに来てサボってるんですもの！」

孝「鞠莉ちゃんにダイヤちゃん！……つてダメだよ鞠莉ちゃん、ちゃんと授業を受けなきゃ！」

果「あはは、これじゃあどつちが理事長かわかんないね〜」

孝「果南ちゃんもいたんだ！今日は3年生組が早かったね！」

ダ「そ、その……孝宏さん、ダイヤちゃんつて……毎回言いますけど、無理しなくてもいいんですわよ？」

ダイヤが頬を少し紅潮させて孝宏に話しかける。

孝「無理だなんて、俺はダイヤちゃんをダイヤちゃんって呼びたいから呼んでるだよ？だから無理なんてしてないの！」

ダ「そ、そうですもの？……ま、まあ、わたくしはなんでもいいのですけれど……／＼

／＼　　そういつてダイヤは口元の黒子を搔く。果南と鞠莉曰く、嘘をつく時は必ずそこを弄るといふ。

鞠「さあ〜て！じゃあ私たち3人で先に屋上に行ってるから、後はよろしくね？孝宏！」

孝「おっけー！また後でいろいろ持ってくね〜！」

果「ありがと、孝宏〜」

そう言つて3年生が屋上に向かった数秒後に曜がやつて来た。

でも何故か頬を膨らませている。

孝「曜ちゃん、どうしたの？」

曜「……別になんでもないよ……」

孝「??？」

曜「私だつてもっと早く来て孝宏くんともっと話したいのに……」

孝「……………」

意外と小さく言ったつもりが、どうやら孝宏には聞こえていたようで……

——ギョツ——

曜「!!」

孝「ごめんね曜ちゃん……今日部活終わったら手繋いで一緒に帰ろ？」

曜「……うん／＼／」

実はこの2人、付き合っているのである。もちろん、メンバーは知っている。ただ、部活中は私情をいれないと約束した上で付き合っている。

曜「えへへ、孝宏さんとハグ、久しぶりだったね……」

孝「そうだね、最近忙しくて二人きりの時間があんまりなかったし……」

2人は抱擁を解いた。曜は部活の準備に取り掛かる。孝宏はドリンクやタオルなど、このあと必要なものを準備する。そこに、

花「遅くなつたぞら」

ル「孝宏くん、こんにちは！」

善「ククク、光の使者が我を封じ込めんと貼った結界が……」

孝「あ、花丸ちゃん、ルビィちゃん、よs……」

善「ヨ・ハ・ネ!!」

孝「えと、ヨハネちゃん……こんにちは!」

花「大丈夫ずら孝宏さん、善子ちゃんのペースに合わせる必要は無いずら」

善「だからヨハネだつてば!」

曜「あはは、相変わらずだね!ヨハネちゃん!」

善「だから善子!……あれ?」

孝「ありがちなミスだね」

ガラリラッ

千「あく、遅くなってごめん!ちよーっと先生とお話してて……あはは……」

梨「私もちよつとクラスの子とお話してて……」

花「同じお話でもここまで意味合いが違く聞こえるのはすごいずら……」

孝「いやいや、感心するところじゃないし……それより、みんな早く準備して〜!」

年生はみんなもう屋上だよ!

千「えつ!そうなの!?ぐわあく!先越された……急がなきや!」

今日もAqoursの練習が始まる。

まだ暑い夏の日の屋上で。

天の声 side of f

a
n
d

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

久しぶりのデートは激甘で……？

曜 side

次のラブライブ！に向けて絶賛練習中の私たち。今日も練習に熱が入るであります！

果「1. 2. 3. 4. 1. 2. 3. 4……はい、じゃあ10分休憩取って、ちゃんと水分取らないと倒れるからね〜」

「はーい、はーい」

孝「は〜い、みんな〜スポドリだよ〜」

曜「ありがとう！……はい、千歌ちゃん、梨子ちゃん！」

千「ありがとう〜」

梨「にしても、ほんとに暑いわね……」

千「ちきゆうおんだんか」の影響？」

曜「なんか文字に起こしたら、全部ひらがなになってそう……」

7月の中旬。千歌ちゃんの言う通り地球温暖化の影響なのか、普段の夏に比べてとても暑い。

……あれ、それにしてもなんかさつきより暑くなった気が……

曜「……千歌ちゃん、あついよ……」

千歌「ちゃんが私に寄りかかってきてた。普段なら嬉しいけど、今はあつい……

でも、それを差し引いても暑い……

千「もー！なんでこんなに暑いのに！！」

花「ずらあ……」

ル「びぎい……」

善「よはあ……」

孝「毎回思うけど、その声は何？」

ダ「暑い中、扇風機の前で待ち望んだアイスをやつと食べられた時に出す歓喜の声を
すわ」

果「どういう声だか全然わかんないんだけど……」

鞠「見ての通り、聞いている通りの声デース！」

1年生3人は、あれ必ずやるよね……

見ててかわいいからいいんだけどね♪

孝「じゃあこれで今日の練習はおしまい！各自、水分補給やクールダウン忘れずに」

！」

「「「「「「はい、お疲れさまでしたー!」「」」」」」」

孝「お疲れさまでした!」

曜「はあ、孝宏くんまだかな……」

部活前に一緒に帰る約束をしたけど、孝宏くんは、とある先生に捕まって仕事を手伝わされてる。そのとある先生は孝宏くんのお気に入りみたいで、ことある事に手伝いをさせたりしてる。唯一良かったのは、その先生が男の人だったこと。誘惑してる系の美人女教師だったら、私の存在が……

なんて思ってたら孝宏くんがやってきた。

孝「はあ、はあ、はあ、遅くなってごめん曜ちゃん!」

曜「ううん、平気だよ♪それより早くいいこ?」

孝「うん、そうだね……はい」

曜「えっ……もう……」

何かと思ったら孝宏くんが手を差し出てきた。つまり、『手をつなごう』って意味合

曜「えへへ、いつもやってるけど、やっぱり照れるね……」

孝「じゃあ……「やめる」？」

曜「やめないっ！……ってこのセリフ千歌ちゃんのものだし」

久しぶりの放課後デートってこともあるけど、やっぱり話が尽きないなく。どこ行くとか決めてないけど、どうしよっかな……

曜 side off

孝宏 side

……あつ、曜ちゃんのこの顔は……

……どこに行こうか考えてないからどうしよっかなって顔だ。

……ふっふっふっ、そんなこともあるうかと考えておいたのさ！今日のデートについ

て！

曜「孝宏くん、すごいドヤ顔してるけどどうしたの？」

孝「ドヤ顔してた……？」

曜「してた、かなり」

孝「……／＼／」

き、気を取り直して……

孝「曜ちゃん！今日は俺がデートを仕切るからね！」

曜「えっ、まさか決めてたの？行くとこ！部活前に行こうって話して、あの短時間

で決めたの？」

孝「えへへー……」

曜「……それであのドヤ顔か」

孝「なっ……／＼／」

くそー、勝ったと思つたらすごい反撃喰らつた……

曜「それで？どこに行くの？」

孝「着いてからのお楽しみ」

曜「むー……」

ほつぺた膨らませてる曜ちゃん。身長的に俺の方が大きいから、自然と上目遣いになる……それは、全男を魅了する姿となつて、俺の目に入ってくる。

曜「どうしたの？顔赤いけど……」

孝「えっ、えと……よ、曜ちゃんがすごく可愛かつたから……」

曜「!!!……ずるいよ孝宏くん……／＼／」

孝「ごめん……／＼／」

バスに乗つて数十分、そこから歩いて数分。ある場所に着いた。

曜「……つてここ、孝宏くんの家じゃん」

孝「そうだよ、今日のデートは初のお家デート！」

曜「おぉ〜！」

高校入学前から付き合っているのに、お家デートは1回もしたことがなかった。

孝「今日はたまたま親も姉貴もいないから、丁度いいと思ったんだよね。みんな旅行だし」

曜「じゃあ、何しても平気だよね……？」

孝「なっ……?! // //」

すぐそうやってからかうんだから……

今日はこつちからも仕返しだ！

孝「そうそう、色んなことができるよ？ 例えば……」

曜「ぐぬ……孝宏くん、そうくるの…… // //」

やった、今回は勝ったぞ！

……と思ったのも束の間。

曜「じゃあそうしちやおつかなく // //」

孝「ええっ?! // //」

やっぱ曜ちゃんには敵わないや……

孝「はい、曜ちゃんどぞ」

曜「ありがとう！」

ジューズを曜ちゃんに渡して、2人でソファーに腰掛けてだらける。

孝「じゃあ曜ちゃん、何やる？」

曜「んー、今はこのままがいいな」

そういつて曜ちゃんは頭を俺の肩にもたれかけた。

突然の事で俺は驚いて動けなかった。

曜「孝宏くん……」

とびきり甘い声で話しかけてきた。

そんな曜ちゃんに俺の理性はやられかけている。

曜「ねえ、孝宏くん……」

孝「な、なに……？」

曜「私、してほしいことがあるんだけど……／＼／＼」

シチュエーションがシチュエーションなだけに、変な考えしか浮かばない……

孝「ど、どんなこと……？」

曜「とつても恥ずかしいんだけど……」

頭を撫でて欲しいな……
／
／
／
└

はう……

よかった……

よからぬ事を考えていた俺がバカだったよ……

曜「ほら！私って褒められて伸びるタイプでしょ？だから、褒めながら撫でて欲しいな／＼／＼」

孝「甘え上手だね、曜ちゃんは！……よすよす……」

曜「OH YEAH……」

……

「ぶっ……!! あははははは!!」

曜「……ね、もっと撫でて? 孝宏くんにも撫でられるの、すごい好きだよ」

孝「うん、曜ちゃんが望むならいくらでも撫でてあげるよ?」

曜「えへへ、ありがとう♪」

——
チュツ
——

孝「!!!」

今日はほんとに不意打ちが多いよ……

曜「えへへ、今日はどこん甘えたいな……」

そう言つて笑つた曜ちゃんがとつてもかわいくて、俺は曜ちゃんを抱きしめた。

曜「えへへ、ぎゅー!!!」

今日の曜ちゃんはほんとに激甘だ……

そんな曜ちゃんも久しぶりに見られて嬉しいし、なにより大好きだ。

曜「ねえ孝宏くん、聞いて？」

孝「？」

曜「大好きだよ♡」

孝「うん、俺も大好きだよ」

久しぶりに甘く過ごせた放課後だった。

孝
a
n
d
s
i
d
e
o
f
f

a
n
d
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

Awaken the power of "SIDE"

曜 side

曜 「ふむふむ……ほえ……ふん……」

梨 「えつと……曜ちゃん？」

曜 「んっ？どうしたの梨子ちゃん？」

梨 「えつ、えと……いきなり私の家に来て何も言わずに私の部屋にあるそう^百い^合う本^本を
読み始めて1人で感心した挙句、「どうしたの？」って……こつちが聞きたいんだけど
！」

曜 「あはは……実はね……」

——事は数時間前に遡る。

孝 「なーなー曜ちゃん、一つ質問してもいい？」

曜 「うん、どうしたの？」

孝 「……人にはそれぞれ性格というものがあつて、それを尊重して生きているわけ
じゃないですか。その中でも特徴的な性格つてあるよね？なんだと思う？」

曜「特徴的……？」

私はぴこつと首をかしげた。特徴的ってなんだろう……？

孝「そう、特徴的。俺の中で1番特徴的なのは……そう、Sデレ！」

曜「え、Sデレ!?……って何？」

聞いたことの無い単語だった。ツンデレって結構聞くけど、Sデレなんて聞いたことないよ！

孝「あー、簡単に説明すると、普段は軽いSでいじめてくるんだけど、ふとした時にデレるって性格……かな」

曜「軽いSとデレ、かあ……それで、それがどうかしたの？」

孝「ここからは俺のお願い……曜ちゃん、1日だけでいいからSデレやってくんないかな!？」

曜「ええええええ?!?!」

——そして今に至る。

梨「それで、その参考になるかもって私の百合本だったのね……って、なんでこの本持つてるって知ってるの?!」

曜「千歌ちゃんが言ってたから……」

梨「……ホントにバカチカなんだから……!」

曜「目がマジだよ……墮天してる時の善子ちゃん見る目だよ……」

そういつて私はまた本を読み始めた。でも、梨子ちゃんはこういうことが好きなのか……?女の子同士でこういう……

曜「……/ /」

梨「どうしたの曜ちゃん、顔真つ赤よ?」

曜「……梨子ちゃんのえっち」

梨「えええ?!?!」

曜「この本じゃだめだね、他にはないの?」

梨「え?あ、Sデレかどうかはわかんないけど、それっぽいのに関してだったら、こんな本とかあるけど、どうかな?」

梨子ちゃんの守備範囲が広すぎるよ……

曜「えーと、なにに?『属性喫茶で働く大和撫子JKが、天然ドSとデレを混在させ、可愛すぎて困っている店長のお話』?」

梨「そんな大きな声でタイトル読まないでよ〜!」

私は試しにこの本を読んでみた。

そして、この本のことを実践しようと思った。きつと孝宏くん喜ぶぞ〜!

孝「ん、おかえり曜ちゃん、どこいったの？」

曜「えっ、まあいろいろ……」

孝「ふーん」

よしっ、じゃあやってみようかな！

曜「た、孝宏くん！」

孝「はっ、はい！なんですか!？」

曜「あんまり私の周りにいないでくれない？なんか気分悪いし……」

やばっ、やり過ぎかな……

孝「……は、はい……すいません……／／／」

え、これでいいの……？なんか孝宏くんの反応が面白すぎるんだけど！

曜「……でも、どうしても言うなら、別に構わないけど……／／／」

孝「……!!!」

おおっ、すごい反応！効果は抜群かな？

曜「ど、どうだったかな……？」

孝「……ありがとう曜ちゃん、すごい完成度だよ！なんていうか、この間梨子ちゃんに見せてもらった『属性喫茶で働く大和撫子JKが、天然DSとデレを混在させ、可愛すぎて困っている店長のお話』って本の女の子に似てる！」

曜「えっ、実は今日その本を読んで実践したの！梨子ちゃん家の、ね」

孝「さすが梨子ちゃん!!!」

孝宏くんはガッツポーズをして喜んだ。これって、大成功ってことだよね?!

はう、よかつたあゝ!

曜 side off

孝宏 side

いやゝ、Sデレ曜ちゃんいいなあゝ……

いいんだよ……けど……

孝「ね、ねえ曜ちゃん……」

曜「ん、なあに?」

孝「なんで網タイツに超ショートの黒いテカテカスカートと黒いテカテカ服着てるの?」

もう、絵に描いたような女王様スタイル……

曜「あーこれ?それっぽいでしょ?私のコスプレコレクションのひとつだよ!」

孝「曜ちゃんのコスプレ衣装の多さには驚かされるよ……ってかもその衣装、SデレじゃなくてただただドSだよね……」

曜「嘘お!?!?」

でもなんて言うんだろ。

曜ちゃんつてすごく凹凸のある体つきしてて、出るところ出てるから、この衣装がすごく似合う……つてかぶつちやけエロい……

自分で言うのもあれだけど、女性が肌を多く露出しているとこを見るのは気が引けてしまふ。特にこんな格好してたら言わずもがな、目のやりどころに困る……

曜「ね、ねえ、孝宏くん……」

孝「な、なに？」

曜「あの……その……」

孝「???」

どうしたんだろ、すっごい口ごもってる。言い難いことかな？

曜「よしっ……孝宏くん！」

孝「は、はい！」

曜「好きにして……」

孝「……ふえ？」

曜「だから！私を好きにして！」

孝「……ええええええ!?!?」

なんてこった!!!

孝「どつ、どつどつどういふことおおお?!?!?」

曜「言葉の通りだよ……今のこの私を、好きにしてほしいの……」

孝「好きにして……」

曜「久しぶりにこうして孝宏くんの家で誰がいるわけでもなく二人きりなんだし、付き合ってもう長いから、そろそろ進展があつてもいいのかなつて……」

驚いた。

まさか曜ちゃんにそんな考えがあつただなんて……

でも、進展つてことは……つまり……そういう事、なんだよね……

いいのか? まだ俺は高校2年なんだぞ……

つていうか、そもそもあの格好! 曜ちゃんの曜ちゃんが見えそうでヤバいんだよ!

孝「あ、あのう、曜ちゃん。できれば、そろそろ着替えてほしいんだよね……」

曜「え、どうして?」

孝「そのお、なんというか、結構際どい格好だから、曜ちゃんのあらゆる部分が危機にさらされてるつていうか、なにより俺の心の平穩のためにも……」

言葉が上手くまとまらないよ……

曜「……そうなの? 見せるために着てるのに……」

孝「……………はっ?!」

なんだとおおお!!!

これはあれか!? 見なければならぬのか!? そして……

いやいやいや、それ以上は曜ちゃんもまだ何も言っていない……

とはいえ、見せるためって言ったよね……

これはあれか? 紳士としては見なければならぬのか? 曜ちゃんの想いを踏みにじらないためにも……

秋月孝宏、漢になります!!!

孝宏 s i d e o f f

天の声 s i d e

孝宏は決意を胸に、ゆっくりと振り返った。

そして目に映ったのは……!

曜「これでいいかな?」

——浦の星の制服を着た曜の姿がそこにはあった。

途端に孝宏の力は抜け、その場に倒れ込んだ。

孝「ふええ……」

曜「ちよっ!? 大丈夫?!」

孝「あは、大丈夫大丈夫……」

そのまま乾いた笑いを続ける孝宏。

孝（一瞬だけでも、楽しい思いをさせてもらえたよ……）

曜「今日は楽しかったよ!」

孝「あは、それはよかった……」

曜「また今度もやる?」

孝「いや、しばらくはいいかな……今度は水族館にでもデートしに行こうよ?」

曜「うん! そうしよっ!……それじゃあまた明日、いつものバスで!」

孝「うん、また明日!」

天の声 s i d e o f f

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:
:

姉貴、襲来——？

孝宏 side

今日は日曜日。学校の宿題も終わって、部活も今日はお休み。特にすることもなし、ずっとだらだらしてよう……うん、それがいい……

？「バアーン!!!」

孝「んなあつ?!」

突然部屋のドアが勢いよく開き、その人は現れた。

？「こーらー！部活もなくて宿題も終わって暇だからって、この貴重な日曜日をだらだら過ごそうとするその君！将来ニートにでもなる気なのかー!!!」

孝「……五月蠅いなあ、なにさ姉貴？なんか用？」

この人は俺の姉、秋月明日奈^{あすな}。俺と同じで少し赤みがかった髪色で、腰のあたりまで髪を伸ばしている。それをいつも凝ったアレンジをして結いているが、今日はポニーテールにしている。20才で、沼津大学の2年生。

明「五月蠅くないですーだ！まったく、こんな日なんだから彼女とデートしてきなよ♪休日だし、どこもかしこもイベントだらけだよ？だからデートしてきなよ♪かわい

いかわいい、よ・う・ちや・ん・と♡」

孝「!!!」

瞬間、俺は顔から火が出たかと思った。

付き合つて割と時間が経っているから、この手の発言には慣れていているつもりだった。けど突然、しかも姉貴から言われるのはなかなか衝撃的だった。

孝「い、言われなくてもそうするつもりだったし！ほら！着替えるから早く出てつてよ！」

照れ隠しであたふたしながら姉貴を追い出そうとしたが、この発言が逆効果だった。

明「んー、じゃあ私が服を選んであげる！」

孝「はああああいいいいいいいい!!?!?」

明「だつてたーくん、ファッションセンスいいとはいえないじゃん？だから、大学でいろんな服を見てる私がコーデしてあげるわ！……なんなら私の彼氏の服を参考にしてみろ？」

孝「わーたわーた、はやと勇人さんは参考にしなくてもいいからコーデしてください！あと！たーくんって言うな！」

勇人さんとは姉貴の彼氏の終勇人さんのこと。姉貴と同一年で、中学校から付き合つている。

そして、たーくんとは、姉貴が昔から俺のことを呼ぶ時に使うあだ名。ずっとつかっているからなかなか治らない……

明「んー、じゃーまー、ちやちやつとコーデしちやいますか♪」

孝（まともな服装になりますように……）

心の中で静かに祈った……

孝 a s i d e o f f

曜 s i d e

曜「……よし、決めた！」

何を決めたのか。それはもちろん！せっかくの休日だし！デートしなきゃもつたいたい！ってことで、孝宏くんをデートに誘うこと！

曜（……そういえば、私からデートに誘うのって……初めてかも！）

うわー、やばい！そう考えたらめちやくちや緊張してきた！

孝宏くんはいつもこんな緊張を振りほどいて私をデートに誘ってくれてるのか！

曜「うー……どうしよう……」

なんて言いながら、私は無料トークアプリ「L I M E」の孝宏くんのトーク画面をずっと見つめていた。

そんな時、

——ピロン——

孝宏くんからL I M Eが届いた。

曜「なんだろう？」

——おはよ！

——曜ちゃん今日暇かな？

——よかつたらデートしてほしいんだけど……

——遊園地、行かない？

曜「くうっ……／＼／」

先を越された……けど嬉しい……／＼／

私は孝宏くんに返信した。

——おはヨーソロー！

——もちろん行くであります！

——つてゆーか、私も孝宏をデートに誘おうと思ってた！

——同じ気持ちだったね！♡

なんだかどつても恥ずかしくなったよ。

♡は使うべきだったのかな……

カーッと頬が紅潮するのがわかった。

曜（悔しいけど、早く会いたいよ、孝宏くん……）

曜 side off

天の声 side

——同じ気持ちだったね！♡

孝「はーと……」

孝宏はLIMEのトーク画面を見つめて呟いた。

半ば強制的に姉貴に行くように言われたデートのため、同じ気持ちというのは少し違うと思われるが、予想外のハートマークを目にして、家を出る前から今に至るまでずっとこの調子である。

孝（まさか曜ちゃんが♡を使ってくるとは!!!デートに誘ってよかった！姉貴ナイス！）

というわけで、孝宏は沼津の駅前に来ている。

明日奈に、

——最近できた沼津の遊園地にも行ってくればいいよ！

なんて勝手にデートコースも決められ、今、駅前で曜を待っているところである。

因みに明日奈がコーデした孝宏の服装は、白地に黒の文字の書いてある半袖Tシャツに黒の薄いコーデイガン。黒のスキニーパンツに、白のスニーカーを履いている。胸元にリングのネックレスを付けていて、実に高校生らしい服装になっている。

孝（普通でよかった……）

と、そこに

曜「お、おまたせ……」

曜がやって来た。曜の装いは、孝宏の心を射て殺すのには十分すぎるものだった。所謂、悩殺というやつだ。

白の七分袖のシャツと青いプリーツスカート、頭には青い紐を巻いた少しだけつばの長い麦わら帽子を乗せていた。

孝「曜ちゃん、ロングスカートなんて珍しいね……麦わら帽子も似合ってるし、とっても可愛いよ！」

曜「え、そ、そうかな？……あ、ありがと／＼／＼」

会うなりすぐに装いを褒められたので、曜は思わず顔を赤くして俯いた。

曜「じゃ、じゃあ、行こっか？／＼／＼」

孝「う、うん！」

付き合って長い期間が経つのだが、まだまだ初々しさが残る2人。

そんな2人を遠くから見つめる2人の黒い影――

2人はバスに乗り、目的地である遊園地に到着した。

日曜日で、尚且つ新しい施設ということもあり、かなり大勢の人達でごった返していた。

その大勢の人達に目をやると、その殆どが家族連れやカップルだった。

孝「ねえ曜ちゃん」

曜「ん？どしたの？」

孝「俺達もあの人たちみたいに、その……カップルに見えるのかな……？」

曜「……み、見えると思う……けど……／＼／＼」

孝宏が唐突にそんなことをいうものだから、曜は恥ずかしくなり、頬を紅く染めた。

孝「そっか……そうだよー！うん！それじゃ、チケット買いに行こうか？」

曜「う、うん……」

曜は変わりゆく孝宏のテンションに振り回されている。

「おめでとうございまーす！」

孝&曜「「え？」」

「当遊園地累計1000組目のカップルの方でーす！」

孝&曜「oh……」

チケツト売り場でペアチケツトを購入した2人は、入場口に向かったのだが、その入場口で思わぬサプライズが待ち構えていた。

曜「まさかこんなことがあるなんてね……」

孝「びつくりだよ……」

記念品を贈呈され、記念写真を撮られ（2人にとってはいい思い出になったから内心とても喜んでいゝ）、振り回されているうちに15分が経過していた。

? 「ふふふ……面白そうなことになつてゐるねえ……」

? 「そうだね……つてか、何でこんなことしてるの？」

? 「決まつてるじゃん！面白そうだからだよ！」

? 「はあ、そんな答えが帰つてくることだろうと思つたよ……まったく、ブラコンなんだから……」

園内の草陰に隠れて、曜と孝宏の動向を見つめる2つの陰……

曜「まず、どこからいこつか？孝宏くん決めていいよ！」

孝「えつ、ほんと？……んー、じゃーあー……」

曜「……ね、ねえ……ほんとにここがいいの……?」

孝「え、うん……あれえ?もしかして曜ちゃんはお化け屋敷が苦手なのかな? (二ヤニヤ)」

曜「そつ、そんなことないよ!へ、へーきだもん!」

孝「そーお?んじゃあ、入ろつか?」

曜「お、おう!どんとこいつてもんよ!」

3分後

曜「イヤアアアアアアアア!!!孝宏くーん!!!」

孝「痛い痛い!腕掴みすぎだよ曜ちや……いだだだだだ!!」

曜「ヒイイイイイイイイ!!!」

3分後

曜「……ハア……ハア……ハア……し、死ぬかと思つた……」

孝「……俺はいろんな意味で死ぬかと思つた……」

お互い違う理由でグロッキーになっていたが、お化け屋敷の出口から聞こえてきたあの言葉に耳を疑つた。

?「イヤアアアアアアア!!!!!!勇者おおおお!!!!!!」

孝「えっ?この声って……」

瞬間、お化け屋敷の出口から勢いよく出てきた1人の女性が孝宏に激突した。

孝「ゴフツッ!?!?」

曜「孝宏くん!?!?……つて、上に乗ってる女の人つて……明日奈さん!?!?」

明「……え?……あ、曜ちゃん……みつかっちゃった……」

? 「あーあ、早速バレちゃったじゃん。だからお化け屋敷に行くなんてよそうつて言つたのに……」

孝「……そ、その声は……勇人さん……?」

明日奈の下敷きになって今にも息絶えそうな声を発した孝宏。勇人と呼ばれたその男は返事をした。

勇「せいかい! 勇人だよ」

孝「なんで2人がここに……に……バタリ……」

明「ありや、のびちやつた……(> ω <) テヘペロ」

曜「孝宏く……ん!!!」

ここに1人、なんとも悲しい最期を迎えた男がいたそうなの……

To be continued……

姉貴、襲来——？

前回のあらすじ

孝宏の姉、明日奈の提案で孝宏と曜はデートをすることに。最近出来た沼津の新しい遊園地にやってきたのだが、そこでまさかの姉とその彼氏、柘勇人が尾行していることに気づく。これからどんな展開になっていくのか——

曜 side

曜「……えーつと、まずは説明して明日奈さん……」

明「あはは……実はね……」

そこで私は今日、孝宏くんが私をデートに誘ってくれるまでの経緯を聞いた。

明「……かくかくしかじかかってことなの……ごめんね曜ちゃん！ほんとはずーつと眺めてようと思ったんだけど、アトラクション見たらどうしても楽しみたくなっちゃって……」

曜「いや、こちらとしては出てきてもらってよかったけどね……でもさ、孝宏くん」

孝「ん？」

曜「あ、蘇ってた……でね、私思うんですよ！」

孝「なにを？」

曜「なんで孝宏くんはあんなバレバレの明日奈さんのトラップに引つかかっちゃうのかってこと！」

孝「バツ、バレバレのトラップ?!」

やっぱり気づいてなかった……

明日奈さんがテンション高めに服装選んでくれたのなら気づくべきなのに……

曜「だってほら、明日奈さんが服装選んでくれた時って大体いつもなにかしてくるじゃん？例えば、小学校5年生の林間学校の時だって、中学校が休みだからコソコソ付いてきたりしたし。あとは、中学校2年生の修学旅行の時だって、私と孝宏くんにとんでもないことしたじゃん？」

孝「あ、あー！あれか！あの（ピーーーー）……」

曜「言わなくていいからあく！！／／／」

近くにいる人達が数人こちらをぎよつとした顔で見ているのが分かって、私は顔を赤らめた。

曜「と、とにかく！次からはほんとに気をつけてね！」

孝「は、はい、わかりました……」

曜「それと……明日奈さん、今日は帰ってください！」

明「ええええええええ?!?!?!なんでええええ?!?!」

曜「そ、その……見られていると思うと……とてもじゃないけど恥ずかしいので……

／／／

明「……ツ!!」

明日奈さんは後ろによろめいて、勇人さんに寄りかかった。

勇「おっと……どうした明日奈？」

明「……ろう……」

勇「ん?なんて？」

明日奈さんは素早い動きで自立し、勇人さんに向かって言った。

明「帰ろう!!今すぐ!!」

勇「おっと?どういう風の吹き回しなんだか……まあ、明日奈がそうしたいなら構わないけど」

ああ、きつとこの2人が長続きしてる大きな要因はこの絶妙な距離感にあるんだろう

なあ……

引つ張る明日奈さんに、それを包み込む勇人さん。

私たちもこんなふうになれるのかな……？

そう思ったら、胸を何かがチクリと刺した感じがした。

明「それじゃあ！二人とも楽しんで!!!アデュー!!!」

言うなり明日奈さんはすたこら走って行ってしまった。

勇「あ！ちよつ、明日奈待ってくれ〜!……それじゃあな、二人とも！」

孝「あ、はい、さよなら……」

曜「……」

孝「ん？曜ちゃんどうしたの？」

曜「……え？あ、ううん、なんでもない……」

孝「……？」

曜 s i d e o f f

明日奈 s i d e

勇「おーい、明日奈！どうしたんだよ、いきなり帰ろうなんて？」

明「なんでって……勇人は何も感じなかった？」

勇「な、何に？」

明「曜ちゃんの顔よ……あの赤らめた顔……あんな顔でお願いされたら断れないわよ

……」

勇「ふーん、そんなもんなのか……」

まったくほんとにこの男は鈍いわね……

明「まあいいわ、何か甘いものでも食べに行こつ！」

勇「ん、そうだな」

私たちは手を繋いで歩き出した。

あの二人のこのあとのことは孝宏に後で問い詰めようかな♡

明日奈 s i d e o f f

孝宏 s i d e

……

……

……

どうしたんだろう曜ちゃん。なんか、いつもと違う。

多分気づかない人は気づかないだろうけど、ずっと一緒にいるからなんとなくわかる。何かがいいつもと違う。

孝「ふー……よしっ！」

曜「……?どうしたの？」

孝「曜ちゃん、はい！」

曜「え……／／／」

俺は曜ちゃんに手を差し出した。所謂「手をつなごう」のサイン。

曜「……もう、ほんとにずるい……全部お見通しなんだもん……」

すると曜ちゃんの目尻に光るものが見えた。

孝「えっ、えっ、えっ?!どどど、どうしてななな、泣いてるの?!」

曜「ご、ごめんね……平気だから……ただ、私って馬鹿だなあって思ったから……よかつた……私の杞憂で終わって……」

孝「??」

曜「フフツ、なんの事かさっぱりだよね?でも大丈夫、気にしないで!もう元気になつたから!」

そういつた曜ちゃんの目元は少し濡れていて、頬は紅潮していた。

そしてなにより、笑顔になっていた。

いつもの眩しい、はじける笑顔だった。

曜「……はい!」

曜ちゃんは手を差し出した。俺はその手を取り、俺の口元に持つてきて、

——チュツ——

キスをした。

なんでだろう、すごくそうしたくなった。

曜ちゃんはものすごく顔を赤くしていた。そんな曜ちゃんが可愛くって、思わず笑顔になった。

そして手を握った。指を絡ませ、恋人繋ぎというものにした。

孝「じゃあ、デートの続き、しよつか？」

曜「~~~~ツ！／／」

曜ちゃんは何も言えなかったのか、ただ頷いていた。

孝 side off

side

遊園地デートが終わり、帰路に就いていた。

曜「……ねえ、ちよつと寄り道してもいい？」

孝「……うん、いいけど……どこに行くの？」

曜「ふふつ、なーいしょ♡」

孝宏くん、喜んでくれるかな……？

孝「あれ、ここって……公園？」

曜「そ。こつち来て……」

私は孝宏くんをベンチに誘導した。

幸い今日は誰もいない。ものすごいチャンス！

私はベンチに腰掛けて、ももの辺りをポンポンした。

孝「？……はっ、ま、まさか……!!!」

曜「流石に勘がいいね……そう、膝枕！」

孝「うおおおおお!!!まじっかつ!!!」

おーおー、すごい目がキラキラしてる。子供みたい♡

曜「ほらほら、早く来て？」

孝「う、うん……じゃあ……」

——ポフツ——

孝「う、わあ……これは……／／／」

曜「ど、どうかな？」

孝「いや、言葉では言い表せないよ……すごい、すごすぎるよ……ダメになりそう

……」

孝宏くんの言葉は嘘っぽく聞こえたけど、顔が全てを物語っていた。見たことないく

らいへにやへにやになつた顔。あーあ、もう、だらしないんだから……♡

孝「なあ曜ちゃん」

曜「うん？」

孝「今日のごめんな。色々迷惑かけた。姉貴のこともあるし、俺自身曜ちゃんに気を
使わせちゃつたと思う。こんな不甲斐なくて頼りない俺でごめん……。けど、曜ちゃん
のこと幸せに出来るのつて俺だけだと思つてる。だつて、俺たち誰が見てもいいカップ
ルだから」

正直、また涙が零れそうだった。

曜「……ほんと、私つてば、馬鹿曜だ……。……。ありがとう、孝宏くん！大好き!!!」

私は孝宏くんの体に抱きついた。

孝「もがっ?!もがががっ!!!」

曜「えっ?!」

私が抱きついたことで、私のももに頭を乗せていた孝宏くんの顔に、私の胸が乗つ
かつて、息ができない状況にしてしまった。

曜「あつ!ご、ごめん孝宏くん!大丈夫?!」

孝「だ、大丈夫大丈夫……。もー、一瞬で俺のいいセリフ消し飛んだじゃん」

曜「あはは!ごめんごめん!」

そうだ、私たちは今が一番いいんだ。この関係が。

明日奈さんたちがどうか関係ない。私たちは私たちだ。

曜「孝宏くん、ありがとね、大好きだよ！」

孝「ん？えーと、どういたしまして、でいいのかな？」

曜「うんっ！」

こうして私たちのハチャメチャなデートは幕を閉じた。

ハチャメチャの中で見つけた大事なこと。私は絶対忘れない。

そう私は心に誓った。

曜
s i d e
o f f

T o b e c o n t i n u e d . . .

夏空と海水浴場と水着と……

孝宏 side

孝「ふいっふっ、あー、いい天気だなあ……ほんとに、いい天気だ……」

照り輝く太陽と雲ひとつない青空を見つめ、俺は呟いた。

ここは内浦の海水浴場。俺はいまパラソルの下で暑さを凌いでいる。

視線を下に戻すと、視界いっぱい広がる海！

そして水着姿の A q o u r s 2 年生組！

なんと3人ともビキニという素晴らしい状況！

曜ちゃんは水色の水着に白いラインが入ったもの。

千歌ちゃんのみかん色の水着に白い花の模様があしらわれているもの。

梨子ちゃんは黒の水着にピンクの花柄。

ぶっちゃけ梨子ちゃんの水着が刺激強すぎてかなり、困ってる。でも、

孝（いや、若いおなごたちが海辺できやいきやはしゃいでいるのを見るのはいいもんだな〜！）

なんて不埒な考えを思い浮かべたところで、曜ちゃんがやって来て隣に腰を下ろし

た。

曜「よいしょっ……孝宏くん、楽しんでる？」

孝「うん、楽しんでるよ！みんなの水着すが……楽しんでる姿見てるだけで楽しいよ！」

アブナイ、アヤウクタイヘンナコトヲイッテシマウトコダツタゼ……

曜「……言いかけた何かは気になるけど、楽しめてるならよかった！……でも、孝宏くんも一緒に遊ぼうよ！ビーチボールとか膨らませてくれただけじゃん？」

千「そーだよそーだよ！一緒に遊ぼうよー！」

千歌ちゃんまでやって来た。その後ろにはいかにも一緒に遊んでほしいというふう
に、目をキラキラと輝かせている梨子ちゃんもいる。

ううう、こういう状況には弱いな……

孝「わかったわかった、一緒に遊ぼう？」

その瞬間3人はパアツとはじける笑顔になり、顔を見合わせ、大喜びした。

曜「よーし、じゃあ行くよー！……それっ！」

——ぼーん

千「わあ、こつちきた！……それー！」

——ぼーん

梨「ええつ、こつち?!ええつと……孝宏くんパスっ!」

——ばしーん

孝「ちよっ!強すぎん?!ブフツ?!」

——ばちーん

——ばしやーん

梨「えつ、あつ!ごめんなさい!!」

いてて、まさかトスじやなくて全力スマツシュがくるとは……

俺たちはビーチボールで遊び始めた。

典型的なスイカ柄のビーチボールだ。

だが俺の眼前には、それよりもたわわに実った大きなおっぱ……ゲフンゲフン

これ以上はいろいろまずいからやめておこう……

曜「孝宏くん、どうかした?……もしかして、梨子ちゃんの強烈スマツシュで頭を強く打ったんじゃない……」

梨「うそ?!ごめんなさい!!」

孝「だ、大丈夫!何ともないよ!色々思いとどまつただけだから……」

曜「ど、どういうこと……?」

孝「き、気にしないで……」

曜ちゃんに心配そうな顔で見られたけど、逆に近づいてきた曜ちゃんの胸が近くてほんとにドキドキして顔から火が出てる感覚だった。

？「まあまあ、おアツい事で……」

孝「ん……？えっ？あ、姉貴?!」

千「あー！あつちゃん！はやつち！久しぶりー！」

勇「千歌、はやつちはそろそろやめてくれって……」

突然現れた姉貴と勇人さん。

なんだかもう偶然じゃない気がしかないな……

そんなことを考えていたら、梨子ちゃんが小声で尋ねてきた。

梨「ねえ、孝宏くん。姉貴って……それに勇人さんって？」

孝「ああ、あつちは俺の姉貴の秋月明日奈。大学2年。それで、あつちが姉貴の彼氏で同い年の終勇人さん。曜ちゃんと千歌ちゃんは随分前から親交があつて、ああやつてあだ名で呼び合う仲なんだ」

俺は梨子ちゃんにそう説明した。

梨「へえ、孝宏くんってお姉さんがいたんだね。それでこの孝宏くんが形成されてるってわけね……」

孝「? 梨子ちゃんどうかした?」

梨「へっ?! ああ、ううん! なんでもないの!」

何か妙な事を口走ってた気が……気のせいかな?

ってそれより!

孝「なんで姉貴たちもいんのさ?」

明「そりゃあんた、決まってるじゃん。勇人とデートしてるのよ!……っていう建前のもと、海水浴場できやあきやあはしやぐ水着美女たちを拝みに来たのよ!」

梨「なっ?!?!」

曜「り、梨子ちゃん……?もしかして、明日奈さんの趣味、気づいちゃった……?」
すると梨子ちゃんは姉貴にもすごいスピードで近づき、手を両手で握った。

梨「私、あなたと仲良くなれそうな気がします……!」

明「えっ? あ、あなた A q o u r s の梨子ちゃん! きやー! 本物ものすーつごく可愛いよね! お姉さんがギューってしてあげる!」

梨「わあ、嬉しいですー!」

「「初対面の人にこんなアグレッシブな梨子ちゃん、初めて見た……」」

勇「なあ孝宏、明日奈と趣味が合うってことはつまりあの子は……」

孝「ええ、かなりの腐女子です。しかも百合専門……姉貴と通づるところしかないん

です……」

勇「まためんどくさい趣味持った子が現れたもんだ……」

今更ではあるけど、俺の姉、明日奈はかなりの腐女子である。しかもBLにはこれっぽっちも興味がなく、むしろ百合しか好まないという変態なのだ。

そんな性格だから、推しカブが違うということで友人と戦争になりかけたことも……

曜「あはは……明日奈さんの趣味と分かり合える人がこんな身近にいたとはね……」

孝「けど、1番近づけたくなかった2人かもしれない……」

孝「んーっ！つつかれたあ……」

曜「ほんとにね……」

3時頃になって、俺と曜ちゃんは少し休憩をとった。

あのあと結局姉貴たちと一緒に遊ぶことになったのだが……

梨『……それで、その時の結花ちゃん表情がたまらなくてですね……!』

明『わかるわ!あのシーンときたら、ついに美羽が攻めに回って……』

『きやー!!!』

なんて、2人だけの世界にどっぷりと浸かってしまつて、正直あの二人は遊ぶという概念を捨てていた。

そんなこんなで、曜ちゃんと俺、勇人さんと千歌ちゃんのチームでビーチバレーをやったのだが……

勇『孝宏オオオ!!!』

孝『勇人さアアアん!!!』

『うおおおおおおお!!!』

って俺と勇人さんだけで盛り上がって、もう何が何だか……
てなわけで今に至る。

曜「勇人さん強かったね！孝宏くんもあとちよつとだった！いい勝負だったね！」

孝「くそー、あのスマツシユさえ取れていれば……」

曜「かなり落ち込んでるね……じゃあそんな孝宏くんが一気にハッピーになれること、したい？」

孝「え？一気にハッピーになれること？」

いったいなんなのだらう？

曜「それはね……これ！女子達の肌の味方！日焼け止めクリーム〜！」

なっ、なんだってえ〜!?

日焼け止めクリーム。砂浜でよくあるやつ！カップルがイチャイチャするためのグッズ！女の子がうつぶせになって男が背中とかに塗る、あの日焼け止めクリーム！

曜「やってみたいく、ない？」

孝「はい！全力でやらせて頂きます！」

まさか、生きているうちにこんな幸せなことができるとは……

曜「はい！じゃあ、いいよ……／＼／＼」

孝「う、うん……／＼／＼」

俺は胸元を覆う水着の紐を解いた曜ちゃんの背中に、適量の日焼け止めクリームを塗り始めた。

孝（う……わあ……女の子の、曜ちゃんの肌ってこんなにすべすべなのか？なんかとてもじゃないけどやっっちゃいけなさそうなことしてる感じ……ああ、なんだか曜ちゃんの背中がめっちゃくちや狭く見えてきた……もつと続けていたい……）

だめだ、完全に俺の理性はやられかけてる……

——ばちーん!!

孝「へぶつ?!」

千「あーっ！孝宏くんごめーん！」

後ろで勇人さんとビーチボールで遊んでいた千歌ちゃんがボールをこつちに飛ばしちゃったみたい。気をつけてよもー……

……ん？なんだこの非常に好ましい感触が両手にある。試しに少し力を加えてみる。

孝（うわっ！なんだこれ！すっごいいい！）

調子に乗ってもう1回力を加えてみると、下からなにやら声が聞こえた。

？「……あんっ！た、孝宏くん……！」

孝「え……あーっ！！！」

俺が感じた好ましい感触。その正体は、曜ちゃんのたわわに実った、それはそれは大きなメロン2玉。

水着の紐を結び、ゆっくりと起き上がった曜ちゃん。よく見ると曜ちゃんは羞恥で顔を真っ赤に染め、少し怒ったような表情をしていた。

孝「あー、えっと、その、じ、事故とはいえ起こったことは覆しようのない事実です……ごめんなさいっっ！！！」

曜「孝宏くんのえっちー！！！」

孝「ごめんなさあーっーい！！！」

こうしてラッキースケベも含め、はちやめちやすぎる一日は幕を閉じた。

一方、その頃あの二人は……

明「梨子ちゃん、あなた最高ね！私のこのレベルまでついてくれるだなんて……！」

梨「私も感動しました！あまり多くないと思っていた私と同じ推しカプの人とこんな

に語り合えるだなんて!……師匠とお呼びしても良いでしょうか!?

明「なんとも呼んでくれていいわよ!」

梨「し、師匠!!」

新たな友情、もとい、師弟関係が生まれた……

T o b e c o n t i n u e d …

過去編 — 輝きを求めて —

過去編 其ノ壺 ①

孝宏 side

孝「すごい……」

俺は気が付くとそう言っていた。

意識的に言ったのではなく、そう言葉にせざるを得なかった。

隣にいる曜ちゃんや千歌ちゃんも目を輝かせて、目の前に広がる光の海をただただ見つめていた。

曜「眩しい……すごい……」

千「これが、ラブライブ！……これが……μ s！」

……

？「……あつれー、ほんとにまだ寝てる……私でさえ起きてるのに……」

……

？「……おい、起きないと食べちゃうぞ〜♪」

……

？「もー、全然起きないじゃん！甘やかし作戦は失敗か……そもそも起きてなきや効かないか……それなら……とりやつ！」

孝「ぐぶはッ?!?!」

な、なななななんだ?!

い、いたい！すぐくいたい！

働かない頭を無理にフル回転させて状況を把握した。

お腹のあたりに何か重みを感じる。

見るとそこには可愛らしい桃が乗っていた。

孝（誰かの……お尻?）

？「もー！やつと起きた！起きるの遅すぎ！」

孝「……な、なんだ……千歌ちゃんか……」

俺のお腹に乗っていたお尻……もとい人は、大切な幼なじみ3人のうちの1人、高海

千歌ちゃんだった。

千「む、なんだ……千歌ちゃんか……じゃないよっ！今何時だと思ってるの！」

そう言われたのでおもむろに勉強机の上のデジタル時計を、寝惚け眼をこすりながら見た。

表示されていた時間は

12:45

……あれ、何か大事なことを忘れていたような、そんなことも無いような……

千「もう、集合時間になっても来る気配ないし、電話にも出ないからどうしたのかかと思っただよ……」

集合時間……？

一体なんの……？

千「曜ちゃんもずうずうずうと待つてるのに……」

曜ちゃん……？

曜ちゃんと何か約束してたっけ……？

千「ちよつと、まだ寝てるの？ちゃんと「こーるあんどれすぽんす」してくれないと分らないよ」

孝「えつととき……今日、何かあつたっけ？」

そう言うのと千歌ちゃんは目をぱちくりさせた後、大袈裟に肩を落とした。

千「はあ……曜ちゃんも苦勞するなあ……まあ、幼なじみだし、何となくわかってた

けどさ……」

孝「そんな一人で落胆されても……前に志満さんが東京で買ってきたプリンを美渡さんに食べられちゃった時みたいなの……」

千「そーなんだよねー！美渡ねえっいたらほんとに酷いんだよ！ちゃんと上蓋に「チカのプリン」って書いておいたのに……ってそうじゃないー！てゆか、東京って言ったよね今！思い出してー！」

孝「東京……東京？……あ、東京」

瞬間、全てが繋がった。

今日約束していたこと、曜ちゃんと千歌ちゃんとするべきこと、休日なのにこんな時間起きて怒られること。

孝「そうだ……東京旅行の計画立てるんだったつけ……」

千「もう！思い出すのが遅いわっ！」

孝「あたっ！」

千歌ちゃんにデコピンされた……

今日は3月23日土曜日。

今日の沼津の天気は晴れ。夕方から所により雨。

最低気温18℃、最高気温24℃。

この時期としては平年より少し暖かいぐらいの気温かな？

そんな今日、俺と曜ちゃんと千歌ちゃんは、翌日の中学卒業記念の東京旅行の計画を立てる予定でした。

ところが、俺の超絶寝坊により予定は狂いに狂いまくり。

全ての支度が終わり、千歌ちゃんの家『旅館 十千万』に着いたのは13:20。

千歌ちゃんの家に着き、志満さんと美渡さんに挨拶を済ませ、千歌ちゃんの部屋に入ると……

仁王立ちをした、

それはそれは可愛らしい、

幼なじみが、

顔を茹でダコのように真っ赤にさせて、

ほっぺたをプクッと膨らせておりました。

曜「……孝宏くん、おはよう……」

孝「あ、あはは……曜ちゃん、今はお昼だよ？」

内心、ちよつとくらいふざけるなら許してくれるだろうと思ってた。

……甘かった。

ここから曜ちゃんの猛攻が始まる。

曜「ツ?!……むうくくくつ、うるさくくくい!どう寝坊したらこんな時間になるのさ!1時回ってますけど?!私も昨日から旅行が楽しみで、遠足前の小学生みたいになかなか寝付けなくて12時ぐらまで起きてたけど、今日起きたの7時半だよ?!いつもはあんまり早起きしない千歌ちゃんですえ8時にはちゃんと起きてたんだよ!?!なのに12時半過ぎてから起きるってどういうことなのもーっ!!」

プンスコしてる曜ちゃんが新鮮で、めちやくちや可愛かったんだけど、言ったら怒られそう……

孝「……はい、ごめんなさい……松月でみかんどら焼き奢るから許してくれる……?」

千「えっ、ほんと?!うんうん、全然許しちゃう!」

よっしや、まずは1人釣り上げた(笑)

曜「千歌ちゃん……」

孝「曜ちゃんは……だめ、かな?」

曜「……パフェとケーキも……」

釣り上げた獲物の代償はでかいなあ……

俺の財布、頑張つて少しだけ紐緩めといてくださいえ……

孝「それで許してくれるなら、構わないよ……」

すると曜ちゃんは一瞬、パアツと顔を輝かせたが、すぐに平静を保とうと、ジト目＋口をぎゅつと結んだ。

孝（なんだこのかわいい生き物……連れて帰りたいわ……）

ちなみに、俺と曜ちゃんは付き合つて2週間が経過していた。

曜「……よし、じゃあ、孝宏くんが遅れてきた分を取り戻そっか！」

千「おう！」

孝「……いや、ほんとすんません……」

千「いいっていいって、もう怒つてないよ〜」

曜「でも予定は忘れないでよね〜？」

ううつ、ほんとに曜ちゃんは痛いところくなあ……

孝「は、はい……」

曜「んーじゃあまず、それぞれの行きたい場所と行く順番、それとそれらの効率的な回り方を考えよっか？」

千「はいはいはい！まずアキバ行きたい！沼津じゃあんなにたくさんの人見られないし！あとアキバドーム！」

孝「千歌ちゃんはほんとに野球好きだね！」

千「んー、野球っていうか、スポーツが好きだよ！やっぱり身体動かさない！」

アキバドームといえば、プロ野球の試合が毎日のように行われたり、大物歌手が目指している舞台の一つでもある、それはそれは大きな大きな建物。

静岡の片田舎に住んでいる若者からしたら、あんなに大きくて荘厳な建物には1度は憧れるだろう。特に千歌ちゃんみたいなタイプは。

孝「曜ちゃんは？」

曜「私もアキバであります！なんとと言っても制服！コスプレ専門店とかたくさんあるんだよね?!私じゃ作れないものもあるから、いろいろ参考にしたいたいしね！」

千「今度はどんなのがほしいの？」

曜「今回はナース！あの白いミニスカ！可愛いよねえ〜！頭にさせてる帽子も可愛いし……はぁ……楽しみだなあ……」

あらら……曜ちゃんの目は既にしいたけになつて……

よつぼど楽しみなんだなあ……

曜「そういう孝宏くんはどこに行きたいの？」

孝「俺は……神田明神、かな。μ s の、所謂聖地つてやつかな……」

千& a m p ; 曜「「みゅーず?」」

孝「えつ、スクールアイドルμ s を知らないの?!」

そんなバカな……

既に人気は全国区、名実ともにトップクラスで、第2回ラブライブ!では優勝を果たしたトップクラスのスクールアイドルグループ……その名を「μ's」……

まさか知らない人がいるとは……

世界は広いなあ……(in 沼津)

千「それで、その「すくーるあいどるみゅーず」っていったい誰なの?」

孝「まず、スクールアイドルってのは……」

俺は2人にスクールアイドルのこと、μ'sのこと、知り得る情報を包み隠さず全て教えた。

孝「まあ、簡単に言えば「輝きたい」って思ったら、誰でも始められる、言わば部活みたいなもんだね」

曜「そんなものが今の世の中にはあるんだね!……「輝きたい」かあ……素敵だね」

千「うんうん、私も見てみたくなったかも、スクールアイドル!」

曜「それで孝宏くんはμ'sの聖地、神田明神に行きたいってわけなんだね?」

孝「うん、そこだけは外せない、かなあ……」

曜「よし、じゃあみんなの行きたいところが出たことだし、どう回るか決めよう!」

千& ;孝「おー!!」

To
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:

孝
宏
s
i
d
e
o
f
f

過去編 其ノ壺 ②

孝 s i d e

孝（ん……？この日って……やっぱりそうだ、あの日だ……）

明日、日曜日に東京に行くことになった俺たち。

千歌ちゃんにはアキバドームで野球を見たいと思ってるみたいだけど、残念ながらその希望は叶えられそうにない。

なぜなら……

その日に「ラブライブ！ 決勝大会」が開催されるから。

孝（見に行くことはないと思ってたから全然調べてなかったけど、今回はゲストがすごいな……）

曜「……くん……ひろくん……たーかひーろくーん！」

孝「うわあ!!!……なっ、ななな、何?!」

曜「孝宏くん、今日はほんとに抜けてるなあ……ぼーつとスマホなんて眺めちゃって……もしかして何も聞いてなかった？」

孝「……はい、考え事してました……」

千「あはは……さすが孝宏くんだね、いつにも増して変なところで気が抜けてる♪」

孝「千歌ちゃんには言われたくない……それで、なんの話をしたの？」

曜ちゃんは、ホントに聞いてなかったんだ……って呟いてから話し始めた。

……曜ちゃん、今日はずっとごめんね……

あれ、ずっとごめんねって日本語おかしいかも……

アイムジャパニーズ、オーケー。

私は英語を話すことができな
I can, t speak English.

ずっと思ってたけど、これってめちゃくちゃ矛盾してるよね？喋ってんじゃんって

……まあでも今は別にどうでもいいんだけどね……

曜「えっと、神田明神↓アキバのコスプレショップ↓アキバドームの順番で見て回ろ

うって考えたんだけど、どうかなって。電車賃も時間も1番節約できるルートみたいだ

よ！」

孝「うん、いいと思う……けど、アキバドームで野球は見られないっばい……」

千「えーっ！なんで?!」

孝「実は日曜日は『ラブライブ！ 決勝大会』が開かれるんだよね」

曜「ラブライブ！ってさっき孝宏くんが言ってたあの？」

孝「そ！偶然にも偶然、ちょうど決勝大会の日だったんだ」

しよーじき意識してなかったから覚えてなかったのもあるんだけど、偶然すぎる。こんな偶然起こっていいのだろうか？ご都合主義的なお話まっしぐら感が……（メタアアアアアア!!）

千「うーん、なら仕方ないよね！ドームだけでも拝んでこう！」

曜「神社じゃないんだから……」

何やかんやあつたけど、結局曜ちゃんが決めてくれたルートに、野球が見られないという事で千歌ちゃん希望のメイドカフェをコスプレシヨップの前に加えたルートで行くことに。

メイドカフェ。メイドかあ……

【少年妄想中……】

曜『お帰りにやさいませ、ご主人さま♡』

曜『お食事をお持ち致しました！……美味しくなあれ♡』

曜『ご主人様。お疲れでしたら、私の膝枕などいかがでしょう……♡』

曜『(主人)……さまぁ……♡♡♡』

【少年現実復帰中……】

いかんいかんいかん、けしからんですよ渡辺曜！

なんて破廉恥な！

白と黒のフリフリミニスカートを身につけ、頭にはネコミミですとお？！

けしからん！破廉恥だ！連れて帰りたい！！

千「渡辺さんや、彼、何を考えてると思います？」

曜「高海さんや、彼は先程高海さんが「メイドカフェに行きたい」と言った時に過剰な反応をしていました。恐らくアキバのかわいいメイドさんを妄想して、一人で楽しんでるのではないのでしょうか？私という彼女がいながらけしからん人物ですな」

千「渡辺さんも苦勞されますなあ……でも千歌はいつまでも応援しておりますぞ……」

曜「ありがたいお言葉です、高海さん……」

孝「んー？二人ともコソコソとなんの話してるの？……もしかして恋バナ?!千歌ちゃんもついに?!」

千「つて、ち、千歌はまだ恋なんてしてない！……曜ちゃんは本当に苦勞してるね……」

曜「千歌ちゃんだけが救いだよ……」

孝「えっ、なにになに？なんかまずいこと言った？」

うーむ、女の子の心は平凡な男子中学生には理解し難いものだ……

世の中のモテ男はすごいなあ……

曜「ところで、千歌ちゃんってどつか好きな野球チームあるの？野球好きな人は、どつ

かひとつのチーム応援してるイメージがあるからさ？」

孝「あ、俺も気になる。静岡ってプロ野球チームないし、近所のおっちゃんおばちゃんたちはみんな「ジャイアンツ」に決まってるすら！」とか「ジャイアンツしか応援せんとぞ！」って言ってるし……」

千「あははっ！今どき「すら」なんて言う人いないでしょ！」

？『へくちゅ！』

？『マルちゃん、風邪？最近流行ってるから気をつけルビイ！』

？『あはっ、大丈夫ずらよ♪……もしかしたら、誰かがマルの噂をしてるかもしれないぞら……』

千「うーん、誰がいるから好きとか、強いからとかはないんだけど、みかんと同

じ色のジャイアンツかな！」

孝&mp;曜「あー、わかっちゃいたけどやっぱ単純だった……」

おつ、曜ちゃんとハモった。

千歌ちゃん読みやすいから曜ちゃんと同じ考えになるのも頷ける、うん。

千「えー！なんで声揃えてそんなこと言うのー！」

曜「あははっ、ごめんごめん！千歌ちゃんわかりやすいから……」

千「む、よーちゃん千歌のこと馬鹿にしたなあ〜?!……そんな悪い子には……こー
だっ！」

曜「えっ?!わわっ!!」

【少年脳内実況中……】

孝「えー、ここからは解説に「ようちか評論家」のTAKAMARUさんをお迎えしてお届けしていきたいと思います。実況は私、「全日本ようちか実況協会」会長の秋月孝宏が務めさせていただきます。TAKAMARUさん、どうぞよろしくお願いします」

T「よろしくどうぞ」

孝「まずTAKAMARUさん、高海選手が渡辺選手を仰向けにしてマウントポジションを取りましたが、どう見えますか？」

T「んん、っ……尊い……あ、いや失礼。いや、見事です。高飛び込みで鍛えられている渡辺選手を不意をついたとはいえ、一瞬で押し倒し、マウントを取るなんて、恐らく高海選手ぐらいしかできない芸当ではないでしょうか？」

孝「おおっ、鋭い切り口から説明してくださいました。おつとここで、高海選手が動きます！高海選手の両手が渡辺選手の脇腹へ！あーっつと！くすぐり攻撃だーっつ!!!なんということでしょう！ようちかでやらせたら可愛くて微笑ましい行為ランキング（TAKKAMARUの「全国に住むようちかを推している男女に聞くようちかの尊いシーンベスト100（仮）」による）の第4位「マウントポジションからのくすぐり攻撃」を使ってきた！この技を使うとは、高海選手はやはり凄腕！幼なじみという間柄でなければそう簡単に使うことの出来ない代物!!この大技をいきなり使ってくるとは……TAKKAMARUさん、どう写りますか?!」

T「（。▽。）。∴ブツツ!!……と、ととと尊い……あ、いえ、すみません、こ、これはすごい一言です……他に言葉はいりません……ただあの二人が微笑ましい姿でじやれていて……それだけでもう……ふつくしい……」

孝「ああっ！TAKKAMARUさん！お気を確かに！TAKKAMARUさーっん!!!」

【少年脳内実況終了中……】

千歌ちゃんに馬乗りされるのか……

いかんいかんいかん！なんて不埒な考え思い浮かべてるんだ俺はー!!!俺には曜ちゃんという心に決めた人がいるんだ！それなのに……このっ……馬鹿埒者ーー!!!（意味不明）

つてかあんまり旅館十千方で大声出すと……

美「ちーーかーー!!!うるさっーい!!!」

千「うわあっつ!!!」

言わんこつちやない……美渡さんに怒られるつて。

……あ、言つてないや。

曜「はう……酷い目にあつた……」

孝「あはは、お疲れ曜ちゃん。はい、これ」

曜「あ！みかんアイスゼリー！ありがとっ！」

孝「止められなかつたお詫び……かな」

曜「ほんとだよ、もー！ちゃんと止めてよね？笑い死ぬかと思つたよ……ちゅー

……んー！甘くて冷たくておいしー！」

東京旅行の計画を練り終わった俺達は明日、

1. 沼津駅に集合、東海道線に乗る。

2. 乗る電車の終点の熱海駅で上野東京ラインとかいう近未来の名前をした路線？で東京へ。

3. そのあと兼ねてより夢だった山手線に乗って2駅で秋葉原まで。

という乗り換え方式で、かの地「東京」に向かうことになった。

因みに電車賃は片道2000円ちよい。

バイトのできない中学生にとっては、親のお小遣いを貰うとはいえかなりの出費だ。

往復4000円で……

みかん何個分だよ……

てゆか「上野東京ライン」ってなにさ？

名前近未来すぎる！

それともこれが東京の普通……？

孝「そういうえば、今日どうして家の近い曜ちゃんじゃなくて、千歌ちゃんが起こしに来てくれたの？」

普通に考えれば、家が歩いて3分圏内にある曜ちゃんが起こしに来ると思う。

それでも千歌ちゃんが来たのにはなにか理由があったのかな？

曜「ん？じゃんけんで千歌ちゃんが勝ったからだよ」

孝「あ、じゃんけん？そーなんだ……え？じゃんけん?!」

曜「う、うん……それがどうかしたの？」

孝「え、あー、だって、家も近くて彼女なんだし、曜ちゃんが来るもんだと思ってたから……」

曜「彼女……／＼／」

ああ、この子はほんとにウブすぎる……

そんな単語ひとつで顔を赤くしちゃうところはもうほんとに最& a m p ;高!!!

この子を彼女にできてほんとによかった……

幼なじみからのレベルアップは、俺にもたらすものが多すぎる！

曜「た、孝宏くんっ！」

孝「ん？なーに？」

まだ若干顔に赤みの残っている曜ちゃんはこちらを向き、俺の手を握りしめた。

曜「明日……楽しみだね！」

曜ちゃんの目は既にキラキラしてる。プレゼントを貰う前の、ワクワクしてる子供のよう。

曜ちゃんだけにようつてか？うるせーやい。

孝「うん、今日寝れないかも……なんて、あはは……」

曜「寝坊だけはぜつつつつたいにしないでよね？」

孝「わ、わかつてるつてば！もー、心配性だなあ〜？」

とは言つたものの、ちよつと不安。

休みの日は一日中寝ていられる系男子の俺としては、お目覚めの時間が昼の12時なんてザラだ。

今日それがよくわかつた。

最悪母さんか姉貴に起こしてもらおう、うん。

曜「もし、起きられそうにないなら……私が起こしに行つても……いいよ？」

孝「よろしくお願いします」

曜「ええ〜!?即答じゃん！頑張つて起きてよ！……まあ、起こしに行くけどさ……孝
宏くんの寝顔とか……見たいし……」

あー、キュンときた。何だこの子は、可愛すぎないかい？

ちよつとおじさん（15）、可愛すぎて今すぐぎゅーしたくなってきちやつたよ。

この可愛さ、全世界の悩める人々みんなに分け与えたいぐらいだわ……

……いや、やっぱり独り占めしよう。うん、それがいい。

孝「えへ、ありがと曜ちゃん！……でも、曜ちゃんに起こされるなんて、なんだか……夫婦みただね」

曜「ふつ、ふふふ夫婦?!それはつまり、孝宏くんが旦那さんつてこと……ひやく／＼

紅潮させた顔を覆う仕草が愛らしい。

この子、素でこれやつてるんだから可愛いつたらありやしない……ほんとにお嫁にもらいたいわ!

他愛のない会話をしながら二人並んで歩く海岸通り。

地獄の業火のように真つ赤に燃え上がる夕日は、俺たちを優しく照らしてくれる。

いつもより小さい歩幅。

曜ちゃんと帰る道をゆつくり堪能したい。

だがそんな時間も長くは続かない。

大好きな人といられる
この上なく楽しい時間はすぐに過ぎてしまう。

沼津は下河原、見慣れた十字路に差し掛かる。

そこがいつもの分かれ道。

辛いけど、また明日会える。

そう思えば笑顔で「ばいばい、またね」が言える。

そんな今が好きな自分がある。

曜「それじゃ、また明日ね！」

曜ちゃんの手を振り、十字路を左に曲がっていく。

孝「うん、またあし……あ、曜ちゃん！」

曜「ん？どうしたの？」

俺は歩いていこうとする曜ちゃんの方に駆け寄り、その身を優しく包み込んだ。

曜「!!／／」

曜ちゃんは俺との初めてのハグに緊張からか、体が一瞬硬直した。

しかしその硬直は本当に一瞬で、すぐにほぐれて俺を受け入れてくれた。

曜ちゃんの体は高飛び込みをして鍛えているとはいえ、やっぱ一人のかわいい女の子。力を入れると壊れてしまいそうなほど脆くて、小さくて、何より柔らかかった。

曜ちゃんの体の火照りが伝わってくる。

俺はたまらず曜ちゃんの頭をなでなでした。

女の子特有の甘い香りが鼻腔をくすぐる。

俺の理性、頑張つて保ってくれ……！

孝「……また明日、ばいばい／／」

曜「……うん、ばいばい／／」

曜ちゃんが俺の背中に手を回し、抱擁してくれる。

あつたかい。温もりを感じる。

15秒ぐらいそうしていた。

抱擁を解いてお互いに顔を見合わせる。

恥ずかしさから、顔を見せまいと笑って俯き、誤魔化す。

心無しか曜ちゃんの顔が少し紅潮しているように見えるのは、今にも水平線に沈みそ
うな、真つ赤な夕日のせいだろうか。天気予報は外れた。

曜「えへへ……あつたかかった……また、ぎゅってしてね？／／／」

孝「うん、曜ちゃんが望むならいつでもしてあげるよ！」

曜「えへっ、ありがと！……それじゃ今度こそ、ばいばい！」

孝「うん、ばいばい！」

今ある小さな幸せを、一つ一つ大事にしたい。そう思った。

明日は全力で楽しむぞ東京！

都会のオーラにやあ負けないぜ!!!

孝
a
s
i
d
e
o
f
f

曜 side

——5時間前

千「……孝宏くん来ないね？何かあったのかな？」

曜「私の勘だと、恐らく寝坊だね……」

千「あー、ありそうだね。今日のこととかも忘れてそう……」

曜「大いにありえるね……じゃあ起こしに行こつか？」

千「んー、じゃあ千歌が行つちやおつかなく！体動かしたいし！」（ニヤニヤ）

……んー？もしかして千歌ちゃん、意地悪のつもりかな？

付き合つてることを知つてて、私に「行くっ！」って言わせたいのかな？

そんな挑発に簡単に乗つかる渡辺曜ではありません！

曜「うん！じゃあ千歌ちゃんにお願いするよ！」

千「そーつか、そこまで言うなら曜ちゃんにゆず……ええ」

ぷぷぷつ、そんな素つ頓狂な顔しなくてもいいのに♪

千「ええええええええ?! どうしてよーちゃん！ここは「私が行くっ！」って言わないとじゃないの?! 仮にも孝宏くんの彼女でしょー?!」

曜「いや、千歌ちゃんが行きたいなら行ってもらっていいんだけど……」

千「ぶー！ よーちゃんつまんないー！ もつとこー、なんというか、こー、ないの?!」
ち、千歌ちゃんの語彙力が低下してきてる?!

曜「おおお、落ち着いて千歌ちゃん！ そーだ、わかった！ じゃんけんでどっちが行くか決めよ？ ね？」

千「えー？ ……まあ別に、曜ちゃんがそれでいいなら構わないけど……負けた時、後で文句言わないでよね？」

曜「言わないってば！ さ、じゃんけんしよ！」

曜& amp ;千「さーいしよーはグーー！ じゃんけん……!!」

曜 side off

千歌 side

まつたくもー、曜ちゃんのバカ……

あと千歌のバカ……なんでチョコキ出しちゃうのさ……

千歌はチョコキのままの手を見つめながら溜息をついた。
変なところで運を發揮する千歌を恨めしく思う。

曜ちゃんは、こーゆー時こそなんというか、「彼女力」というような何かを發揮するべ

きなのに……

孝宏くんのが大切じゃないか！……ってそんなんだつたら付き合っ
てないよ
ね……

あーあ、千歌も心の底から愛せる素敵な人、ほしいなあ……

曜ちゃんには負けちゃったけど、これからは応援するって決めたし……

……曜ちゃんにあつて、千歌にない。そんな魅力が孝宏くんには見えてたのかな……
千歌もやれることはやったけど、やっぱり普通怪獣ちかちかだったのかな……

普通で、取り柄もなく、地味な千歌。

かわいくて、元気で、誰よりも女の子っぽい曜ちゃん。

そりゃあ、孝宏くんも曜ちゃんを選ぶよね！

そりゃそーだ！

なら千歌は、曜ちゃんに負けなくらいかわいくなつて、元氣全開で、女の子っぽく
なつてやるんだ！

女の子は傷ついて強くなる！……って思う！えへ♡

そういうえば果南ちゃんは彼氏はおろか、好きな人もいないとかなんだとか……

じゃあ果南ちゃんに好きな人ができる前に、千歌は大好きな人に出会って、素敵な彼
女になつてやる！

よーし、千歌！これから頑張るぞー！

千「おーっ！」

そんな決意を胸に、千歌は孝宏くんの家へ向かうのであった！
 ドヤチカア……………！
 ○・ω・+○

孝「……………」

千「……………あつれー、ほんとにまだ寝てる……………私でさえ起きてるのに……………」

孝「……………」

千「……………おーい、起きないと食べちゃうぞ〜♪」

孝「……………」

千「もー、全然起きないじゃん！甘やかし作戦は失敗か……………そもそも起きてなきや効かないか……………」

これは昨日の夜相当遅くまで起きてたな〜？

そんな夜更かし坊やには、千歌がお仕置きをしちゃうのだ☆

千「それなら……………とりやつ！」

孝「ぐぶはっ?!」

千歌は寝ている孝宏くんのお腹に飛び乗った。

これなら流石に起きるよね？って思ってやったけど、想像以上の目覚め方だった。ふふっ、面白いものを見せてもらえた♪

千「もー！ やつと起きた！ 起きるの遅すぎ！」

ねえ曜ちゃん。

こんな面白くて、優しくて、かつこよくて、時々ダメな孝宏くんのこと、大事にしなかつたら……

千歌がもらつちやうぞ！

……なーんて☆

ちよつとだけ思っちゃった。

千「ほーら！ 早く着替えてウチに行くよーっ！」

千歌は止まらない！ 走り続けなきや！

十千万の元氣印！ 三人姉妹の末っ子、千歌！

今日も一日、輝こう！

孝「……ところで千歌ちゃん、その、部屋から出ていただけると嬉しいんですが……」

「？」

千「えっ？」

孝宏くんの方に目をやると、鍛え上げられた上半身を晒し、パジャマのズボンだけ履いていた。

あれ？　そういえばさつきまではちゃんとパジャマ着てたのに……

孝「着替えられないんですけども……」

千「へっ、あつ！　ご、ごめん!!!　／／／」

うう……　恥ずかしいのは孝宏くんのはずなのに、千歌の方が恥ずかしくなってきた。ちやつたよ……

……孝宏くんの腹筋、すごかったなあ……

千歌 side off

To be continued…

過去編 其ノ壺 ③

曜 side

曜「ただいま。ママ、明日のことなんだけど……つて何その顔？」

曜ママ「ん？別に曜とたちちやんがあんな所でハグしちゃうなんて、二人ともダイ・タ・ン！なんて思つてないわよ？ママ、それを見て「若いつていいわねえ」なんて思つてしみじみなんてしてないわよ？」

曜「見てたの?!?!」

どうしよ……見られてたの……？

うわーっつ!!! 恥ずかすぎるーっ!!!

孝宏くんとの、は、初めてのハグを、ママに見られた……

曜「うう……酷いよかみさま……」

曜ママ「まあまあ、いいじゃないの！曜みたいない時期がパパとママにもあつただから！はあ、懐かしいわ……」

ああ、なんでだかよく分からないけど、ママが遠い目しちやつてるう……

曜ママ「でもね、曜。あなたは女の子だから男の子、つまり孝宏くんを守られる立場にあると思うけど、それだけじゃダメ。しっかり2人で支えあって、これからの2人の長い生活の一日一日を大事にして生きていかなきゃダメよ?」

曜「え、うん、分かってる……っっていうか、なんかもう孝宏くんと結婚してるみたいな雰囲気出すのやめて!!!//」

曜ママ「あら?ごめんないね?つい顔を真っ赤にしてる曜を見たらからかいたくなっちゃって!曜ったら可愛いわね!」

曜「もー!!!いいから早くご飯にしてー!!!//」

曜ママ「うふふっ!ごめんごめん、夕飯はハンバーグだから許してね?しかも今日はチーズインなのよ?」

バチコーンつとウインクを決められてしまって、もう何も言い返せなかった……
てゆかとかく恥ずかしいんですけど……

曜「……チーズイン、ハンバーグかあ……」 w k t k

はあ、もう……仕方ない。ハンバーグに免じて明日の話は晩御飯の後にもしよう
……

好物を引き合いに出されたら逆らえない主義の曜ちゃんなのです!

……そういえばうちのママは孝宏くんのこと、たかちゃんって呼んでたっけか……

曜「たかちゃん……かあ……へへ／＼／」

あだ名ついていいかもしれないであります！

曜ママ「若いつて、本当にいいわねえ……♪」

曜 side of

孝宏 side

孝「……………／＼／」

？「……………どーしたそんなニヤニヤして……周囲の目も少しは気にした方がいいぞ？」

孝「どわーっ?! な、なんだ……勇人さんか、ビックリさせないでくださいよ……」

いきなり目の前に現れて声をかけてきたのは、姉貴の彼氏、終勇人さんだった。

勇「いやいや、目の前から歩いてきた俺に気づかないくらい自分の世界に入ってたん

かい……それで、どんな妄想をしてたんだ？」

孝「妄想なんかしてないですよ！ただ曜ちゃん……あつ」

勇「そこまで言っただんまりとかないよな？な？俺は孝宏をそんなやつだと思っただったぞ？俺を兄貴だと思っただけ接してくれっついても言っただんじゃんか。ぶっちゃけ

ちやえよ〜」

くっ、こうなつた勇人さんはもう姉貴でも止められない。いわば恋愛関係の話になると止められない状態とでも呼ぼうか。

孝「はあ……仕方ない、話しますよ……実はですね、曜ちゃんとさつき初のハグをしたんですよ……／＼／＼」

ごめん曜ちゃん……恥ずかしかったけど、言う以外道がなかったんだ……許してヒヤシンス

勇「お、おおおおお!!! ついにか!手を繋ぐことさえ出来なかったあのチキンボーイ孝宏がハグを!!! うーむ、これは曜ちゃんと近いうちに(バキューン)する日も近いか?!」
近くにいた奥様2人がこちらをみてギョツとした表情を浮かべている。

孝「ドデカイ声で何言ってますか?! ってか、勇人さんってそんなこと言う人でしたっけ?!」

勇「……俺がこうなつたのは誰のせいだと思つて——」

孝「ウチの姉貴っス!!! 申し訳ねえっス!!!」

あのバカ姉貴……ほんと勇人さんはこんな人じゃなかったのに……

勇「そんで? どうだったんだ、初めてのハグは? まあ感想は聞くまでもないんだが……言うだけ野暮かな? ま、聞かせてくれよ」

孝「はい……その……なんていうか……あつたかくて——」

勇「はいきた「あつたかい」！ハグしたら絶対に言う言葉ランキング1位だろそれ！」
孝「柔らかくて——」

勇「これまた出たよ「柔らかい」！ガチムチな男とは違う何かがあるかな何かだな！」

孝「甘い香りが——」

勇「はいはいはい！鉄板きたよ！「甘い香り」！女の子特有の甘い香りね！どういう意味だか知らんけど俺も明日奈のおかげでそれはよくわかる——」

孝「だ——っ！も——！勇人さんさつきからめつちやうるさいですって！語らせてくださいよ!!!」

勇「はははははっ！悪い悪い、ついやりたくなつちまうんだわ！」

姉貴もすごい人と付き合ってるなあ……

普段は真面目で冷静沈着、物怖じしなくてめちやくちやかっこいいのに、このモードになると誰にも止められないほどおかしな人になつちやうから困つたものだ。

黙つてりやほんとにただのイケメンなんだよな……黙つてりや。

勇「にしても孝宏がもうハグしちまつたか……っ！か付き合つてまだ2週間だろ？」

孝「そうですね、幼なじみなんで割とスつと行動出来ましたね。身体が勝手にハグ

しようとして、止められなかったというか……」

あの時はほんとに不思議な感覚だった。

誰かに操られているんじゃないかってくらい勝手に曜ちゃんにハグしに行つてた。

これはもしや——

勇「お前もしかして、果南に似てきてんのかもかもしれない？」

孝「めつちや同じこと思つてました！あの時、果南ちゃんが俺の身体を乗つ取つたのかもしれないですね！」

勇「ただあれは果南がやるからセーフなんだけどな。もしお前がそれをダイヤにやつてみる。殴る蹴るの暴行の後、暴言吐かれて身も心もズタボロだぞ？」

孝「ダイヤちゃんにやる勇氣はないかな……つてか、曜ちゃん以外やるつもりもないです！」

俺は永遠の曜ちゃん推しだからな！

曜ちゃん神推しの称号を与えてくれてもええんやで、神さま！（・ω・）キリッ

勇「よーし、それでこそ孝宏だ。……そんじやな、これから果南の家に行くんだわ」

孝「もしかして、いつものおつかいですか？」

勇「そ。早くしないと日が暮れちゃうわ」

孝「急いでいかないと船もなくなっちゃいますからね、お気をつけて」

さーて、俺も帰るか。

明日の準備もあるし、何よりも大事なイベントが、「お小遣い交渉」が控えている……この交渉でうまい具合にお小遣いを貰わないと、明日の旅行の楽しみが減ってしまう

！

なんとしてでも、1円でも多く貰わねば！

孝ママ「……それはダメよ」

孝「頼むよ母さん……この額じゃないとどうしてもダメなんだ……」

孝ママ「一体そのお金をどうするのよ……いくら東京だからって持って行きすぎじゃないの？」

フツ、その言葉を待ってたぜ母さん！

お小遣い交渉を始めて凡そ30分。粘りに粘った俺はついに母さんからこのセリフを導き出すことが出来た。

これで俺の勝利は9割9分9厘決まった！

孝「どうするのって、決まってんじやんか……いつも頑張ってくれてる母さんに東京

土産、買うためだよ……／＼／＼

孝ママ「あんた……」

……あれ？な、なんだこの張りつめた空気は？

これはあれか?!

「そんな見え見えな嘘つくくんじやないわよ!」的なやつか?!

俺の作戦はあえなく散りゆくのか……

孝ママ「……まったく言うようになつたじやないの〜!いいわよ!その額用意してあげるわ!」

孝「……えっ?」

孝ママ「だから、用意してあげるわよ、お小遣い!」

う、嘘やろ……?」

作戦成功……いや、大成功!!!

やつば母さん単純だわ!おだてればすぐ調子に乗ってくれる!だけどそんな母さんが大好きだZE☆

孝「ありがとおう!母さん最高やー!!!」

そして俺は手に入れた。

東京に行くため、遊ぶための大量の資金を!

いやー、中学生にとってこのお金は本当の本当に大金だ！

こんなに貰ったの中2の修学旅行以来だな……

これであれが買える……！

大きな希望を胸に、俺は自室に戻り準備を始めた。

……ん？母さんへのお土産？

か、買うに決まってるじゃん！安心してくれ！（安心院さんだけに）

孝「……つて、俺今誰に向かってこんなこと思ってたんだ……？」

なんかこの間もこんなことがあったような……

孝「あと安心院さんって誰だ……？」

孝宏 side off

千歌 side

千「あつ、志満ねえ！」

志「あら？千歌ちゃん。どうしたの、そんなに慌てて？」

千「えへへ、お小遣いちょうだいっ！」

志「あらあら、いつも以上に突拍子もないようなことを唐突に言うわね」

千「ほら、明日東京いくでしょ？だから日頃お世話になつてる志満ねえ、美渡ねえ、お母さん、お父さん、あとしいたいけにお土産つて必要だと思ふんだ！だからお願いっ！」
ふっふっふ、これであつてるよね？

孝宏くんから教わつた「秘技・お小遣いおねだりする時、家族にお土産買つてくることを名目にお小遣いアツプを狙うの術」はこういう時に使うものなんだろうけど、千歌に出来るか不安……

でもなんだか言つて志満ねえ優しいし、きつとお小遣いくれ——

志「ん、でも私はよく東京行くからお土産はいらないわよ？」

へ？

志「私より、お母さんにお小遣いのおねだりしたほうがいいんじゃないかしら？」

へ??

志「そ、れ、に。千歌ちゃんの考へてることなんて、手に取るようにわかるのよ？お姉ちゃんからお小遣いを集^{たか}ろうだなんて、千歌ちゃんは悪い子ね？」

千「ええええええ?!?!」

し、志満ねえ、強い……

敢え無く失敗だよお……

千歌は単純だから、思考が読まれてたのかもしれない……

志「でも、千歌ちゃんがお手伝いしてくれるなら、考えてあげてもいいわね♪」

千「ほんとっ?! わーい!!! 志満ねえだーいすき!!!」

志「ち、千歌ちゃん、話は最後まで聞いて……まず千歌ちゃんにはやつてもらったことがあります! まず、お客さんのお夕食運び。それからしいただきの散歩、果南ちゃんの家にかんと回覧板届け、それが終わったら……そうね、私の肩もみしてもらおうかしら! それをやってくれたら、お小遣いをあげるわ♪」

千「ぬええええええ?! そんなに?! 千歌、体持つかなあ……でも、お小遣いのため! 千歌頑張るよ!」

こうして千歌の長い長いお手伝いが始まったのであった——

千歌、ほんとにこの量こなせるのかなあ……? ?

千歌 side of f

To be continued…

過去編 其ノ壺 ④

孝宏 side

? 「うわあ、ほんとにまだ寝てる……昨日の夜、早めに寝られなかったんだろなあ
……」

? 「早めに起きてこつちに来て正解だった……よいしょっと」

? 「にしても……孝宏くんの寝顔、初めて見たけど……すつごく可愛いじゃん！ 普段
ちよつとクールっぽいイメージがあつたけど、こうして見るとなんか弟みたい！……つ
て孝宏くんは弟か……」

? 「さーて、起こしますか……すう……すう……」

孝 「どうも天ぷらそばの孝宏で……すう……すう……!!!」

? 「うわあああああ
?!?!」

大成功大成功!!

孝「はい!というわけでね、「寝たフリをしておいて起こしに来た曜ちゃんをすしらー〇ん りく風にどデカい挨拶決めちやいたいと思っちゃいたい大作戦」見事に大成功! ここまで上手く決まるとは……ってあれ?」

ベッドから飛び上がってどデカい挨拶かましたのはいいけど、肝心の曜ちゃんが見当たらない。

辺りを見回すと、ベッドの脇でひっくり返ってる曜ちゃんを見つけた。

そ、そんな体勢じゃ、み、見えちゃう……!

まあ紳士な僕は曜ちゃんの大事なところだから絶対に見ないんだけどね!ほ、ほんただからね!

っていうか今更ながら、「天ぷらそばの孝宏」ってなんだよ、オマージユ下手くそかよ……

孝「おーい、曜ちゃん。そのお……あの、スカートの中が見えちゃうぞ……?」

曜「んなつ?!?!」

曜ちゃん慌てて立ち上がりスカートを抑える。そして真っ赤になった顔をこちらに向けてる。

うわあ、目がマジだ。涙浮かべてこっち睨んでるあの顔は絶対に怒ってるやつや……

こういう時はまずおはようを言ってから、状況説明をするのが最適だろうか？

思い立ったが吉日！いや、吉日かどうかは知らないけど、とりあえず行動に移そう。

孝「えーつと、おはヨーソロー、曜ちゃん。それで、状況を説明するべきか、今すぐ謝るか、どつちをすべきですかね？」

あれ？なんか思ったことと違うことしてないかい？

これはあれか？

本音と建前逆になつちやう系アニメキャラクターか何かかい？

うーむ、俺にもそんな秘められし才能があつたとは……

曜「……して……てるの……」

孝「えっ？ごめん曜ちゃん、聞こえなかつ——」

曜「どうしてももう起きてるのーっ!!」

えっ、ええええええ?!?!

もしかして寝てなきやいけなかつたやつかこれ！

俺はそんなお寝坊さんキャラだったのか?!

つていうか、怒るところそこのお?!

曜「明日私が起こしに行くつて言つたのに……起きてちや意味ないじゃん……お嫁さんみたいなことしたかつたのに……」

曜ちゃん、もしかして昨日の俺の言葉を覚えてて、本当に寝坊してないか見に来てくれたのか。

しかもやる気満々だったのか……

孝「曜ちゃん……そっか、ごめんね？楽しみにしてたんだね……」

曜「ううん、いいの……私が一人で盛り上がってただけだか……ら?!」

もうなんか可愛すぎて抱きしめちゃいました。

まったく我ながら朝から元気なことですわ、ほんとに。

あ、でも俺の息子♫はぎゅーしたから「オハヨツ！」って挨拶しに来たわけじゃないですよ？ほら！朝ですからね！（威圧）

孝「……」

曜「た、孝宏くん……恥ずかしいよ……／／／」

耳元で囁かれて少しこそばゆくなっただけど、お構い無し。気が済むまでハグすることにしよう。

俺もしかしたらほんとに果南ちゃんになっってきたのかも……？

曜「もう……甘えちやつてき……でも、嬉しいな／／／」

少し機嫌が直ってきたかな？

ハグの効果絶大だなあ……

ちよつとして俺は曜ちゃんの背中中で組んでいた手を解き、曜ちゃんと顔を見合わせた。

昨日と同じで頬が紅潮した曜ちゃんは照れ笑いを浮かべて俯いた。

曜「えへへ……きつと何回やつても恥ずかしいんだろうなあ……果南ちゃんにやられるのはまた違う、恥ずかしいけどあつたかいハグ……／＼／＼」

孝「心も体もあつたかくなるね……／＼／＼」

よし、曜ちゃんの機嫌は直つたみたい！

果南ちゃんハグ師匠ありがとう！

果『うむ、よきにはからえ！』

にしても、今日の曜ちゃんの服装、可愛いなあ。

孝「白のブラウスに桜色のプリーツスカート、腰より高めのサツシユベルト。白のベレー帽も頭に乗せて……春らしいコーデだね！」

曜「そ、そうかなあ……えへへ、ありがと／＼／＼」

あつ、照れてる。かわいいなあ……

てゆーかさツシユベルト。これのポイントがなかなか高いわあ。

これ使いこなせるのスタイルいい人だけだつて勝手に思つてる。だつてあれ、ウエストサイズとか公衆の面前に晒してるようなもんだよね？わかんないけど……

ん？なんでそんなに知ってるのかつて？

姉貴のファッション見てたらそりやそうなるよ。

決して女装してるから詳しいみたいなのは無いから安心してくれ！（安心院さんだけに）

それに女装もしてないしね！そこも安心してくれ！（安心院さんだけに）

てゆーか昨日から思つてるけど、マジで安心院さんつて誰よ……

曜「そういう孝宏くんだつて、かっこいい服装してるじゃん！似合つてるよ！」

孝「そ、そうかな？似合つてるかあ……ありがと、うれしいよ！」

曜「白のカットソーにデニム、グレーのロングカーディガン……なんか高校生っぽい

！」

何この褒め殺し空間は?!

孝「ほ、褒めてもなにも出ないぞう?！」

曜「あー、俯いちゃつて……照れてるの？かわいいなあ……」

……言えない

……マネキン買いだなんて言えない……

俺のファッションセンスのなさは、きつとドン○西さんが見たら泡吹いて倒れるかもしれんくらい壊滅的だつて姉貴に言われた記憶がある……

言いつぎじゃね？泣くよ??

完全に復活した曜ちゃんはこちらを向いて微笑みかけた。

うん、天使。

曜「じゃあそろそろ行こつか？千歌ちゃんはもう沼津駅着いたみたいだよ！」

孝「ん、よつしや、行くか！魔都「東京」!!」

曜「ええ？ま、魔都??」

時刻は6時20分。

電車は6時46分に発車する東海道線。3駅行ったところ、つまり熱海駅がその電車の終点だが、そこで乗り換える。同じく東海道線だけど、何やら近代的な名前をした「上野東京ライン」とやらに乗るらしい。その電車で20駅乗ると東京に着く。そこでの時刻は9時14分。ざつと2時間半かかる。長え……

そして、かの山手線で2駅。時刻は9時21分。

合計で2時間35分の長旅を終えれば、秋葉原に着く。

そんな昨日考えたルートを頭の中で思い浮かべながら歩くと、沼津駅に着いた。改札前で手を振る千歌ちゃんを見つけた。

千「二人ともおはよっ！孝宏くんちやんと起きられたね！」

曜「そうなの！私が行った時は既に起きてて、逆にドッキリ仕掛けられてほんとに焦ったよ……」

千「え?!孝宏くん自力で起きたの?!奇跡だよーっ!!」

孝「ちよつと待つて、俺つてそんなにねほすけさんなのかな?!」

3人とも朝から元気全開！

これから始まる卒業記念旅行に高鳴る胸の鼓動を抑えきれない！

孝「うーっ!!!!楽しみすぎて待ちきれない！どデカいビルにたくさんの人！きつと何もかもが輝いてるんだろぅなあ……」

曜「内浦の海の輝きとは違う、何か別の輝きなんだろうね！」

千「輝き……それを追い求めれば何かが見つけられるのかな?……見つけたいな、輝きを!!」

俺たちの想いは一緒みたい。

ずつと楽しみにしてた東京に、今日、ついに足を踏み入れるんだ。

我慢できない、なにか叫びたい！

東京に向けての溢れんばかりの情を吐き出すしかない！

孝&mp;曜&mp;千「待つてろ東京!!!!」

くうく、叫んだ叫んだ！

「「ヒソヒソヒソ……」」

「まあ何かしら……？」

「朝から元気ねえ……」

「何……？まさか、あの人たちもかの東京を魔都だと認識している闇の眷属なのかしら？それでさつきから妙な魔力を感じていたのね……クツクツクツ、ヨハネの闇をも凌駕することができるかしら……？」

なんか色々言われてる気がする……

っていうか最後の人明らかに厨学2年生もとい中学2年生だろうなあ……

くわばらくわばら……↑(？)

2時間半の旅もそろそろ終わりを迎える。

さつきまで海が見えていて、「ここが横浜か……」なんて思っていたら、すぐに川崎や品川に着いてしまった。

残すは終点の東京駅。そして山手線。

千「……ん。んゝゝゝっ!! あ……たかひろくんおはよ……」

思わず笑みがこぼれた。

寝ぼけ眼を擦りながら、いかにも眠たそうに可愛らしく挨拶をしてきた千歌ちゃん。ぐっすり眠れたみたいで何よりだ。

千歌ちゃんも曜ちゃんも、熱海駅から数駅で夢の世界へと旅立った。

曜ちゃん、俺、千歌ちゃんの並びで座っていたから、2人とも俺の肩にもたれ掛かるっていう、至福でありながら結果的に肩こりに悩まされるという、いいのか悪いのか果たしてよく分からない状況に陥った。

目の前に座っていた優しそうなおばさまから降り注ぐ優しい微笑みだけが救いだっ
た。

孝「おはよ、千歌ちゃん……あ、せつかく綺麗に整えてた髪がボサボサになってる……」

恐らく俺の肩に乗っかっていた部分だろう、少しボサボサになっていた。

俺の服の素材のせいかもしれないと思ったので、とりあえず整えてあげた。

千「あ……／＼／＼」

孝「んー、手ぐしだとこんなもんかなあ?……ん、よし!これでだいじょーぶ!……千歌ちゃん?」

千「あ……！な、なんでもない！ありがと！／＼／＼」

孝「お、おう、どういたしまして……」

なんか顔が赤い？気のせいかな？

千「そういうとこ、ほんとずるい……／＼／＼」

——ビクツ——

孝「うおっ！なんじゃい?!」

俺の左肩に乗ってるなにかが反応した。

ん？左肩？それってつまり……

曜「……んにゃ……あゝ、たかひろくん……おはよゝゝゝう……にゃははゝゝゝ……」

孝「よ、曜さん……？ど、どうしたんです……？？」

曜「んゝゝゝ？どうもしにゃいよゝ？どうもしにゃい……どう……も……」

孝「お、おーい……どした、渡辺さん……渡辺の曜さん……？」

もしかして寝ぼけてるのかな？

だとしたらめちやくちや可愛いんですけど……

ご褒美ですか、神様？これはご褒美なんですか？

日ごろから仏壇にお線香をあげて、手を合わせておいてよかったあ……

御先祖の皆さんに手を合わせることは大事なことです。

皆さんも毎日、仏壇の前に座って手を合わせましょう。

お線香は毎日香。

【提供 日〇香堂】

千「どうしたんだろ？ 曜ちゃん？ 大丈夫？？」

曜「……はっ?!?!?!……お、おとおお、おはようございます!!!/ / /」

あ、復活した。

てかなんで敬語なのよ……

千「あは、おはよ、曜ちゃん。とはいっても千歌も今起きたばかりなんだけどね、あはは……って、曜ちゃん顔赤っ！」

孝「わ、ほんとだ！ 大丈夫？ 熱とかある？」

あまりにも真っ赤な顔だったもんだから、熱があるかどうか心配なのでおでことおでこをくつつつけてみました。

曜「ひやう?! / / ……た、たたた、孝宏くん?! は、恥ずかしいよお……/ / /」

孝「へっ？」

何も意識せずただただやった行為が実はとても恥ずかしいことだと気づくのに、それほど時間は必要なかった。

曜ちゃんの顔が、近え……

／＼／＼
曜 & a m p ; 千 「そういうところなんだって、早く気付いてくれないと、困るよ……」

秋葉原に着くまで、2人は口を聞いてくれませんでしたとさ……
グスツ……俺が何したってんだい……

千 「うゝゝゝつ、つーーいたーーー!!!」

そのまま伸び切ってスカイツリーみたいになりそうな千歌ちゃん。見ててなんだかほわほわする。

ほわほわ……?」

曜 「長かったねえ、でも、悪くはなかったかな……／＼／＼」

最後の方はよく分からなかったけど、曜ちゃんもぐーつと伸びをする。

ああ、お客様方困ります!

季節はずれにたわわに実ったスイカ2玉ずつをお体に備え付け、それを強調するかの
ように伸びをするなんて、困りますツツツ!!!

曜 「わ、どーしたの孝宏くん、鼻の下なんか伸ばして……はっ、もしかしていきなり

都会美女に目を奪われてるの?! もー!!!

孝「ち、違うよ! (見てたのは2人のたわわに実ったスイカ計4玉だけだよ!) てゆか、曜ちゃんが彼女なのに都会美女なんか見る必要なんかないよ!!!」

曜「あ……//」

孝「え、あ……//」

千「はゝあ、ごちそうさま、おなかいっぱいです。じゃ、千歌はお邪魔みたいだから内浦に帰ってみかんでも食べようかな?」

曜 & amp ; 孝「ごめんなさい!!! お願いだから一緒にいてください!!!」

千「はゝ……しようがないなあ……孝宏くんあとで東京のみかんパフェおごりね☆千歌たん☆ですつ☆」

孝「んええ?! ……まあ、こればかりはしようがないか……つてか千歌ちゃんそれはアウトや……」

千「え、だつて語尾に☆付けたらやつておかなきゃ!」

孝「そ、そうかもしれないけど……」

かなりアブナイとこ攻めたけど平気かな……?

まあきつとこの後も千歌ちゃんには色々と迷惑かけそうだしね……パフェぐらいはおごつてあげてもいいかな……ち○たん☆はダメだけどつ!

曜「あ、それじゃ私もそれをよろしくお願いするであります☆よ、曜たん☆ですつ☆」
孝「なんでえ?!?! てか曜ちゃんもそれ完全なアウトだから!!」

2人してどうしちやっつんだ……

東京に来たから流行りに乗っておきたい気持ちは分かるけど!!!

俺もやりたいですつ☆たかたん☆ですつ☆

……これはやっちゃまった、かなりアウトだ……

にしてもこれは、おかんにたくさんお小遣い貰っておいてよかったって話やな……パ
フェ2つかあ……

曜「にしても、ほんとに東京はおつきな建物しかないね。圧倒されちゃうよ……あ!
あれはこの前テレビで見たエデ○オン!」

千「ほんとだ! エ○イオンだ! エディ○ン!」

孝「そんな何回も連呼しなくていいのに……うわあ、○ディオン……ほんとにエディ
オ○だ……」

流れには乗りたくなるよねっ? よねっ?!

千「うわくくくっ！おつきなゲームセンター!!!これなんて読むの……?セ……セ……セくがく、セくがくだ!セくがく♪」

孝「うーわ、それどつかで聞いたことある……」

曜「孝宏くん見て見て!メイドさんがいっぱいだよ!はああ、メイド服かわいいなあ〜♡あの服ちよつとだけ貸してもらえないかな……?」

孝「コスプレシヨップ行くからもうちよつとだけ我慢して曜ちゃん!……つてあれ!スクールアイドル専門店!!!やっべ、こんなところにあつたのか!ちよつ、これは行くしかない!千歌ちゃん、曜ちゃん、行くよ!!!」

曜&mp;千「ええええええ?!」

想像以上に大きな建物だらけの世界に驚き、ちよつと興奮気味な俺たち。

いや、だつて沼津は内浦の片田舎から、日本の中心の最も発達している地域のひとつに來てるわけだから、そりゃこうなるよね?

当初予定していた目的地の神田明神やメイド喫茶、コスプレシヨップなどを回つて、2時間ほどこの秋葉原を探索したところで、時刻は12時近くになっていた。

千「ねえ孝宏くん、曜ちゃん。お腹すいてない……?えへへ、千歌ちよつとだけお腹がなりそうだよ〜」

曜「私もお腹すいたよ……孝宏くんはどう?」

孝「実は俺も結構お腹すいてるんだ……それじゃお昼ご飯にしますか？」
曜 & a m p ; 千「はーい!!」

千「あー、美味しかったあ♡こんな美味しいものをあんな安く食べられるなんて、都会は違うねえ……みかんパフェも美味しかった♡」

曜「内浦のものとはまた違った美味しさだったね!もしかして、東京で食べてるから……なのかな?」

孝「あはは、そうかもしれないね? 雰囲気によつて食べてるものが違つて見えることはよくあるみたいだから!」

いや、まさかあんな所で食べるとは思つてもいなかった……

ガス○やぞ○スト……沼津にもあるやんけ……なんでわざわざ東京に来てそんなところで食べるの……?

つて思つていた時代が俺にもありました。

雰囲気に押されるね、うん。

周りにはきやびきやびした、いかにも都会つて感じの高校生や社会人、ママさんたち

がいらつしやいました。

そんな環境にいて俺達は浮いてないかとても心配で心配で……
たぶんまともにフォーク使えてなかったと思う。

そんな思い詰めた状態だった俺に比べて、2人はとても楽観的でした。

千『わ！なにこれ美味しそう！最近ファミレス行ってなかったから、新メニューとか出てるの知らなかったや！でもやつぱりファミレスって安心するねえ……♪』

曜『だね！やつぱり「沼津にもあるところに行けば気持ちも落ち着く」説は的中だ！』

なんて言っちゃって……

なれない環境で齷齪あくせくしてビクビクしてた俺の惨めさよ……

「虚しいヤツ」だなんて口が裂けてもいわないでよねっ!!!

千「よーっし、それじゃあアキバドーム行きますか！」

曜「ヨーソロー！（*）▽（・）ゞ」

孝「2つ目の……聖地か……しかも今日は……」

曜「孝宏くん……？」

孝「え、あ、ごめん、なんでもないよ！行こっか！」

曜「うんっ！」

じゃあ見つけに行こうか、俺達の追い求める輝きを。
そしてこの目に焼き付けよう、μ sの姿を――

To be continued:

過去編 其ノ壺 ⑤

孝宏 side

曜「ごめん二人とも、ちよつとお手洗い行つてくるね？」

千「うん、いつてらっしゃい。ここで待つてるね？」

曜「ありがとう！」

孝「ふむ、お花摘みつてやつか……」

千「そうだけど、あんまりそうやって言っちゃダメだよ？ 恥ずかしいんだから……」

孝「あう……ごめん、声に出てたか……」

曜「ちよんがトイレに行くために、近くの広い公園に立ち寄った。」

ちよん「どのいいベンチを見つけて、そこに千歌ちゃんを2人、腰を下ろした。」

千「ふうふう、にしてもよく歩いたねえ？ お昼ご飯食べてから歩きつぱなしたもんな？」

孝「ん、そうだね……疲れた？」

千「ん、ちよつとだけ……でもでも！ 東京のキラキラに目がいつて、疲れとかあんまり感じてないんだ！」

孝「あははつ、そうなんだ？んーまあでも、俺も同じかな」

眩しいくらいビルの反射光、色鮮やかな店の電飾、眼前いっぱい広がる人の群れ……

何から何まで沼津では見ることの出来なかつた光景に釘付けになつたのは言うまでもない。

まあ、しつこい客引きにはさすがに焦つたけど、そこは俺も男ですよ。言うことは確しつこり言つて、そそくさと立ち去りました。

どうどう？こういうこと出来る男つてやっぱカツコイイ？

……つて、そんなこと思つてる男は既にカツコ悪いか。

アツハハハ……ハハ……ふう。

千「ねえ孝宏くん、ひとつ聞いてもいいかな？」

孝「ん？」

千「千歌と曜ちゃんつて、何がどう違うのかな？」

孝「え……？」

ど、どういふことだろう？千歌ちゃんがこんなこと聞いてくるなんて……何かあつたのかな？

千「少し長い話かもしれないけど、聞いて欲しいの……千歌ね、前に好きな人がいた

んだ。けど、その人には既に想ってる人がいて、その想われてる人もその人のことが好きだったの。明らかに叶わない恋だって分かってた……けど、諦められなかったの……」

孝「……」

千「だって、その人は千歌の恩人なんでもん……あの日、海で溺れそうだった千歌を救ってくれた……本当に命の恩人……」

孝「えっ……」

千歌ちゃんが海で溺れかけた……？

それを助けた人って……もしかして……

千「……その人は、すごくかっこよくて、優しくて、強くて、時々アホなことするんだけど、それがまた可愛くて……とっっても、素敵な人なの……」

そんな……

千「今でも千歌は、その人のことを心のどこかで想い続けちゃってるの……あはは、千歌はダメな人だね……」

でも千歌ちゃんは……

千「けど……もうこんな想いは抱いていちゃいけない……捨てなきゃいけない想いだってわかってる……けど……出来ないの……」

千歌ちゃん……

千「だから……諦めさせて……この想いを伝えられれば……きつと踏ん切りがつくから……」

千「千歌は……私は、孝宏くんのが好き……大好きなの……この世の誰よりも、孝宏くんのが大好き……」

孝「千歌……ちゃん……」

鼓動が速くなる。顔が熱い。

目に涙を浮かべて、頬を紅く染めた千歌ちゃんの真剣な眼差し。

俺は鈍感だから色んなことに気づけないけど、今の千歌ちゃんの気持ちは分かる。

大切に大好きな親友であり、かけがえのない幼なじみという存在である曜ちゃんと俺が好き同士で、付き合っている。

千歌ちゃんは優しすぎるから、きつと何かのきつかけで曜ちゃんを応援する側に回ったんだと思う。

けどそれは千歌ちゃんの心に深い傷を作ってしまった。

自分の気持ちに蓋をして、親友の恋を応援するなんて、簡単にできることじゃない。きつと、この上ない苦しみと絶望感があつたと思う。

千「ごめんね……楽しい雰囲気だったのに、こんな風にしちゃって……」

孝「っ……………」

千歌ちゃんの本気の想いには、俺も本気で向き合わなきゃ。

孝「ありがとう千歌ちゃん、凄く嬉しいよ……………」けど、その想いには応えられない……………」

千「うん……………」わかってる……………」

孝「でもね、俺は千歌ちゃんのことを好きだよ」

千「えっ……………」

伝えなきゃ、この想いは。

孝「自分を犠牲にしてまで、友達のを応援するなんて、普通の人じゃなかなか出来ないよ。それをやっちゃう千歌ちゃんはすごいと思う。」

千「だめ……………」だよ……………」

孝「俺と曜ちゃんの恋が実るように、陰ながら支えてくれていたんだよね……………」ありがとう」

千「だめ……………」そんなの……………」

孝「だから俺、そんな千歌ちゃんが好きだよ」

千「なんで……なんでそんなこと……言っちゃうの……孝宏くんには……曜ちゃんが
いるんだよ……？」

？「このバカ千歌ー!!!」

千「えっ？」

孝「なっ?!よ、曜ちゃん?!」

曜「なんで……なんで言ってくれないの……千歌ちゃんも孝宏くんのことが好きだつ
たら、お互いライバル同士で真剣勝負すればよかつたのに!なんで千歌ちゃんは……私
のために……」

孝「曜ちゃん……」

千「だって……2人の気持ちには気づいてたから、千歌より曜ちゃんの方が孝宏くん
は好きなんだって、知ってたから……千歌より曜ちゃんの方がお似合いだったから……
千歌は手を引くべきだって……」

孝「千歌ちゃん……そこまで……」

あー、やばい、泣いちゃいそう……

千歌ちゃん優しすぎるよ……

曜「なんで……なんで千歌ちゃんはそんなに優しいの……ずるいよ……うつ、うつ、うつ、うわあああああ!!!」

泣き出した曜ちゃんは、千歌ちゃんに抱きついた。

千「曜ちゃん……泣かないでっば……そんなに泣かれたら……千歌も……うううう、うわあああああ!!!」

抱きつかれた千歌ちゃんも大泣きする曜ちゃんを見て泣き出してしまった。

孝「仲良きことは美しきかな……二人とも、最高の親友だね……」

その後は二人が泣き止むまで、俺が二人を抱きしめていた。

二人とも大声で泣くもんだから、周りの人に「何事？」という目をされて変に注目されちゃった……

千「うつ、ひくつ、ぐすつ……」

曜「ううつ、ずびつ、ひぐつ……」

孝「……どう？二人とも落ち着いたかな……？」

千「うん、大丈夫……ごめんね孝宏くん……ありがと……」

なんて千歌ちゃん言ってるけど、まだまだ涙は止まらないって感じだ。

曜ちゃんは少しずつ落ち着きを取り戻しているみたい。

曜「もう……千歌ちゃんてば、涙で顔がボロボロだよ？」

千「ううつ、曜ちゃんだつてそうじゃんか……」

孝「いや、二人とも泣き顔だつて可愛いじゃない？ 自信持ちなさいな！」

曜「……孝宏くん、頼むからもうちよつとだけ空気読めるかな？」

孝「……はい、反省してます……ちよつと場を和ませようとして失敗しました……」

千「……ぷつ、あははははははつ！もう、そんなにしよぼくれた顔しないでよく、あく、可笑しいなあ、もう♪」

千歌ちゃん……

よかつた、元気になつたみたい。

千「あー、ごめん二人とも、ちよつと今度は千歌がお手洗い行きたいんだけど、いいかな？」

曜「うん、いつてらつしやい！」

孝「待つてるねくん」

でもよかつた、二人の関係にヒビが入ることがなくて。

お互いのことを思つて泣けるなんて、二人とも優しすぎるなあ……

そういえば、さつき千歌ちゃんが言つてた命の恩人つてやつ。あれはいつの事だったかな？

曜「ふふっ、小学校2年生の時、だよ？」

孝「あー、小2のときかあ……って、ん？曜ちゃんなんで俺の考えてることが分かったの？」

曜「幼なじみパワーを舐めないで欲しいなあ〜♪」

孝「Wow……」

そっか、小2のときか。

確かいつもの幼なじみグループで棧橋から飛び込みをした時だったか……？

ちゃんと準備運動をしなかった千歌ちゃんが飛び込みをした時に、脚がつれちゃって、溺れそうになったんだ。

そーだそーだ、だんだん思い出してきたぞ……

その時たまたま海の中にいた俺が1番に助けに行ったんだ。

あの時は本当に必死だったな……千歌ちゃんが死んじゃうかもしれない、って思ってた。

結局少し海水を飲んじゃっただけで、大したことは無かったんだけど、千歌ちゃんはきつとめちやくちや怖かったんだろうなあ、大泣きしちゃって……

それからあの棧橋から飛び込みするのを禁止されちゃったんだっけ。

曜「あの時の孝宏くん、すごくかつこよかった……思えばあの時からだったのかな？」

孝宏くんに恋をしてたのは……でも多分それは千歌ちゃんも同じことなんだろうね……」

孝「え、そうだったの？千歌ちゃんはなんとなくそこでなのかなって思うけど、曜ちゃんははてつきりもつと最近のことだと……」

曜「はあ〜〜、まったく、だから孝宏くんはダメダメなんだってば……乙女心を分かってないなあ？」

孝「う……ご、ごめん……」

曜「でも、そんな鈍感なところも、好きだよ」

ドキツとした。

唐突に、真剣な眼差しで、はっきりとした口調でそんなこと言われたらビックリしちゃうよ……

ああ、顔が熱い……

曜「ごめん急に……ちよつと不安になっちゃって……」

孝「う、ううん、平気。大丈夫だよ」

俯く曜ちゃんがとつても弱々しく見えて、気がついたら曜ちゃんの頭をなでていた。

曜「……ねえ、孝宏くん。私、キミの理想の女の子になれてるかな？キミが心から好きって思える女の子に……なれてるかな？」

俯いていた曜ちゃんがゆっくり顔を上げてこちらを向く。

綺麗なその蒼い瞳は、俺の目を真っ直ぐ見つめている。

その瞳には不安の色が滲み出ているのがわかる。

不安、焦り、恐れ……色々なマイナス思考が混沌として、その瞳を暗くしている。

けど、こんなことを今思うなんて、きっと俺はめちやくちやバカヤロウなんだろうけど……

そんなことを言ってくれる曜ちゃんが可愛くて、優しくて、つくづく俺は幸せ者だなんて思った。

孝「バカだなあ曜ちゃん。もうとつくになってるよ……」

曜「……えっへへ……／＼／＼」

ああ、本当に俺は幸せ者だなあ……

千「ふうう、二人ともおまたせ！」

孝「おつ、千歌ちゃんおかえり！……よし、じゃあほんとに今度こそアキバドームへ向かうとしますか？」

曜&mp;千「おーっ！！！！」

孝「ここが、アキバドーム……」

曜「おつきいねえ……」

千「おつきなゆで卵みたい……」

孝「ゆで……ええ……」

ついにやって来たアキバドーム。

その大きさに俺たちは圧倒された。

これでホームランの入りやすい球場とか言われている意味がわからない……

両翼100m、中堅^{センター}122m……

十分広いやろ……

曜「ねえ孝宏くん、あの法被を着てる女の人達は一体何者……?」

孝「ああ、きつとどこかのスクールアイドルの後援会の人達だろうね。あの法被は確

か……」

? 「岩手県のスクールアイドル、「みちのくシャイニーズ」ですわ!」

孝「えつ!だ、ダイヤちゃん?」

曜&p;千(だ、誰……?)

ダ「まさかこんな所で会うとは思いませんでしたわ……やはりあなたも来ていた

のですね、孝宏さん……そちらのお二人は？」

孝「あ、ああごめん、紹介するね？こっちは俺の幼なじみの渡辺曜ちゃんと高海千歌ちゃん。今は3人で東京観光してるんだ！……んで、二人とも。こちら、浦の星学院生徒会役員の黒澤ダイヤちゃん。ひとつ年上だよ！」

ダ「初めまして、黒澤ダイヤと申しますわ。以後、お見知り置きを」

千「わわっ、は、初めまして！高海千歌です！実家が旅館で、十千万つて名前です！えーと、それからえーと、さ、三姉妹の末っ子です！」

孝「千歌ちゃん落ち着いて、果南ちゃんと同じ年の人だよ？……まあ性格なんか果南ちゃんと正反対のしつかり者だけど……」

果『……くしゅん！……ん、なんか今、孝宏に馬鹿にされた気がする……』

曜「あはは……初めまして、渡辺曜です！」

うーん、この3人が一緒にいるとなんだか面白そうなことが起こりそうだなあ……

ダ「うふふ、可愛らしい方々ですわね……ところで孝宏さん、東京観光ということは今回ラブライブ！を見に来たわけではないのですか？」

孝「うん、本当は初めて来たアキバドームだし、生で見てみたいってのもあるんだけ

ど、今回は見送ることにしたんだ」

ダ「そうなのですね……まあ、私も今回はチケットが当たらなかったので、ライブビューイングの方に参戦ですわ。いまさつきまで物販でグッズを買っていたんですわ！」

孝「えっ？なにに、何買ったの？」

ダ「まずは岐阜の「鶺鴒フェアリーズ」のペンライト！新色ですわ！」

孝「おーっ！持ち手が緑なのか！前まで赤と青と黄色しかなかったからね！」

ダ「次に山梨の「フルーティーフラワー」のフェイスタオル！今急上昇中の新星スクールアイドルですわ！」

孝「へーっ！そんな新しいスクールアイドルがいたのか！知らなかったなあ……」

千「曜ちゃん曜ちゃん、千歌たちこの話についていけないね？」

曜「まったくその通りであります……スクールアイドルについては知らないことだらけだからねえ……」

いや、やっぱりダイヤちゃんのスクールアイドル知識には適わないなあ！

ダ「……孝宏さん、お二人が聞いてけぼりですわよ？」

孝「えっ？あ！ご、ごめん！」

話に夢中になっちゃってた！

恐るべし スクールアイドル 恐るべし

孝宏、心の俳句

曜「あはは、平気だよ？昨日スクールアイドルについて話してくれた時も目がキラキラしてて、止まらなかつたもんね？」

う、そんな熱く語ってたのか……

確かに前にダイヤちゃんに「孝宏さんは本当にスクールアイドルのことを話すと止まらないですわね……」って言われた記憶がある……

千「昔から孝宏くんはひとつのことにハマると、それを突き詰める性格があるからね」

孝「周りがよく見えなくなるなんてのはザラです……」

ダ「うふふつ……あ、すみません孝宏さん、私ルビイを待たせているんでしたわ！早く急に戻らなくては……」

る、ルビイちゃんを1人で待たせてるのか？！

ルビイちゃんは大丈夫だろうか……

孝「あ、なら早く行かないと！じゃあまた今度ね！」

千「あ、あの黒澤先輩！私たち来年度から浦の星に通うんです！学校で会ったら、仲良くしてください！よろしくお願いします！」

ダ「あら、そうなのですか?……ええ、もちろん仲良くさせていただきますわ。こちらこそよろしくお願ひしますわ」

千「えへへ……」

ダ「では、失礼します……今度はこの舞台に立っている姿をお見せしたいものですわね……」

ルビイちゃん1人で大丈夫かな……?

それが本当に心配だ……

曜「ほえ、綺麗な人だったねえ……まさに大和撫子! つて感じだった!」

孝「うんうん、だから学校でも人気は抜群らしいよ?」

曜「やつぱりそうなんだあ?……長い黒髪に切りそろえられた前髪……絶対和服着せたら最強だよ……」

着てるんだよなあ、和服……

今の曜ちゃんに言うときつと止まらなくなりそうだから言わないけどね。

孝「それじゃ、アキバドームをいろいろ見て回ろうか。といつても、中には入れないんだけどね……」

千「千歌は周りのお店とか見てるだけでも楽しいよ!……あーっ! ユニフォーム売ってる!!! 見に行っていない?! いいよね?」

あつ……こうなった千歌ちゃんの物欲といたら、もう……

てゆか、俺たちに見に行つてもいいかどうかの有無を言わさずにお店に行つちやつたよ……

曜「あー……こりや買うね……」

曜ちゃんも同じこと考えてた……

千「えへへっ！……わあゝゝゝ！カツコイゝゝゝ!!!」

千「……ごめんによさい……」

結局千歌ちゃんは買つちつた。

ユニフォームって高いのね、1着1万円弱するの！

お金儲けが上手だわ……

孝「謝らなくていいってば……ただ、お金の使い方には気をつけてよね？いつも言うてるけど……」

千「いやゝ、だつてユニフォームなんて見せられたら千歌、買わざるをえないじゃん？……はっ！もしやあのユニフォームから「買つて買つて光線」が千歌に向けて発射さ

れていたのかも……?!」

孝「んなわけあるかいなっ!!!」

千「わひやつ!!」

まったくこの子つたら……

油断も隙もありやしないっての……

ボケを入れるタイミングが唐突すぎるわ……

つかエセ関西弁は、本物の関西人の方に怒られるって噂があるよね、ヤバイ……

曜「あはは……まあ、次から気をつけようね？ やっちゃったことはどう足掻いても取り消すことは出来ないんだしさ？」

千「よ……曜ちゃん……？（´・`）？（´・`）？（´・`）？」

孝「こら、曜ちゃんも！ 千歌ちゃんをそんな風に甘やかしたらまたやっちゃうでしょ！」

曜「いや、だって千歌ちゃんのしよぼくれた顔を見るとどうしても優しくしてあげなきやつて思っちゃって……」

はあ、この子はこの子でとことん優しいなあ……

ええ子や……

あ、また関西弁使ってもた……あかんわあ……

あつ、またかんs (以下省略)

千「曜ちゃん……やっぱ曜ちゃんは優しいよお〜！曜ちゃん、ずう〜と仲良しでいようね!!!」

曜「うんっ!ずう〜と仲良し!!!」

うんうん、二人とも仲良しすぎていいなあ……

ちよつと嫉妬しちゃうゾ?!

俺も混ぜてよーっ!!!なんてね♪

孝「よしや、それじゃあ気を取り直して、ぐるつとアキバドームを回って見てみよう!」

曜&あま;千「おーっ!!!」

孝宏 side off

To be continued…

過去編 其ノ壺 ⑥

孝宏 side

あの後俺たち3人はアキバドームの周りを見て回った。

千歌ちゃんは美味しそうな匂いのする屋台に毎回のようにつられてどっか行っちゃうし、曜ちゃんは近くでやっていたスクールアイドルの衣装展見に行っちゃうし……

あれ……?今俺1人だわ……

アキバの、ど真ん中の、アキバドームに、沼津民がただ1人。

ものすつごい場違いなのでは?!

……つてそうじゃないわ、早く2人と合流しないと!

曜ちゃんの行った場所は分かるからいいとして、まずは当てもなく食べ物の匂いにつられて放浪する千歌ちゃんを探さねば!

あのみかん娘ってばどこ行ったんだか……

千「あ!おーい!たーかひーろくーん!!」

孝「あつ、千歌ちゃん!もー、どこ行ってたのよ……」

千「えへへ……それよりほら！みてみて！美味しそうなたこ焼きでしょ?!一緒に食べようよ！曜ちゃんもほら……って、あれ？曜ちゃんは？」

孝「曜ちゃんなら近くで開催してるスクールアイドル衣装展を見に行つたよ……たこ焼き美味そうだな……」

千「えーっ！まったく曜ちゃんってば……自由行動は慎むべきだよ……3人一緒に行動しなきゃダメなのに！千歌はおこだよ！「げきおこかんかanmar」だよ！」

孝「それ千歌ちゃんが言つちやうの？……ってか「げきおこかんかanmar」って何?!」「ぶんぶん」じゃないの?！」

この子は天然なのか、おぼかなのか……

まあ、これくらいおバかな方が面白いよね？

千「むっ、孝宏くん今なんか千歌のことバカにした？」

孝「きつ、気のせいだよ！」

千「ほんとかなあ……?」

なんなんだこのようちかの2人は……
君のこのろは舞いてるかい?
 読心術のスキルでも備わってるのかい?

……いや、違うな……ってか君こことってなんだ?

曲名か何かなのか……?」

孝「よ、よし、それじゃあ曜ちゃんの所に行こうか！よし行こう行こう……
あ、たこ焼きおいし♪」

千「あーっ！それ千歌のぶんー！！って、逃げたなー！！待てー！！」

孝宏 side off

曜 side

曜「ほわあ~~~~~っ！／／／」

つと、まづいませい、声が出ちやった……

でも、こんなもの見せられたら声が出るのも仕方がない……よね？

だつてすごいよこれ！ほんとに手作り?!

細部までこだわって作られたきらびやかな衣装……

フリフリのスカートは可愛くてキラキラしてるし、テカテカのパンツもめっちゃク

ルでかっこいい！

こんなものまで作っちゃうのか、スクールアイドルは……

曜「あれ……このグループ名は……」

赤を基調とした上着と白黒のベスト、白いスカートには赤いラインが入っている。全体の至る所に黄色があしらわれていて、リボンとネクタイも細部へのこだわりがあるのがわかる。それにみんなお揃いの黒いブーツ……

曜「これが、μ'sの衣装……」

「僕らのL I V E 君とのL I F E」って曲で使われた衣装なのだそう。

なんだろう……今度は声が出ない……

目の前にある9つの衣装に圧倒されてるみたい……

この衣装は他とは違う、何か異質な存在オーラを発している。

ここには私と目の前の9つの衣装しか存在しないのでは？と錯覚してしまう。

大袈裟じゃなく、ほんとに吸い込まれてしまいそうなほど、私はこの衣装に見入ってしまった。

孝「……やん……ちゃん……ようーちゃん！ボケーツとしてどしたの？」

曜「へっ……？あ、孝宏くん、千歌ちゃん」

肩をポンつと叩かれて現実には連れ戻された。

千「大丈夫？千歌たちが見つけてからずっとここでぼけーつと立ち尽くしてたから心

配しちゃった……」

あら、思いのほか長いところに突っ立っていたみたいだ。

そんなところを見られたとするとちよつと恥ずかしいというか、なんとというか……

曜「へ、平気だよ！ちよつとこの衣装に見入っちゃつて……」

孝「ん、この衣装か……えつ、これ……「ほららら」の衣装?!こ、こんな所で出会えるなんて……!!なんとという奇跡!!こんな神衣装をこんな間近で見られるなんて!!うつは、やっぱい！テンション上がってきたあ!!ちよ、これまじで写真とか……」

あ、これ孝宏くん止められないやつだ……

店「お客様、もう少しお静かにしていただけますでしょうか……それとこの展示会では撮影を禁止しておりますので、カメラ等の使用はお控え下さいませ……」

孝「あつ……す、すみません……」

曜& a m p ; 千「ププツ……!!」

一瞬で見事に止められたんですけど?!

孝「……笑わないでよ……／／」

静かにしないとだから吹き出す訳にはいかない……

でも……面白すぎる……!ププツ……!!

孝「ほ、ほら！早くドームに戻ろうよ、まだ色々見なきゃ行けないところもあるん

だし……っていつまで笑ってんの……／＼／

曜「ご……ごめんごめん……い、行こっか……千歌ちゃんも……ププツ……！」

千「そ……そうだね……行かないきやね……ププツ……！」

申し訳ないけど恥ずかしさで顔を赤らめる孝宏くんが面白すぎて……

孝「もー!!!早く行こうよー!!!」

店「お客様……お静かに……」

また言われてるし……ププツ……！

曜 s i d e o f f

孝宏 s i d e

時刻は15時55分。

ラブライブ！決勝は16時から開始だ。

そして今俺たちはアキバドームから離れ、かの有名なスクールアイドル……と言って

も、今や日本を代表するプロのアイドル「A—RISE」の出身校である「UTX高校」の巨大スクリーン前に来ている。

ラブライブ！開催にあたって、この巨大スクリーン前ではチケットや入場制限などなしに誰でも見られるライブビューイングが行われている。ただし家虎や光害などは問答無用で追放、嚴重な罰則が待っているらしい……

最近はどういった人たちへの制限が厳しくなったもんだ……

ところで俺はこの学校を「UTX高校」って呼んでるけど、人によっては「UTX学院」とか「UTX学園」みたいな呼び名があるらしくって、定まってないんだよね。

……まあ、今はそれに関してはどうでもいいんだけど……

千「おっきい画面だねえ……家のテレビの何倍だろ？」

孝「そうだねえ……10倍以上、かな……」

千「ん……？いやあ、千歌の家のテレビは安物だから、もうちよつと、いやもつともつとお高いと思うんだよね……」

孝「ん、値段の話なの?!」

曜「文脈がおかしすぎるよ……会話が高次元だよ……」

高海千歌、別名を「内浦の機関銃的会話蜜相娘」という……

曜「それ、絶対今適当に考えたでしょ？」

孝「……また心詠んだの？」

曜「んーん、若干声にでてたから……さすがにそれを詠めたらすごいでしょ。幼なじみのレベルじゃないよ」

……曜ちゃんなら詠めそうな気がするんだよなあ、なんて。

つーか今回の場合マシンガントークではないな……

曜「あつ、ほら孝宏くん、始まるっぽいよ！」

孝「おつ、ついに来たか……」

あつ、司会の人はやつぱりはつちやけてる人なんだ！

相も変わらずはつちやけてるなあ……

司会『みなさーん！はつちやけてるかーい?!?!?おーまたせしましたアー！これより！ライブ！決勝大会を開催いたしまアーす!!……まずこの決勝大会の先陣を切るの

このグループ！「Love Synergy」の3人でーす！曲は「Magical

Star!」！それでは、どうぞー!!!』

一気に盛り上がる会場。それはこのライブビューイング会場も同じで、辺りが先ほど

と一変してサイリウムの光で明るくなった。

曜「わっ、すごい光！まるで光の海だね……」

千「なんか曜ちゃん、そのセリフどこかポエミだねえ、えーつと……え、えもいぞ！」

曜「え？え、えもいかなあ？えもみある??」

千「あるある！めっちゃえもみ深い！」

※「エモい：英語の「emotional」を由来とした、「感情が動かされた状態」、「感情が高まって強く訴えかける心の動き」などを意味する日本語の形容詞。感情が揺さぶられたときや、気持ちをストレートに表現できないとき、「哀愁を帯びた様」などに用いられる」

From Wikipedia

……とまあ、wikiのニキに説明してもらいましたとき。

あれ、なんか今思ってたけど、今回のお話Wikipediaの説明しか未だまともな文章でてない気がするなあ……（メタアアアアアア!!）

それにしても、この子達はほんとにすぐ流行りに乗りたがる……

東京でももうそんな流行りつてレベルのものじゃないと思うんだけど……

千「ねえ孝宏くん、このグループはどの都道府県のスクールアイドルなの？」

孝「んー、「Love S y n e r g y」は山形県のスクールアイドルだよ。衣装がいつも地元特産品をイメージしてるものが多い、まさに「地元愛♡満タン☆」略して「じもあい」なグループなんだよ！」

曜「へえ〜…満タン☆の部分はどこに行ったの？」

孝「君のような勘のいい曜ちゃんは、嫌いになる訳が無いけどテンプレに則つて言う
と嫌いだよ」

曜「テンプレってなに?!もしかして孝宏くん今日はボケ役なの?!私ツツコミ役?!」

なんてわちやわちやしてるうちにLove S y n e r g yのパフォーマンスは終わ
った。

やっぱりさすが全国レベル、ダンスの振り一つ一つのキレとスピードが違うし、歌
も伸びのある力強いものだ。何より誰も笑顔を絶やすことの無いパフォーマン
ス…
相当な体力が必要だよ。

第一回ラブライブ!の時より格段にレベルの平均値が上がってる。

千「すごいねえ、まだひとつのグループしか見てないけど、スクールアイドルが人
気な理由がわかった気がする！」

孝「ほんと!?!それは嬉しいなあ!」

千「うん!だつてみんな、キラキラ輝いてる!自分たちでしか表現出来ない輝きを、思

う存分パフォーマンスで表してる……素敵だなあ♪」

曜「おおつ、千歌ちゃんもえもいね！」

千「うんうん！えもえものえもだね！（ーωー）？」

だからエモエモはもう十分だから……

語彙の喪失激しすぎるでしょ……

曜「あつ、そういうえば孝宏くんが目当てにしているグループっていつ出てくるの？」

孝「あれ、言ってなかったっけ？音ノ木坂学院発の伝説のスクールアイドル「 μ s」とUTX高校発の今や国民的アイドル「A—R—I—S—E」の二つのグループがゲストとして来るんだよ」

曜「えつ、そんなすごいグループが今日来るの?!」

千「そりやあ……こう、なるよね……」

千歌ちゃんはそう言うなり辺りを見回した。

サイリウムの光、華やかな法被、時々巻き起こる大きな歓声……

みんな μ sとA—R—I—S—Eが来るのわかってて見に来ているんだ。

もちろんそれは俺も同じ。ぜひ2人に μ sとA—R—I—S—Eの素晴らしさを見てもらいたくて、今回フリーライブビューイングに参戦したんだ。

司会「お待たせしましたっ！それでは皆さんお待ちかね！この2グループに登場してもらいましょう！」

孝「ついに来たか……」

曜「どんな人達なんだろう……？」

千「オーラとか凄いんだろうなあ……画面越しだけど」

司「まずは、第1回ライブ！優勝……その後も数々のイベントで上位を独占。今や日本を代表する国民的アイドルにまで上り詰めた、「スクールアイドルの祖」……伝説の3人組スクールアイドル、「A—R—I—S—E」だっっ!!!」

ウオオオオオオオオ!!!

孝「すっ、すげえ……」

千「なんて歓声……」

曜「名前を呼んだだけでここまで熱狂するなんて……」

思わず息を呑んだ。

その姿を見た時は時間がゆっくりに感じた。

そんなわけあるかいな阿呆って言われるかもだけど、彼女達の一挙手一投足はとても

しなやかで麗しく、無駄のない動きだった。

その動きに引き込まれるかのように俺は見入ってしまった。

無論、声も出さず、動くことも出来ず、ただ見つめた。

二人もどうやら同じみたい。

まあ二人の場合は周囲の歓声に圧倒されてるってのもあるかな。

その後のことはよく覚えていない。

確か周りと同じく三人でサイリウム振って、歓声を上げて、とにかくアドレナリンばらばら出てる興奮状態だったと思う。

気がついたら東京駅のホームに立っていた。

別にμ、sもA—RISEも見なかったことないわけじゃないし、映像なんてDVDが磨り減るほど見た。

だけどやっぱリアリアルタイムで動くμ、sを、A—RISEを見ると、どうにかんちやいそうな程興奮した。

これはドームで見てたら大変なことになってたかもしれない……

千「……千歌、見つけたよ……」

曜「えっ……?」

千「ドームに集まったあれだけの人だけじゃなくて、ライブビューイングの人達まであんなに興奮させるなんてすごいよ……今の千歌には絶対に出来ない……」

孝「千歌ちゃん……まさか……!」

千「うん、だから未来の千歌があれだけの人を興奮させられるように、今の千歌ができることをする……」

おいおいうそだろ……なんてこった……

千「千歌、スクールアイドル始めよう!」

曜「千歌ちゃん……見つけたんだね、輝きを!」

千「うん!いつも美渡ねえになにか始める度に言われるんだ、「どうせいつもの思いつきだろ、すぐ辞めるよ」って……でも今回は違う、絶対に違う。千歌の大切に取っついてある最高級のみかんを掛けてでも誓える。この想いは本物だつて!」

孝「そっか……本気、なんだね?」

千「?……うん、もちろん!」

孝「スクールアイドルは今や全国でも大勢のグループがある。その中にはプロのアイドルを真似て成功するグループもあれば、まったく伸びずに解散、なんてグループもあ

る……死ぬほど練習して、死ぬほど努力して、死ぬほど全力で駆け抜けた先にあの「ラブライブ！」があるんだよ？絶対どこかで挫折を味わう……それでも千歌ちゃんは諦めずにスクールアイドルを続けられる……？」

千「一度言ったら絶対に曲げないよ！千歌はどんな結果であれ、高校生でいる間はスクールアイドルをやり抜くよ！」

孝「よっしや！よく言った千歌ちゃん！それじゃあ俺は千歌ちゃんを全力でサポートする！千歌ちゃんがトップスクールアイドルになるために最強のアシスタントをする！」

曜「ええっ！孝宏くん協力するの?!」

孝「もちろん！千歌ちゃんがこれだけの決意を持って始めるんだから、サポートしてあげなきゃ！」

曜「そっかあ……サポートかあ……」

千「ねえ曜ちゃん、曜ちゃんもやってみない？スクールアイドル……」

曜「えっ?!いや、私は可愛くなんてないし、似合わないよ……」

ははっ、どっかの誰かに似てらあ。

これはひとつ、俺からも助言してあげるか……

孝「さっき見た^ら、sの星空凜さん、あの人も最初はそう言ってたんだよ」

曜「えっ?」

孝「凜は可愛くなんてない!髪だつて短いし、小学校のころスカート履いて学校行つたら男子に笑われたし……スクールアイドルなんて似合わない!」つて……けど、結果的に凜さんはトップスクールアイドルにまで上り詰めた。本当は可愛い格好をしたかったのに躊躇つてた凜さんが、フリフリのスカート履いて踊つて、トップスクールアイドル……」

曜「でも……」

孝「とんでもないシンデレラ・ストーリーだよ。けど、誰にだつてシンデレラ・ストーリーを歩むことは出来る。何も凜さんと同じ道を歩けつて言つてるわけじゃない。自分だけのシンデレラ・ストーリーを突き進めばいい。」

曜「……!!」

千「曜ちゃん、もう一回言うね。千歌と一緒に、スクールアイドル、始めませんか?」
曜「……………うん、わかった。私もやるよ!スクールアイドル!」

千& a m p ; 孝「曜ちゃん……………!!」

面白いことになつてきた!沼津発のスクールアイドル!グループ名は何にしようか

……

千「よーっし!帰つたら練習だーっ!」

曜「ええっ?!さすがに今日は疲れたよ〜!!!」

これから始まる二人のシンデレラ・ストーリー。

きつと誰も予想できない物語。

どう切り開いて歩んで行くかは、二人次第……ってね!

孝「あつ、欲しいもん買うの忘れた……」

孝宏 side of f

To be continued……

松浦果南は付き合いたい編

逃走者を捕まえろ!

? s i d e

? 「はあ……はあ……はあ……くっ、ここまで来ればきつと……」

薄暗い建物の裏側に逃げてきた私。

でもバレるのも時間の問題かもしれない……

? 「いた! あそこよ!!」

? 「ツ! ま、まずい!!!」

こんなすぐにバレるなんて……

まさか、行動を読まれていた……? ?

? 「前方ちゅーいっ! ずらっ!」

? 「へっ? うわあっ!?!?」

? 「捕まえたずらっ!!」

不覚……こんな簡単に捕まってしまうとは……

こういう時の花丸ちゃんは、なんでか知らないけどめっちゃ強い……
ル「花丸ちゃんしゅごい！よく千歌ちゃんを捕まえたね！」

花「体力では絶対に敵わないけど、千歌ちゃんの行動パターンは読みやすいから、先回りすれば簡単に捕まえられるぞら！」

千「ちえく、逃げ切れると思っただけだなあ……」

花「ふっふっふ、甘いぞらよ千歌ちゃん！……あつ、善子ちゃん！千歌ちゃんは捕まえたぞら♪」

よし（ヨハネー！）ヨ「ヨハネよっ！ふっ、やるじゃないぞら丸。さすが私のリトルデーモンね……って、他の子たちは？」

ル「うゆ、お姉ちゃんと梨子ちゃんはすぐ捕まえられたよ！特に梨子ちゃんは曜ちゃんの指示通り、薄めの本を置いておいたらびっくりするほど簡単に……」

梨子ちゃん……何してるのもう……

どうせその薄めの本って「カベドウウン」とか「カベクウイ……」とかいう本でしよ？

まったくどうしようもないなあ……

みかん置いてあつても千歌はつられないぞっ！

………多分。

花「けど、果南ちゃんと鞠莉ちゃんは足が速すぎるから捕まえられないんだ……」

うん、さすが果南ちゃんと鞠莉ちゃん! A q o u r s が誇る体力オバケ2人組!

果南ちゃんは知ってたけど、鞠莉ちゃんが果南ちゃんと張るぐらい体力あるとは30分前まで知らなかった……

まあ、前に1年生と3年生が仲良くなるためにドッジボールをして善子ちゃんに聖痕ステイグマを付けたぐらいだし、鞠莉ちゃんも運動は得意だよな。

ヨ「クツクツク……ならばこのヨハネの出番みたいね……ずら丸、リトルデーモン囉 ヨーソローとリトルデーモン孝 タリオン宏を呼びなさい。ここからはこの私、ヨハネが指揮を執るわ……」

花「おおつ、善子ちゃんがすごいやる気ずら……」

ル「しゅごい……」

ヨ「だから! 私はヨハネよつ!」

あ、今更だけど、私たち A q o u r s は今、浦の星の校舎を使って「Run for ”N o p p o P a n” 逃○中」をやってるんだ

題名の通り、のつぽパンのために走る!

「これはのつぽパンを掛けた、少女達の熱い熱いバトルなのである!」つてさつき鞠莉ちゃんが高々と宣言してたんだよね。

なんという花丸ちゃんが一番頑張れそうな戦いなんだろう……
あ、ちなみにチーム分けは

逃走者：千歌、梨子ちゃん、果南ちゃん、ダイヤさん、鞠莉ちゃん

ハンター：曜ちゃん、善子ちゃん、花丸ちゃん、ルビイちゃん、孝宏くん

いや、孝宏くんいて助かったよ

ちようど5vs5になってやりやすくなった！

あ、さらにちなみに、なんでこんなことしてるのかと言うと……

——1時間前——

鞠「ねえかなーん、アップでいつも淡島神社の階段とか学校の外周を走ったりしてるけど、なんか飽きてこない？」

果「えっ、そうかな？ 私は楽しいよ！淡島神社からの眺めは良いし、学校の周りもめっちゃのどかで走ってて気持ちいいし！」

鞠「あー……果南はそういう子だったわね……あつ、千歌あああつち!!!」

千「うにゃあ?! な、なにに？急にどしたの鞠莉ちゃん?!」

びつくりしたー、急に鞠莉ちゃんが呼ぶもんだから変な声でちゃったよう……

鞠「千歌っち!鬼ごっこしよう!!」

千「はえ?」

鞠「だーかーらー、鬼ごっこ!しよ!」

千「……なんでえ?」

うーん、まったく意図が読めない……

なんで鬼ごっこ?これから部活なのに?

鞠「アップでランニングするより、何か掛けてみんなで鬼ごっこした方が、より効率的に体を温められるんじゃないかなって!何よりその方が燃えるわ……」

千「おおつ、鞠莉ちゃんがあツい……燃える女だね!うん、楽しそう!千歌は賛成だよ!それじゃあ千歌、みんなにも声掛けてくるねー!」

果「あつ、ちよつと千歌!……つてもものすごいスピードで行っちゃったよ……」

鞠「ふふつ、千歌っちは元気な子ね♪」

—— 現在 ——

そんなわけで、いま鬼ごっこをしながらアップをしているというわけなのだ!
タイムリミットはあと20分。

果南ちゃんと鞠莉ちゃん、捕まらないでよ〜っ！

おっと、話しちやいられない……

隙を見てこの2人から逃げないと……

特に捕まったからといって逃げちゃダメなわけじゃないし！

花「……これでよしっ！」

千「……ふえ？」

ヨ「千歌が逃げないように縄で縛らせてもらったわ。このまま牢屋理事長室に行くわよ」

千「そんなあ〜!!」

ああっ、千歌の迷惑は1年生3人に簡単に詠まれていたんだね……

行動だけじゃなく思考まで……

孝宏くんのこと馬鹿にできないや〜……

千「……つてか、理事長室を牢屋に使うってどうなの〜?!」

千歌 s i d e o f f

曜 s i d e

曜「あつ、電話……花丸ちゃんからだ……もしもーし……うん、一緒だよ」

孝「んー、見事に誰もいないなあ……もしかしてみんな捕まえたのかな?」

曜「善子ちゃんが?……え、なんでこのポリウムで聞こえたの?……あー、あつは、適当に流しておいてー……うん、わかった!じゃあすぐ行くね!……孝宏くん、正門に1年生が3人いるみたい。善子ちゃんが指揮を執るっばいから集まって欲しいんだってさ!」

孝「ヨハネつちが指揮を?うーん、不安だ……まあとりあえず行きますか」

曜「ヨハネつちって一体なに……?」

私と孝宏くんは共に行動していて、相手を挟み撃ちにしよう作戦をしているであります!
す!

さつきはダイヤさんを挟み撃ちして捕まえたんだけど、果南ちゃんには驚きの高速フエイントをかけられて逃してしまった……

花丸ちゃんによると、私の指示通りにやってくれたみたいで梨子ちゃんは瞬殺だったみたい。千歌ちゃんは私たちと同じ作戦で捕らえたいらしいから、あとは俊足果南ちゃん・鞠莉ちゃんツートップだけ!

残り時間は……あと15分か……

孝「あつ、おーい!」
ずら・ヨハ・ピギ、3人衆」

「その呼び方やめいっ!!」

曜「あつはは、息びったりだ♪」

ヨ「まったく……それより、果南と鞠莉の2人をどう捕まえるか、私に作戦があるの♪」

孝「よびこちゃんやる気だね」

ヨ「よびこ言うな! ってかよびこって何よ!」

さつきはヨハネつちだったのに、今度はよびこなんだ……

善子ちゃんあだ名多すぎない?

ヨ「いい? まず鞠莉よりも果南よ。果南はダイヤとか鞠莉に比べて頭は良くないわ。

だからきつと単純なトラップに引つかかると思うの。……曜! 果南の好きな食べ物は何?」

ん? 果南ちゃんの好きな食べ物……

曜「……はっ、海鮮系! 確かプロフにサザエとかワカメが好きって書いてあった気がする……」

ヨ「その通りよ! そんなわけで昨日鞠莉がシャイ煮を作った時に残った海鮮系の食材が偶然部屋のクローラーボックスの中にあつたからそれを使うわ!」

ル「ピギツ!? そ、そのサザ○さんとか使つて大丈夫なのかな? 衛生面と鞠莉ちゃんの

に……」

孝「多分平気だと思うけど……あ、でも、サ○エさん呼びはアウトだよルビィちゃん」
 つて孝宏くんも言っちゃってるし……

花「つていうかなんで鞠莉ちゃんはシャイ煮そんなホイホイ作れるずら？一杯10万円するずらよ？謎ずら……」

曜「まあ、淡島ホテルを経営してて、その上浦の星の運営にも携わっている家の娘だからね。高級食材なんかいくらでもあるんじゃないかな？」

もしここに果南ちゃんがいたら、「これだから金持ちは……」つて絶対に言ってたと思う……

ヨ「とーに！か！く！この食材たちを備品室にある七輪で焼いて果南をおびき寄せるわ！あ、焼く人はコスプレしてバレないようにするのよ！」

果南ちゃん、そんなものに引っかかるほどバカじゃないと思うんだけどなあ……

花「誰が焼くずら？」

ル「この中で一番料理上手なのは……」

ヨ「曜か孝宏のどっちかね……」

孝「あつ、なら任せて！変装して声も変えれば果南ちゃんにはバレないはずだから！」
 曜「確かに……孝宏くん声変えるの得意だよな？かわいい女の子っぽい声からしやが

れたおじいさんの声まで出来るもんね！」

孝「密かに練習してる特技でもあるのだ！」

ヨ「よーっし、それなら早速やるわよ！時間もない事だし！」

この作戦、失敗する予感がするよ……

いくら果南ちゃんでもさすがにこんなバレバレな作戦に引つかかるわけないって

……

曜 s i d e o f f

孝宏 s i d e

孝「んー、いい具合に焼けてきたな……そろそろいい感じになってきたんだけど……
果南ちゃんはいない、か……」

浦の星にいる事務員さんをお願いして事務員さんの制服を貸してもらって、絶賛海の
幸たちを焼いております。

事務員さんとはよく話す仲で、いろんな悩みを打ち明けたり、恋愛相談なんかもある
ほどお互いに気を許している間柄なんだ！

めつちや話すわけだし、声真似も多少上手くなった。

孝「……にしても、こんなところで焼いてたつて果南ちゃんが気付くわけ……」

果「あつ、そのサザエもういい感じ! 焼きすぎちやうとサザエ本来の美味しさを失つちやう!」

来　　ち　　や　　つ　　た

孝「あ、ま、松浦さん、こんにちは」

ちよつと声が上がったアアア!!!

これはまずい、バレた? バレたのかアアア?!

果「……あ、事務員のお兄さんかあ、こんにちは! 海辺じゃなくてどうして学校で浜焼きなんかしてるの〜?」

バレてないツツツ!!!

これで気づかないの素晴らしいな!!!

孝「えつ、あ、あはは、ちよつと頼まれてね。先生達でこの後集まつて軽い宴会をやるから、準備をね……そうだ、ちよつと食材買いすぎちやつたから松浦さん食べる?」

果「えつ? いいの?!」

孝「もちろん! 僕たちじゃ食べすぎちやうから、食べてくれると助かるよ」

果「ひひつ、ラッキー♪お兄さんありがとーっ!……いっただつきまーっす! はむっ

……んーっ！美味しーっ！幸せだあ〜♡」

孝「松浦さん、見ててこつちが幸せになるくらい美味しそうに食べるね」

果「えへへ……実はサザエ大好きなんだ〜……もうーっ食べてもいい？」

孝「へえ、そうなんだ？うん、もちろん！もつと食べて食べて！」

果南ちゃん、本当に幸せそうに頬張るなあ〜。

これは果南ちゃんをお嫁さんにする人はきつと毎日の食卓が楽しくなるだろうなあ

……

そういえばこの間千歌ちゃんたちが話してた果南ちゃんの好きな人って誰なんだろ
う？

ダイビングショップによく来てる背の高い割とイケメンな男の人って言うってたけど、
どんな人なんだか……さかなかなんだか……

……つと、なんか果南ちゃんの食事シーン見てほっこりして終わるところだった。

果南ちゃんがこのサザエを食べ終わったら出撃の合図を出さなきゃ！

果「ふーっ、美味しかった〜♡」

孝「あははっ、いい食べっぷりだったよかな……松浦さん！」

果「お兄さんの焼き具合が上手だったからだよ〜！よっし、それじゃあ……」

さあみんな、準備万端か？

満を持してこの掛け声を!!

孝「今だっ!みんな、墮天ツ!!」

「「うおおおおお!!!」」

よしっ、作戦通り!

このまま呆気にとられているであろう果南ちゃんを捕まえれば……

果「ふふっ……甘いね、孝宏」

孝「えっ……」

かわされた……?

完全に虚を突いたはず……

なのにどうして……

しかも俺の名前、なんで気づいた……?

果「ふふっ、どうしてって顔してるね……実は最初から気づいてたんだ。事務員のお

兄さんが孝宏だって」

孝「そんな……」

変装も声真似も完璧だったはず……

なにどうして……

花「そんな悠長に話している暇はないぞら。はい、確保ぞら!」

果「あつ」

ヨ「よくやつたわずら丸！漆黒の闇に染まりし虚空に囚われていた憐れな人間を現実
に引き戻すのと同時に、天の鎖エレキドゥでその身を束縛せしめるとは……」

え、エレキドゥってギルガメッシュがどうかのなにかだよね？

堕天使関係くない？

曜「つまり要約すると、隙をつけて果南ちゃんを捕まえてすぐに縄で縛るなんて花丸
ちゃんすごい！ってことだよね……」

果「これは予測してなかったな……やるじゃんマル♪」

ル「花丸ちゃんしゅごい！」

孝「っていうか、果南ちゃん！どうしてわかったの?!」

果「よっぽど変装と声真似を見破られたのが悔しいんだね……教えてあげるよ。事務
員のお兄さん、私の事を松浦さんなんてもう呼ばないからね。それに孝宏よりもう少し
背が高いよ」

松浦さんなんてもう呼ばない……？

だって彼と果南ちゃんはそんなに深い関わりなんてないはず……

いや、まさか……

瞬間、俺の中で全てが繋がった。

果南ちゃんのことを松浦さんと呼ばない。

背が俺よりも高い。

話していて果南ちゃんも初対面な感じではなかった。

……まあそれは、相手が俺だと分かっていたからなのかもしれないけど……でも、なんとなくわかったよ。

ちよつとカマかけてみますか……

孝「なるほど……果南ちゃんが恋してるのは事務員さんなんだね……」

果「なっ?!なんでそれを……//」

あつ、やつぱり……

? 「それは本当なの果南?!?!」

曜「鞠莉ちゃん?!」

果「鞠莉?!どうしてここに?!」

鞠「果南、あの事務員のことが好きっていうのは本当のことなの?!好きな男が出来たっていうのは知ってたけど、まさか浦の星の職員だったなんて……」

果「いや、それは……//」

ヨ「クックック……かのアルテミスが穿つ純心貞潔の女神を貫く矢に射止められた

ようなね、鞠莉。貴女も天エレキックの鎖で縛らせてもらったわ……」

鞠「What?……Oh my god……」

ル「善子ちゃんしゅごい！これでルビイたちの勝ちだね！」

曜「果南ちゃんを捕まえる作戦で鞠莉ちゃんまで捕まえられるとは！」

孝「アホな作戦だと思つてたけどこんな結末になるなんて……」

ヨ「アホな作戦言うなっ！ここまで計算してあの作戦を決行したのよ……」

花「絶対鞠莉ちゃんを捕まえられたのはたまたまずら……それよりのっぽパンずら
!!!」

鞠「Sorry 果南、果南のことだったからいてもたつてもいられなかったわ……」

果「ううん、そこまで想つてくれて嬉しいよ。ありがとう鞠莉♪」

これが噂に聞く「かなまり」か……非常によき、尊みが深い……

……なんか梨子ちゃんみたいになってきた、どうしよ。

花「それじゃあ、理事長室に行くずらっ！」

「「浦の星の事務員さんのことが好きい〜?!」」

果「ちよっ、ダイヤ、千歌、梨子ちゃんまで！そんな大きな声出さないでよ〜！」

花「聞いた時は本当にびっくりしたずら。まさかこの学校の事務員さんがダイビングシヨップによく通っている人で、果南ちゃんの想い人だったとは……」

梨「ホシは意外と近くにいたのね……」

千「ホシってなーに？」

孝「探偵とかが犯人を指すときに使う隠語だと思うけど……」

曜「それでそれで！今その事務員さんのこと、なんて呼んでるの??」

果「いやっ、別にそれは……」

孝「果南ちゃんは大体呼び捨てか、ちゃん付けで呼ぶよね。男に対してちゃん付けは無いだろうし、薫かわるって呼んでるんじゃない？」

果「……ぶっぶーですわ……／／／」

曜「孝宏くん、果南ちゃんって昔から嘘をつく時は、小声で本当のことと逆のことを言うよね」

孝「そうそう、そうなんだよねえ……ってイダダダッ！果南ちゃん！無言でヘッドロツクしないでえく!!」

えっ、力強つ!!!

ちよっ、無理無理抜け出せない!!!

ダ「ズバリ！何がきっかけで恋に落ちたんですの？」

果「ええ？なんか恥ずかしいよ……／＼／＼」

ヨ「もつたいぶらないで教えなさいよっ！」

果「うう……さ、最初はこの学校の事務員つてことは知らなかつたんだ。ただお客さんとして来て、レクチャーして、楽しんで帰つてもらつて……それを繰り返していくうちに彼の仕草や言動、時折見せる笑顔なんかにどんどん惹かれて……／＼／＼」

花「なんか聞いているこつちが恥ずかしくなつてきたずら……」

ル「でも、素敵な恋の落ち方だね！」

ヨ「まさにFall in Love！」

梨「そのまんまね……」

孝「は、早くヘッドロック解いてください……」

理事長室に着くやいなや、千歌ちゃんたち3人の落胆する声が響いたけど、その直後に顔を真っ赤にした果南ちゃんを見て何事か！つてなつてたから、事情を説明したら……ご覧の通り質問攻めによつて果南ちゃんの顔はさらに真っ赤に……つていう状況。

果南ちゃんが恋してるのは浦の星の事務員、佐々木薫。

今年から浦の星の事務員として赴任している。

高身長、端正な顔立ち、優しい人柄から女子生徒からの支持率が非常に高い。

先生じゃなくて事務員さんにみんなお熱つて学校じゃなかなかないよね……

でも、先生と禁断の恋をするよりはぜんぜんオツケーなの……かな？

まあご存知の通り、果南ちゃんの色恋沙汰にはまったく興味を示さないサバサバ系女子だから、どんな人が赴任してこようとまったく興味ナシだったわけ……

そんな薫くんは赴任したての春、たまたま俺の目の前で荷物ガシャーンしてズッコケたもんだから、介抱してあげたんだよね。

そこからちよくちよく会う度に話したりして、仲良くなっていた。

あ、そういえば！最近できた趣味がダイビングって言った！

ダイビングってところで気がつくべきだった……

俺に海の中はあーだこーだって楽しそうに目を輝かせて話してたっけ……

教えてくれる人は美人さんで、優しくて、最初はただただ潜るためだけで店に行つたけど、最近はその子とお話するために潜りに行つてるのかもしれない……

………ん？それってもしかして……

鞠「もしかしたら彼も、グラーマラスボディで美人で優しい果南のこと、好きなのもかもしれないわね♪」

果「そんなことない……だって薫は私より大人だし、女の子からの人気も高いし、それなのにわざわざ私のことを好きになるなんてありえないよ……」

孝「ねね、曜ちゃん曜ちゃん！」

曜「ん？どうしたでありますか？」

孝「果南ちゃんあんなこと言ってるけど、実は薰くんが（カクカクシカジカ 四角いムーヴ CONTE新登場 ダイハツから）って言ってたんだよね」

※実際の発言とは異なります

曜「えっ！それってまさか果南ちゃんに脈アリってこと?!」

孝「ちよっ、シーツ！果南ちゃんにバレちゃう！」

曜「あつ、ごめんごめん……って、なんで果南ちゃんにバレちゃダメなの？」

孝「そりやあだつてほら、この前曜ちゃんの誕生日のとき、曜ちゃんの気持ち知っておきながら、わざと俺が曜ちゃんにしようとしてること言わずに面白がつてたでしょ？だからちよつとその仕返しをば……」

（詳しくは「渡辺曜生誕祝賀祭2019 前編」を読んでね！）

曜「なるほど、孝宏くんもワルいオトコですなあ……よっしや！曜ちゃんもその作戦ノッチャうであります！」

孝「よしきた！さすがは我が彼女曜ちゃん！話のわかるオンナですなあ」

曜「えへへっ、期待に添えて何よりであります！」

「ここで1つ、曜ちゃんとの密約を交わした——」

果「……ねえ、孝宏、曜」

孝「ん?どしたの果南ちゃん?」

曜「顔まだ真つ赤だね……」

果「それはいいのっ!／＼／」

曜「わっはあ、怒った〜!」

孝「こらこら、刺激しないの〜!……それで果南ちゃん、何かあったの?」

(「ε、」。) ブーってほっぺたを可愛く膨らませて拗ねた曜ちゃんは、めっちゃめっちゃい

じりたけいけど今は一旦放っておいてと……

果「あ、うん……えっと……2人はさ、どうやって付き合い始めたの……?」

孝& a m p ; 曜「「え」」

果「どつちが告白した……とか、好きになったきっかけ……とか、何かない……?」

孝& a m p ; 曜「「え」」

梨「あつ、それ私も知りたい!こつちに来た時は既に2人は付き合ってたんだもんね

!どうやって2人の関係が始まったのか気になる♪」

ル「る、ルビイも知りたい!」

花「マルも興味あるぞら!」

あ、あらら〜?これってもしかして言わなきゃいけないパターンですかね?

っていうか、果南ちゃんの知りたいたいことは、俺たちの馴れ初めであったり、告白のあのなんとも言えない緊迫感であったりを、ここで「ぶっちゃけトーク」するってことですかねえ……

マジで言ってるのか果南ちゃん……

恥ずかしいと思ったらありやしないで？

あーほら！ 曜ちゃんなんて果南ちゃんと同じくらい顔真っ赤になっちゃったじゃないの！

どうしてくれるんですか！ うちの曜ちゃん顔真っ赤になってまた一段と可愛くなっちゃってるじゃないですか！

控えめに言って昇天級の可愛さじゃないですか！

え……？ 論点がずれてる……？

いかんいかん、あまりにも可愛いもんでそっちに意識持つてかれちゃった……

孝「え、えと……果南ちゃん？ どうしてそんなこと聞くんですか……？」

曜「そそつ、そうだよ！ どうして急にそんな……／＼／＼」

さつき果南ちゃんをからかかってた色白な顔が、茹でダコぐらいに真っ赤になっている曜ちゃんは、動揺を隠せない様子で果南ちゃんにつつかかる。

すると果南ちゃんは俯き、何か小さく呟いたあと、決心したかの如くこちらを向いて

この蒼い海に誓う

果南 side

始まりはほんと、びっくり箱みたいな感じだった。

薫「あの……イルカと一緒に泳げるって聞いて来たんですけど……」

果「……イルカ？」

薫「はい、イルカです」

ほんとに焦った。この人は何を言っているんだろうって思ってた。

イルカと泳げるなら私も泳ぎたいわっ！って言いたくなっちゃったのは内緒ね♡

後で知ったことだけど、とあるサイトでうちのダイビングショップについて書かれていた口コミに、「綺麗な海、たくさん魚、そして何よりイルカのような美しい泳ぎの女性店員さんが魅力的なダイビングが楽しめる！」っていう風に書かれていたんだよね。

その「イルカのような美しい泳ぎをする女性店員さん」って部分から「イルカ」と「泳ぎ」だけを抜き取って早とちりしちゃったみたい……お茶目だ……可愛い……

果「えーっと……そういうったサービスは実施していないのですが……」

薫「えっ、そうなんですか……」

明らかにしょんぼりとした彼を見ていたら、なんとなく励ましてあげたくなった。そこから彼との関係が始まる。

果「せっかくここまで来たんだし、よかったら潜っていきませんか？心が落ち着くし、何より自分の世界に入り込めますよ♪」

薫「自分の世界に………面白そうですね、是非とも体験させていただきたいです」
そう言つて微笑んだ彼を見て、不覚にもドキッとさせられたのをよく覚えている。

男なんて別に興味ないし、ただのバカでアホでちよつぴりエツチな人しかいないと思つてた。

まあ、うちの父さんがそんな感じの人だからそう思つてたつてのもあるんだけどね
……

彼を連れてボートで沖に出ると、燦々と照りつける太陽に体を焼かれる感じがして、雄大で静かな青い海に早く体を預けたくなった。

ふと彼に視線を向けると、ウエットスーツを着て、酸素ボンベを付けていた。慣れた手つきで準備をこなすあたり、彼はダイビングの経験者なんだと思つた。

そんな彼がイルカと泳げると思っていたのだから、もしかしたら海外の海で潜つたことがあるのかもしれないと思わされてしまう。

と、なると、さつき私が「自分の世界に入り込めるよ♪」と言った時の彼のあの反応は一体なんだったのだろう？

私を悲しませないための演技？

いや、あの感じからしてそれはない……かな。

彼が一体何を考えてあの反応をしたのかはわからなかったけど、何故か彼のことが途端に気になってしまつて頭から離れなくなった。

しばらくしてダイビングスポットに着き、彼に不必要かもしれないけど、一応手取り足取り潜り方をレクチャーした。

彼は私の言っていることを、時折相槌を打ちながら真面目に聞いてくれた。

一通り説明が終わり、各自入水前に準備をしている時に、彼はやつぱりイルカがいないのが残念なのか、どこか憂いを帯びた瞳で遠くを見つめていた。

果「お兄さん、ごめんね、イルカいなくて……」

薫「えっ、あ、いや、大丈夫ですよ。近くにある水族館にイルカがいるみたいですし、そつちにも行ってみようと思つていたところですから」

このお兄さんは、「イルカと泳ぐ」のが楽しみだったわけじゃなく、「イルカを見る」のが楽しみだったみたい。

まあでも一緒に泳げたらそれはそれで楽しいんだろうけど♪

果「お兄さんはイルカが好きなの？」

薫「あ、はい。結構好きです。あの愛らしい鳴き声とか、丸っこい体とか、イルカって魅力がいっぱいだと思うんです！」

果「あつはは、そうなんだ？お兄さん、イルカのことになるとアツくなるね♪」

薫「す、すいません……止まらなくなっちゃうんです……」

なんだか可愛らしい人だ。このお兄さんと話していると、次はどんな楽しいお話ができるんだろうと考えてしまうほど心が踊っていた。

不思議だ。お父さんと話している時はこんな感じはなかった。

このお兄さんがカッコいいからなのかな……？

まあ世間一般から言つて、この人の顔立ちいわゆるは端整極まりなく、所謂、人生勝ち組イケケメの顔つてやつ。

私も学校で時々、

「果南先輩つてどうしてそんなにカッコいいんですか?!」

「果南先輩……ほんとにカッコよくて憧れちゃいます……／＼／＼」

「果南つてばイケメンよね、鞠莉が惚れるのも分かるわ」

「What?!?!どうしてそれを……あつ、なななんでもないわよ果南!!!／＼／＼」

「まったく果南さんも鞠莉さんも……ぶつぶーですわよ？」

最後のは違うな……

って感じで「イケメン」とか「かつこいい」とかはよく言われるんだけど、それとは違うと思うんだよね……

私だつて女の子だし、可愛いって言ってもらいたいし……／／／

……つて関係ない関係ない!!

話が逸れちゃった……

果「それじゃあ、そろそろ潜ろつか？」

薫「はい、「自分の世界に入り込んで」きますね？」

果「なっ……／／／」

薫「あははっ、お姉さん可愛いですね……それじゃあ行つてきます」
それが、私が初めて同じくらいの歳の異性に言われる「可愛い」だった。
ありえないほどに早まる鼓動。

周りの人に聞こえてしまうかもしれないほど、激しく脈打っている。
静まれ、静まれ、静まれ……!

そう思えば思うほど、心臓はバクバクいつて破裂してしまいそうだった。

——可愛いですね——

果「ずるいよ……／／／」

海の中にいる彼にこの声は届くはずもなく、船を操縦してきたお父さんがにこやかにこちらを見つめるだけだった。
そんな彼との出会いだった。

果南 side of f

薫 side e

薫「……つてわけなんだ。僕はどうしたらいいんだろう……」

孝「なーんだ、勘のいい薫くんなんだしわかるところだ、わかんない？」

薫「わ、わかりません……」

孝「こんな薫くん見るの初めてだなあ〜！意外とウブな所あるんだね〜！」

孝「もう、からかわないでくれよ〜！」

孝「わはははははっ、ごめんごめん！」

まったく、孝宏くに相談した僕が間違いだつたと言わざるを得ないなあ……

渡辺さんっていう彼女がいるわけだし、恋愛経験値は僕よりはるかに上だと思つたか

ら相談したのに……

想像の上つていうより、斜め上から攻めてくる……

なんか僕以上に質問してくるし……

これじゃあどっちが相談をもちかけたのか分からなくなっちゃうよ……

孝「じゃあさ薫くん、最後に一つだけ質問してもいいかな？」

薫「何回答えればいいのか？もー……答えやすいのでお願いね……？」

孝「あはつ、はいはい……もし果南ちゃんが本当に薫くんのが好きだとして、それがわかったら薫くんはどうする？」

薫「えー？そんなの決まってるよ。相思相愛なんだもん、想いを伝えるよ」

そりゃ、誰でもそうだよな？

なんでこんな単純なことを孝宏くんは聞いてきたんだ？

孝「あつは、やつぱりそうなんだ！それだけ聞ければじゅーぶん！ありがと薫くん！んじやまたね」

薫「えつ？あつ、ちよつと孝宏くん！僕の相談はあく?!?!」

孝「だいじょーぶ！もう薫くんの悩みは解決してるはずだよ！勘のいい薫くんならもう分かってるんじゃない？俺ですら分かてるんだしさ！」

悩みは解決してる……？

この会話のどこにそんな悩みを解決できるような鍵があったんだろう？

普段は勘がいいはずなんだけど、今回ばかりは分からない……

薫「もうちよつとヒントくれよ、孝宏くん……」

僕の発した言葉は虚しくも孝宏くんに届くはずがなく、風が攫っていつてしまった。

孝宏くんへの相談は結局何も意味をなさず、最後の言葉の示すこともわからず、なんとなく始めた校門前の掃除も終わり、なんとも手持ち無沙汰な昼下がりに。

こんななんとなくブルーな気持ちになっているからなのか、空も雲ひとつない快晴だ。

ん？気持ちブルーってことは心が曇ってるって訳だし、そこに因果関係は生まれないなあ。

それよか気持ちと天気は比例しないでしょ……

なんて、そんな曇っているブルーな心の中で呟いてみる。

薫「今日もいい天気だなあ……」

いや……昨日は曇りだし、一昨日は小雨が降っていたな……

それじゃあ、今日もつていうのはおかしいね。

薫「はあ……一人でなに考えてんだか……」

？「あれ？薫じゃん、ご機嫌いかが果南？」

薫「へっ？あつ、果南ちゃん。こんにちは。んー、曇つててブルー、かな？」

果「??」

あはは、さつき考えてたことはそりやあ果南ちゃんには「なんの事だかさっぱりわからん」だろうね。

そんな顔してるもん。

……あつ、「だいぶいい感じ〜」って言えばよかった……

果「曇つててブルー、かあ……やっぱり薫つて不思議な人だね」

薫「えっ、そ、そうかなあ？」

いきなり不思議な人認定されちゃった！

果「そうだよ、イルカと泳げるって勘違いしてウチに来たぐらいだしね〜」

薫「あつはは、そりやまた懐かしいね。ちよつと恥ずかしいんだからね？」

果「でも、あそこから薫と仲良くできたんだもんね……」

そっか、出会いはあそこだったっけ？

イルカと泳ぎたい気持ちで久々のダイビングに行ったのにまさかの勘違い……

でもいざ潜ってみると、隣にいた果南ちゃんの優美な姿に魅了され、その姿はさながらイルカの様だった。

イルカは果南ちゃんだったね♪

そんな果南ちゃんともっとお話をしたい。

水の中を華麗に舞う姿を見ていたい。

この先ずっと隣にいたい。

そう思い始めるのにあまり時間は必要としなかった。

果「ねえ、薫。この後時間ある？ちよつと行きたいところがあるんだ」

薫「ん？うん、平気だけど……」

今日は昼から仕事は何も無いなんて……

もうちよつと仕事をゆつくりやつて時間ギリギリまで仕事がある状態にすればよ

かった……

ん？今まだお昼だよ？

さつき鳴ったチャイムが昼休み突入のチャイムだから……

薫「ねえ、果南ちゃん。あなたこの後の授業は？まさか……」

果「あはは……ダイヤに怒られちゃいそうだけど、やつぱり人生は多少なりともスリ

リングじゃなきゃね☆」

薫「あー、僕は何も聞いてないぞーっと。だから生徒会長にも何も言えないぞーっと」
果「よっしゃ！そう来なくっちゃね、薫！」

仕事が少ないで暇だったのに、急にものすごい嵐がやってきたみたいだ。
状況は嵐に等しいけど、今日はやっぱりいい天気だ。

薫 s i d e o f f

孝宏 s i d e

果南ちゃんが薫くんに告白すると高らかに告げた翌日である今日。

大変なことが起きていますねえ……

孝「さてさて、この状況をどう見ますか、渡辺さん！高海さん！」

曜「どうもなにもないよ！果南ちゃんこのまま2人でヨーソローするつもりだよ！
／＼」

千「絶対にヨーソローするね！千歌のリーダーがそれをひしひしと感じ取っているよ
！」

そういつて頭頂部から生えるアホ毛を指さす千歌ちゃん。

随分と便利な代物を持っていらっしやる……

あとなんだろう……「ひしひしと」っていう千歌ちゃんが、覚えてたの法律をすぐに使いたがる小学生に見えた。

太郎くん『あー、お前それ「独禁法」だぞ!』

一郎くん『独禁法ってなんだよ!』

太『「独りでいるの禁止法」だよ』

一『お前……』

いやいい話につながったのなんでなん?

(ちなみに独禁法とは「独占禁止法」という法律で、企業がある分野の市場を独占して生産・販売することを禁じるものです)

花「というか、なんでこそこそ果南ちゃんのことを見てるすら?」

ル「だって、静かにしないと果南ちゃんにバレちゃうし……」

ヨ「はあ……すら丸に隠密行動はまだ早いわね……」

千「それで、鞠莉ちゃんはさっきからどうしたの?なんか「地球くじやないく〜ころ」を見てるみたい」

花「AZALEAずらく!」 GALAXY Hide and Seek「ずらく!」

鞠「oh……マリーはその曲好きよ……素敵な曲だもんね……今の果南みたい……」

孝「え、声ちつき……ってかなんで果南ちゃん？」

鞠「幼い頃から関わりのある孝宏ならいいけど……さっきの歌の通り、どこから来たのかもわからない男を果南が「ここだよ」って声を出してしまったから……果南が誰かのものになってしまふなんて……」

ギャグと取っていいのか本気と取っていいのかわからない発言をされましたな、「かなまり」の鞠莉お嬢様……

ダ「確かに鞠莉さんのお気持ちは私にも痛いほど理解できますわ……しかしながら、果南さんは自らあの人を選び、あんなにも想いを寄せているのです。これはもう私たちは手放しで喜んで、祝福してあげるしかないようです」

鞠「ダイヤ……そうね、果南は自分の道を歩き出したのよね……」

小さい頃から仲のいい幼なじみで、この世の誰よりも大好きな親友が、知らない男の人と結ばれるっていうのは確かに苦しいかもしれない……

けど……

千「大丈夫だよ鞠莉ちゃん！」

鞠「千歌うち……？」

千「果南ちゃんは確かに薫さんと一緒になつちやうかもしれない……でも、幼なじみで大好きな親友っていう果南ちゃんは、ずっと鞠莉ちゃんの中にも、ダイヤさんの中に

も残り続ける。そう思っていれば、果南ちゃんの中にも幼なじみで大好きな親友っていう鞠莉ちゃんとダイヤさんは残り続けるはずだよ！だから、大丈夫！」

鞠「……ふふつ、Thank you千歌つち！そうね、私たちの関係は変わらないものね！」

ダ「千歌さんもいいこと言いますわね♪」

千「えへへつ♡ダイヤさんに褒められるとなんだかくすぐつたいなあ♡」

ははっ、言いたいこと全部言われちゃったな……さすがは我がリーダーみかんさんだ。

千「リーダーが作動した！孝宏くん、今、千歌のことなんか変な風に呼んだでしょ

……」

孝「……そのリーダーまじで何？」

曜「……凶星だ」

あのアホ毛どうなってるの？

生まれた時から埋め込まれてんの？

ヨ「ギラン、果南の動きを察知。隠密魔法発動！」

あつ、果南ちゃんが薫くんとどっかに行くみたい。

校門を……出たね。だから果南ちゃんカバン持ってたのか……

おっと、そこで「学校を抜け出すなんて大いにぶつぶですわ!!」って叫びかけてる
 網元のお嬢様1号を誰か止めておいてくれ。

2号は「果南ちゃん、学校を抜け出して薫さんと二人きりに……うゆ……／＼」つ
 て顔を真っ赤にしてらっしゃる。何を想像してんのよ。

曜「うーっ、なんかこつちまでドキドキしてきたよ！もちろんこのまま尾行するんだ
 よね？」

孝「モチのロン！面白そうだもんね……って曜ちゃん、そのお洋服はなんですか？」
 曜ちゃんがバッグから取り出したのは、茶色のチェック柄の羽織物。同じ柄の帽子も
 頭に乗せて、あら可愛い。

おまけに虫眼鏡なんか取り出した。

曜「えっ？尾行調査なんだからやつぱり探偵さんにならないと！どーお？似合ってる
 ？」

孝「はっはっは、コスプレしたら曜ちゃんの右に出るものはいないでしょ。とつて
 も似合ってるっしやいますよ」

曜「よ、よよよソーロー……／＼／」

千「あはは、曜ちゃんてば普通に褒められちゃったから照れてるよ」

鞠「Oh！ So cuteね、曜！孝宏もこれでメロメロねよ」

孝「かつ、からかうのはやめるずらく！」

花「それマルのセリフずらく!!」

梨「2人とも、そんな大声出したらバレちゃうわよ！」

果「だ、れ、に、バレるって??」

梨「そんなの果南さんに決まってるじゃ……えっ」

孝「あれ、果南ちゃん!こ、こんな所で会うなんて、き、奇遇だねえ……ご、ご
機嫌いかがかなん……?」

あ、まっつて、詰んだわ。

果南ちゃんの目が大変に笑っていらつしやらない。

ああ、このままあの海にHop? Stop? Nonstop!でJump up H
igh!!してLanding actionしたい人生でした……

果「だいたい感じ……!!」

孝「ホゲ……ツ!!」

曜「あちやく……見事に脳天チョップ食らったねえ……」

遠のく意識の中で俺は思った。

人の告白シーンなんて見に行くもんじゃねえ……

見るのは恋愛漫画の中だけで十分だ……と。

気が付くと俺は最後に見た景色と違うところにいた。

孝「……どこだここ?……ん?」

目の前に広がる双丘。

だがそれは自然が作り出したものではなく、人為的に作り上げられた代物だった。

ずっと見ていたらその双丘に自然と手が伸びそうになるが、理性を保とうと必死に堪える。

おや、どうやらその双丘の持ち主が動き始めたようです。

曜「……んん?あ、おはよう孝宏くん……♡」

孝「あらあら、寝起きで甘えモードですか?おはよ、曜ちゃん」

曜「えへへ……今はなんとなく甘えたい気分でありますよ〜♡」
何やら目がハートだ。

「というか顔が赤いわね……」

孝「曜ちゃん、顔真つ赤よ？何かあったの？」

曜「ん？そーかな？いい気分に浸れたから嬉しくなってるのかも……♡」

……まつつつたくと言つていいほど何がなんだからわからない！

え、俺が伸びてる間に曜ちゃんに何かヨーソローなことしちやつた感じ？

一体何が……

梨「あはは……多分みんな曜ちゃんみたいな感じになつちやつてるよ」

孝「梨子ちゃん……どういうこと？」

梨「孝宏くんてば果南ちゃんに天誅食らつて伸びちやつたじゃない？あの後にいいこ

とがあつたの！」

孝「いいこと……？それが曜ちゃんをこうしてしまつたと……」

梨「ふふつ、そうよ。私もちよつとそんな感じになつてるの♪」

一体何が起きたんだろう？

曜ちゃんも梨子ちゃんも、こんな幸せそうな顔してる理由は一体……

梨「実はね……」

孝宏 side of f

梨子 side

果「薫……海、綺麗だね……」

薫「そうだねえ、これはあれかな？絶対のダイビング日和ってやつ？」

果「あははっ、薫も分かってきたね♪」

薫「そりゃあこれだけ長いこと一緒にいれば、ね☆」

果「え、なんかちよつとやだ。語尾に星が見えた気がしてすごいやだ……」

薫「そこまで……」

果「あははっ、ごめんごめん！」

なんだか2人ともとってもいい雰囲気です！

私、桜内梨子は絶対2人を尾行中です！

私だけじゃなく、Aqoursのみんなも。

孝宏くんは伸びちゃったから、保健室に搬送しました。

孝宏くんが天誅を食らって、A q o u r s のみんなは猛ダツシユで果南さんから逃げました。

それはもう、さながら猫ちゃんに追い回されるネズミさんのように。

見事逃げ切った私たちは、しばらくしてから再び同じ場所に集まって、果南さんの尾行を開始することに。

思ったほど遠くに行っていないから見つけるのは簡単でした。

今来ているのは内浦の海岸沿い。

手を繋ぐわけでもなく、ただ二人きりでお話しながら仲良く歩いてるって感じ。

果「そういえば、最近あんまりウチにこないね。何かあった?」

薫「いや、あつはは、恥ずかしい話なんだけどね……実はこの間仕事中に足首をグネっちゃって、歩く分にはもう全然大丈夫なんだけど、完治してるわけじゃないから、お医者さんから運動を控えるように言われちゃってね……」

果「えっ、そうだったの?! それならそうと言ってよく……来てくれなくて……寂しかったんだから……// //」

薫「果南ちゃん……」

なになに? 何を言ってるかよく聞こえないけど、果南さんの顔が真っ赤よ?!

薫さんは何を言ったの?!

千「おっほほ〜!なんだかい雰囲気だねえ!果南ちゃんの顔も真っ赤つかだ〜♪」

曜「あの果南ちゃんに何の気なしに真っ赤な顔をさせるなんて……薫さんは凄いなあ

……」

ダ「果南さんが……果南さんが乙女の顔をしてらっしやいますわ……わたくし、わたくし、それだけで嬉しいですわ……」

ル「お、お姉ちゃん!涙を、涙をふいて……」

鞠「果南……いい顔をするようになったじゃない……私たちに見せる顔とは違うもの……素敵だわ……♡」

みんながみんな、いままで見たことのない思いつきり女の子してる果南ちゃんへの感想を述べています。

私もあんな女の子らしい、妹っぽくて可愛い果南さん、初めて見ました。

普段はお姉さんって感じでカッコいいからなんだか新鮮です。

薫「……ねえ果南ちゃん。聞いてもらいたいことがあるんだ。いいかな?」

果「えっ……う、うん」

まつ、まさかの薫さんからの?!?!

——僕ね、この学校に勤める前は東京の音ノ木坂学院ってところに勤めていたんだ。桜内さんがこつちに来る前に通ってた学校なんだけど、そこはスクールアイドルで一躍有名になったんだ。知ってるよね？ μ s。彼女達の輝きを見たからこそ今の僕があると思うてる。

でも彼女達の活動は、光陰矢の如し、本当に限られた短い時間だったんだ。

もうあんな輝きは見られない。そう思っていた。

けど見られた。浦の星学院に来て、μ sのような輝きを放つ9人を。

奇跡だと思った。もう二度と見られないと思っていた輝きが、目の前にある。

初めてA q o u r sを見た時は知らぬ間に涙を流していたんだ。

嬉しかった。μ sが残っていたことを受け継いで行っているかのような気がして、本当に嬉しかった。

明るい曲が多くて元気になれるし、メンバー1人1人は個性的で楽しい。

しかもそのメンバーの中には、ダイビングショップにいた女の子がいるときた。

あの優美な泳ぎを見せる子が、あんなに激しいダンスを踊って、キラキラ輝いている瞬間、僕は果南ちゃんの「トリコピト」になってしまったみたいだった。

それから自分の果南ちゃんに対する想いがどんなものなのか分かるのに時間なんて必要なかった。

そう、簡単なことだもの――

果「薫……？」

そういつた薫さんは大きく息を吸い込み、果南ちゃんに向き合った。その眼は強い決意と想いで溢れているようだった。

薫「果南ちゃん、僕は君のことが好きだ。僕と付き合って欲しい」

果「かお、る……／＼／＼」

果南さんがまた見せた、私たちの知らない顔。

間違はなくこの瞬間、世界中の誰よりも幸せな人は果南さんだろう。きつと薫さんだけじゃなく、A q o u r s のみんなも、あの果南さんの顔を忘れることはないと思う。

果「……はい、こちらこそ、よろこんで……！」

そう言った果南さんはボロボロと涙を流し、薫さんに抱きついた。

それを受け止めるように、薫さんは優しく果南さんの背中に手を回した。

千「がなんぢやん、よがっただねえ〜！ちがもうれじいよお〜！」

曜「千歌ちゃん泣きすぎだよ〜…：…：がなんぢやん、おめでどう〜！」

ダ「果南さん、薫さん、末永くお幸せに…：…」

鞠「果南…：…ずつと大好きよ…：…薫と幸せになりなさい！」

幼なじみ，sはそれぞれ想いを述べている。

みんな果南ちゃんに幸せが訪れたことを祝福している。

おめでどう果南さん！薫さんとずつと仲良くね！

梨「……つてことがあったの。これでみんなが今の曜ちゃんみたいになつて理由が分かった？」

孝「はい、大いに分かりました……果南ちゃんも薫くんも、幸せになれて良かった……」

曜「なんか私たちもあんな感じだったなあつて思い出して、なんか孝宏くんに甘えなくなつちやつたの……いい、かな……？」

ああ、普段余裕そうにしてる孝宏くんの顔がみるみる赤くなつていく……
やっぱ孝宏くんは曜ちゃんの押しには適わないみたいね♪

………見せつけちやつてくれるじゃないのリア充めエ……

梨子 s i d e o f f

気温もだんだんと上がり、夏の近づきを予感させる暑さと裏腹に、内浦に「春」がやつてきた。

彼の心の青さはすっかり消え、今はただ空と海だけが蒼く眩しいものだった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:

激闘！ライバル編

ライバル —— 時を経た邂逅 ——

千歌 side

千「新しいスクールアイドル、ですか？」

聖『はい……Aqoursの皆さんが活躍する内浦の近く、沼津の高校に新しくスクールアイドルが出来たんです』

北海道は函館の姉妹スクールアイドル「Saint Snow」の姉、鹿角聖良さんとテレビ電話をしていると、そんなことが告げられた。

千「私たちの住む町にもうひとつのスクールアイドル……！」

聖『ただ……このグループは最近活動が活発になってきて、ものすごい勢いでファン層を拡大しているんです』

千「すごい……私達も負けてられません！……それで、そのスクールアイドルはなんていう高校のスクールアイドルなんですか？」

近くの高校なら名前は大体わかる。

沼津の方の高校なら有名だし、何校か私も見に行ったことあるし。

聖『えつと……高校名は“静真高校”で、グループ名は“ジェロジャー gelosia”、イタリア語です。和訳すると……すごいですね、“嫉妬心”です』

千「“gelosia cuore”……嫉妬心、かあ……」

なんだろう……強い想いを感じるグループ名……

それに静真高校って、部活動にもものすごく力を入れてて、色んな部が全国大会の常連って噂の高校だ。

そこにスクールアイドル部が出来たとすると……ちよつと怖いかも……

でも、弱気になったらダメだよね！

聖『とにかくこのグループの動きには注意です。いつAqoursに宣戦布告してくるか分かりませんし……』

千「聖良さん、大丈夫です！私達Aqoursは絶対に負けませんから！」

「頼もしいですね」って言って笑う聖良さん。電話口で理亜ちゃんの「姉様、お風呂あいた」って声が聞こえたから、「おやすみなさい」と告げて電話を切る。

新しい、スクールアイドル……

たしか前にダイヤさんも、

だ「スクールアイドルは日に日に増えていきますわ。その中で上位に食い込むことが出来るのは、努力と諦めない気持ち忘れなかったグループ、たった一握りのほん

の僅かなスクールアイドルだけなのですわ」

って言ってたっけ。

”スクールアイドル” っつてものが人気になって注目を浴びてから、もうかなりの年月が経った。

今となつてはスクールアイドルの数は、全国で1万近くになつてゐるみたい。

そりゃこんな何にもない田舎でも、私たちがみたいにスクールアイドルをやりたいって子は沢山いるよね！

ちよつと気になるし、その” *gelosia cuore* ” っつてグループ、調べてみよつと♪

千歌 *side off*

曜 *side*

曜 「えつ、スクールアイドル？」

？ 『そうなんだよ！ボクも晴れてスクールアイドルになつたんだ！曜ちゃんと言つた”輝き” っつてものをボクも見つけたくてね！』

電話の主がそう言うと、私はもう困惑しかしていなかった。

「こつち日本に帰ってきてから新しく始めたものがある」なんて言うから、興味本位で聞いたものの、聞かなきゃよかったと思わされた。

えー………

なんだってこの子がスクールアイドルに……

曜「いつから始めてるの？」

？ 『んー、3ヶ月くらい前かな？でも今やランキングでも700番台に入ったんだよ！』

曜「えっ、うそ?!急成長しすぎでしょ!!ちよつ、なんてグループ名なの?!」

？ 『あはは、曜ちゃん取り乱しすぎだよ……ボクたちは、”geiosisia cu ore”ってグループさ♪』

曜「じえ、じえろ……え？何語それ？」

？ 『ジェロジニア クオーレ、イタリア語だよ♪』

イタリア語……

検索したら和訳出るかな……？

そう思って、私は目の前のパソコンの検索窓に、教えてもらったスペルを元にそのグループ名を打ち込んだ。

んー……………あつ。

g e l l o s i a c u o r e ……………嫉妬心、かあ……

ん？嫉妬？

曜「ねえ、一体誰に嫉妬してるの？」

？『それは……………あはは、また今度話すよ！じゃあ、そろそろボクは寝るよ明日も

練習あるし！B u o n a n o t t e (おやすみなさい)、曜ちゃん！』

曜「あつ、ちよつと!!……………切れた……………」

話の途中で一方的に電話を切られてしまった…………

まさかあの子がスクールアイドルだなんて…………

曜「一体何が何だか……………私のキャパじゃあ話の展開に追いつけないよ……………」

まったく……………昔から突拍子もないことを言う子ではあったけど…………

まさかスクールアイドルとはねえ…………

確かにあの子はかわいいし、歌うまいし、運動神経いいし時折イケメンになるし…………

それに衣装に関しては私といい勝負なくらい愛がある！

……………でもなんでまた急にスクールアイドルなんだろ？

”輝きを見つけない”とか言ってたけど、本当に理由はそれだけ…………？

ま、いつか！寝よつと…………

キヤパオーバーも甚だしいので、考えることをやめて布団に入った。曜「明日考えればいいよね……」

そんなことを呟いて私は目を閉じ、夢の世界へと飛び込んでいった。

曜 s i d e o f f

孝宏 s i d e

孝「は——あ、あつついなく……」

うだるような暑さ。沼津にもとうとう夏がやってきた。

ついこの間まで涼しかったはずなのに、なんでまた急にこんな……

孝「あ——い——い——よ——!!!」

だってまだ朝の10時になってないんだよ?!

いくらなんでも暑すぎるでしょ!!!

このまま海の中にヨソローして溶けたい……

?「あれ?孝宏くん?久しぶり!ボクのこと覚えてるかな?」

孝「えっ?」

だ、誰??

えっ、黒い帽子にジャケット、黄色のシャツにこれまた黒のスキニーパンツ……帽子の影から覗く紫色の瞳が綺麗だけど……この人男?

? 「あれ?もしかして忘れちゃったかな?……あ、帽子取ればわかるかな?」

そう言うなり目の前の男の子(仮)は黒いベースボールキャップを取り、その長い髪を露わにした。

? 「これでどうかな?わかる??」

孝 「うん?んんっ?!も、もしかして……月ちゃん?!」

月 「正解っ!ご存じ渡辺月です!孝宏くん久しぶりっ!」

孝 「えっ、まじで月ちゃん?!久しぶり!!うわ、見ない間に随分大人っぽくなったね……」

月 「孝宏くんだって大人っぽくなったじゃない!だってボクより背が高くなったし!」

ああ、そういうえば小さい頃は月ちゃんにも曜ちゃんにも身長って負けてたっけ?

女の子より小さい自分が嫌で、毎日毎日牛乳飲んで、早く寝て、起きた時に伸びをするようにしてたっけ?

我ながら可愛らしい過去……

懐かしいなあ……

まあ今言ったように、月ちゃんとは小さい頃によく遊んだ仲で、よく曜ちゃんと3人でドロドロになるまで遊んで怒られたっけ？

っていうか、月ちゃんめつちやボーイッシュになつてない?!

小さい頃も男の子っぽい格好はよくしてたけど、ここまでボーイッシュになるとは……

月「いや、にしても本当に久しぶりだね!」

孝「ほんとにね〜! 見ないと思つてたけど、もしかしてまたイタリア?」

月「やんは俺と知り合う前までイタリアに住んでいて、俺たちと遊ぶようになってからもちよくちよくイタリアに行つていた。

行く理由は教えてくれなかったんだけど、いつもお土産をくれるのが楽しみで仕方がなかった。

月「うん! さすが孝宏くんだね、ボクのことよくわかつてるじゃない♪」

孝「ははっ、伊達に幼なじみやってないよ」

月「それもそうだね! ……ねね、孝宏くんはさ、ぶつちやけ曜ちゃんと付き合つてるんでしょ?」

孝「ブフツ?! な、なんでそれを?!」

えっ、唐突!!てかなんで知ってるの?!

言いふらすとしたら……誰もないな……

月ちゃんのことを知ってるのは、A q o u r s メンバーだと曜ちゃんと俺だけで、千歌ちゃんや果南ちゃんは知らなかったはず……

月「やつぱりね、そんな気がしてたんだあ♪」

孝「も、もしかして、いつものオンナの勘つてやつ?」

月「ふふつ、まあそんなとこ!あーあ、2人ともそんな関係になっちゃって……ボクはなんだか置いていかれてる気分だよ……」

孝「あつはは、大丈夫だって!俺と曜ちゃんがどんな関係になろうとも、月ちゃんとの関係は途切れたりしないから!」

月「ふふつ、孝宏くんいいこと言うじゃん!こりや曜ちゃんも惚れるわ……」

孝「あ、あははは……ところで月ちゃん、これから何か用事なの?制服着てるけど……」

これは……確か静真高校の制服だ。月ちゃんは静真に入学したんだね!

でも今日は日曜日。いくら部活に力を入れてる静真とはいえ、どの部活も日曜まで部活をやるってことはしてなかったはず。だからこの日曜の午前中に制服を着てるのはなんだか不自然な感じ。

月「ああ、今日これから部活なんだ♪」

前言撤回。あつたわ、日曜に部活あるとこ。

あれ?でも月ちゃんが部活?!

縛られるのが嫌いつて言つて、部活に入るようなタイプじゃなかったのに……

孝「拘束されるのが嫌いな月ちゃんが部活だなんて……なんの部活やつてるの?」

月「ふっふっふー、聞いて驚けっ!ボクはなんと、スクールアイドル部に入つて
んだ!!」

なん……え?

聞き間違いかしら……

孝「ちよ、ちよつと、聞き取れなかつたかな……もう一回いい?」

月「だーかーらー!スクールアイドル部に入つたよっ!!」

孝「だよねえ〜!まさか月ちゃんがスクールアイドルだなんてどうええええええええええ
え?!?!」

すく……すくーるあいどる……?

ツキチャンガ、スクールアイドル……?

孝「なんつで……なんでなんでするか月ちゃん?!」

月「ええ、敬語?……まあ簡単に言えば、”輝き”を手に入れるためだよ!」

孝「輝き……でもそれって——」

？「孝宏くー……ん!!!」

んお？あつ、

孝& a m p ;月「曜ちゃん!!」

曜「ああつ！月ちゃん!!」

遠くに見えたと思ったたら、爆速でこちらに駆けてきた曜ちゃん。

あんなに速かったのに、息をあげる素振りすら見せないなんて……さすがスクールアイドル……

月「曜ちゃん、おはヨーソロー（*）> ? ・*（ゞ」

曜「おはよーそr……じゃなくて！昨日の電話!!あれ一体全体どういうことなの?!」

昨日の電話……? ?

月「曜ちゃんがどうしてもボクのことを知りたいって言うから、精一杯お応えしたま
でだよ♪」

月ちゃんを……知りたい？

精一杯お応えした……? ?

孝「ふ、2人は一体何の話をしてるの……? ?こんな公衆の面前で話していいものなの……? ?」

曜「え？孝宏くん、何か深く考えてない？」

月「ボクがスクールアイドルやるって話をしてるんだよ♪」

孝「なっ、なんだあゝ……いとこ同士の”ときめき百合メモリアル”じゃないのか……」

月「何かすごいことを口走ったかい？」

孝「ままままさかゝ！あっはははははははははは！」

曜「とにかく!!月ちゃんには詳しく話を聞く必要があります!!このまま連行するから孝宏くん手伝って！」

孝「了解でありますっ!!」

そう言つて俺と曜ちゃんはがっちりと月ちゃんの腕を掴み、やば珈琲店へと向かった。

月「なんでボク連行されてるのゝっ?!」

1人の少女の悲痛な叫びだけがこだましていた……

孝宏 side off

千歌 side

新しいスクールアイドル……

” gelosia cuore ” ……

静真高校……

昨日の夜、聖良さんと話してから、その新しいスクールアイドルのことが気になって気になってずうずうつと頭の中をグルグルしてる。

調べてみるとやっぱり聖良さんの言う通り、ここ最近出来たばかりのグループにも関わらず、圧倒的な歌唱力とキレのあるダンス、そして心に響く歌詞が話題になって、人氣がうなぎ登りのグループみたい。

メンバーは3人で、リーダーで衣装担当の渡辺月さん。歌詞と曲担当の結城朋華さん。振り付け担当の佐伯麗奈さん。

結城さんは、全国のピアノコンクールで幾度となく賞を獲得してる実力者でもあり、非凡な発想力から生み出される歌詞が多くの人の心を掴んで、その人氣を押し上げている要因になっているらしい。

佐伯さんは”佐伯ホールディングス”っていう東証一部上場？の大企業のCEO？の一人娘。小さい頃に見たバレエがきっかけでバレエを習い始めたらしく、持ち合わせていた才能もあって、全国でも指折りのバレエダンサーになったみたい。それを活かし

てスクールアイドルの振り付けを考えてるらしい。

渡辺さんは詳しいことは分からなかったけど、こんなすごい2人を抱えるグループのリーダーだから、きつととんでもなくすごい人なのかもしれない……

渡辺……………まさかね……………

千「……………あれ？」

やば珈琲に見たことある影が……………

千「あれは……………曜ちゃんと孝宏くんだ。それに……………んんっ?!」

あれっ?!あの人!昨日サイトで見た人!!

確か……………リーダーの渡辺月さん!!

えっ……………まさか渡辺って本当に……………?!

ちよっ、隠れて様子を……………

曜「ん?……………あっ、おーい!千歌ちゃーん!!」

ばっ、ばばバレた!!

隠れようとした矢先にこれだよ!!

仕方ない、ここは正々堂々と出て行ってやる!

千「よ、曜ちゃんと孝宏くん、こんちか!」

孝「こんちか〜!」

月「ふうん……君が千歌ちゃんか……」

千「えと……そちらの方は……?」

わかっではいるんだけど、一応ね、念の為……

月「初めまして、君が高海千歌ちゃんだね！ 曜ちゃんから話は聞いてるよ！ ボクは渡辺月！ 曜ちゃんのいところですよ！ よーろしくー！（*）> ? ・*（ゞ）」

千「えっ、いところ?!」

曜「そうそう♪」

孝「一応幼なじみなんだよね〜」

千「そ、そうなんだ……」

いところ……いところかあ……

まさかとは思ったけど、親族だったなんて……

千「そ、それでどうして今日はこの3人で集まったの?」

曜「いや〜、それがね——」

月「ボクがスクールアイドルを始めたって話をしてるんだ！ そして始めた理由を曜ちゃんが知りがつてるから教えてあげようと思ってね♪」

スクールアイドルを、始めた理由……

これで輝きを見つけない！ とかだったら面白かったんだけど、そんな考えをしていた

私がバカだった。

月「ボクはね高海さん、

君への嫉妬からアイドルを始めたんだよ」

私への……嫉妬……？

千歌
s i d e
o f f
a n d
t o
b e
c o n t i n u e d
……

ライバル —— 妬かれたみかんと妬いた月 ——

曜 side

月「ボクはね高海さん、君への嫉妬からスクールアイドルを始めたんだよ」

千「えっ……嫉妬……?」

孝「なんでまたこの千歌ちゃんに嫉妬を？」

千歌ちゃんはリーダーシップがあつて、元氣いっぱい、何事にも物怖じせず突き進めて、何よりもみんなから愛されるような存在。

そんな千歌ちゃんに嫉妬するのは、まあ何人も見てきたわけなんだけど……

かくいう私も一時期ちよびくくくくつとだけそんなものを感じている時代はあつたんだけど、それはまた別の話……

月「ははっ、簡単なことだよ！ボクの曜ちゃんを奪つていったからさ」

曜「?!?!」

千「ボクの……」

孝「曜ちゃん……?」

曜「なつ、なんじゃそりゃ?!」

一体全体理解が追いつかない……

えっ? 私が、月ちゃんのもの?!

どういうこっちゃ!!

孝「ちよ、ちよつと月ちゃん? それ詳しくお聞かせ願えるかな?」

月「え? いやほら、曜ちゃんはボクのいところでしょ? だからボクのものってことだよ!」

この子イタリアに行ってる間に何が起こったの……

重力振り切っちゃってるんじゃないの? 精神が!

ええ……昔はこんな子じゃあなかったのに……

千「だ、だいぶねじ曲がった精神状態なようで……」

孝「向こうで一体月ちゃんに何があつたんだ……」

月「とにかく高海さん! 勝手に悪いけど、君はボクのライバルに認定したから! スクールアイドルでどちらが曜ちゃんの隣にいるのが相応しいか、決めようじゃないか!」

孝「一応俺つてば彼氏つてなってるはずなんだけど……」

月「そ、そういうことじゃなくて! こう……なんていうか……女の子と女の子で、と

「うか……／＼／＼」

「ほう、やつぱりこの子はイタリア行ったあたりでなにか大変なものを吹き込まれてしまったようだね……」

「梨子ちゃん2号か!!!」

「孝「それは……いとこ同士のと きめき百合メモリアルってこと……か……よし、千歌ちゃん!」

「千「ふえつ?!」

「孝「がんばれよ!」

「千「ええええええつ?! どういう意味で言ってる?!」

「まったく……孝宏くんは孝宏くんで梨子ちゃんの影響受けすぎだよ……」

「なんていうの?」百合? っていう女の子同士が恋人みたいな関係になるお話が好きになっちゃったみたい……」

「私が月ちゃんに取られてもいいのか!!!」

「千「でも……こうして面と向かって堂々と宣戦布告されたら、受けるのがオトコってもんよ!」

「曜「いやいや、千歌ちゃんは女の子だし……」

「千「そして戦いを華麗に勝ってみせて、その後みんなでカレーでも食べに行こうか!」

月「お、おお……?」

千歌ちゃん、これはやってしまった……

千「あ、ちなみに今のは、魅せる方の華麗」と、スパイスの効いた食べる方のカレーを掛けた――」

曜 & amp; 孝「説明しなくて、いいから……」

月「とにかく、高海さんの率いる君たち Aqours と、ボク達 ジュエロジャー g e l o s i a c u o r e、どちらが曜ちゃんのいるグループとして相應しいか、決めようじゃないか――」

千「望むところだ！千歌の曜ちゃんは絶つつつ対に渡さない!!!」

え、ええ……

本人の同意なしになんかバトルすることになっちゃったよ……

私に人権ないの……?」

ってか”千歌の曜ちゃん”ってどういうこと……?」

ツツコミが追いつかない……

ダレカタスケテ……

曜 s i d e o f f

孝宏 side

孝「はああああああああああああ………」

大変なことになった……

恐らくあの目をした月ちゃんはガチで曜ちゃんを引き抜きに来る……

そう、あの目。

小さい頃何度も見たあの眼差し。

あの目をした月ちゃんは誰にも止められない。

止める手段はただ1つ、全力で月ちゃんを負かすのみ。

の、はずなのに……

曜「わあ、孝宏くんすごいため息だね、ロングブレスダイエット？」
どうしてこんなに呑気でいられるの？
 なしてこげん呑気でいらるーと？

あつ、いかんいかん、つい博多弁が……

博多なんて行ったこともないのになぜ博多弁が……？

千「曜ちゃん！ なしてそげん呑気でいらるーと?! ああつ、博多弁が……つてそうじゃなくて……これは曜ちゃんを守るための千歌たちと渡辺さんたちの戦争なんだよ!!」

れなのに守られる曜ちゃんがそんな呑気でいてどーするのっ!!」

曜「えっ、だって私信じてるもん。A q o u r s のパフォーマンスの方が絶対に優れてるって! みんなで努力して培ってきた私たちの力……まだ全国のレベルでいえば足元にも及ばないかもしれない。でも私たちは絶対に、着実に力をつけてきてる! 月ちゃんたちには、絶対に負けない!」

孝「曜ちゃん……」

「ここまで考えていたのか……」

呑気にしてると思ってたのに、やっぱ曜ちゃん素晴らしい子だわ……

千「ばっかもー……ん!!!」

曜 & a m p ; 孝「わあっ?!」

千「ダメなんだよ……このままじゃ、今の千歌たちの実力じゃきつと、g e l o s i a c u o r e には敵わないかもしれない……」

曜「えっ……」

孝「そんなにすごいのか?」

千「うん……」

千歌ちゃんが言うには、A q o u r s は g e l o s i a c u o r e と比べると、普通怪獣な子たちが寄せ集まって出来たようなグループと言っても過言ではないという

こと。

確かに墮天使ヨハネスブルグ（笑）ちゃんの墮天使キャラとか、梨子ちゃんの腐女子隠せてないキャラとか、鞠莉ちゃんの大金持ちシャイニーキャラとか、とんでもなく濃い個性を持った子は、なにもギルキスじゃなくてもいるけど、gelosia cureのメンバーはそんなもんじゃない。

聞けばメンバーはとんでもない子ばっかだった。

作詞作曲担当の結城朋華。実は知り合いなんだけど、全国のピアノコンクールで上位入賞しまくるわ、俳句やら短歌やらポエムやらでいつも賞状貰ってくるわ、芸術系に關してはとんでもない才能を持つてる子なんだよね。

しかも九州は博多の出身で、こっちに來てからもなかなか癖が抜けないようで、ずっと博多弁を話している……ってこれは關係ないか……

振り付け担当の佐伯麗奈。なんの偶然かこの子も知り合いなんだけど、バレエ見せてもらったことが昔あって、思わず見とれてしまうほどの優雅さ。手の先、足の先までピンとしていて、「凜」という言葉が似合う舞いだった。おまけに鞠莉ちゃんに負けず劣らずな金持ちときた。

それに……月ちゃん。

静真の生徒会長を務めていて、生徒、教師から全幅の信頼を得ている。成績優秀、容

姿端麗、運動神経抜群。さらに曜ちゃんと張るぐらいの制服オタクだから、もちろん作る衣装はプロ顔負けなレベル。そしてリーダーを務めている。

これだけ聞くと確かにゾツとする。いくら A q o u r s でも敵わないかもしれない、つて思わざるを得ない。

けど……

孝「はあ……そんなことで怖じ気付く高海千歌ちゃんなんですか？」

千「そんなことって……千歌は――」

孝「どんな時でも諦めず、目の前に立ち塞がる壁を難なくぶち壊し、常に笑顔を振りまいてみんなを勇気づける……俺はそんな千歌ちゃんが好きだよ」

千「ふえ……／＼／＼」

曜「うんうん、孝宏くんの言う通り！確かに私たちは普通怪獣たちかもしれない。けど普通怪獣がたくさん集まったらそれはもう普通じゃない……月ちゃんたちがどんなにすごいのかはよくわかった。けど、私たちだってすごいんだよ！それは千歌ちゃんが一番わかっているとおもおう♪」

千「でも……あつ」

孝「千歌ちゃん？」

千「聖良さん、忘れてました……千歌ってばあんなこと言ってたっけ……」

千歌ちゃんは下を向き、小さく何かを呟いた。

次に何やら腕を組んでうんうん唸ってる……？

曜「お、おーい、千歌ちゃん……？」

すると次の瞬間、千歌ちゃんは顔を上げ、いつもの晴れやかで太陽のような笑顔が、俺たちを照らした。

千「そうだ！千歌が諦めてちゃダメなんだ！やる前から出来ないなんて、千歌らしくない！」

曜& amp ;孝「千歌ちゃん!!」

千「千歌たちが、A q u o r s が、新参者のグループなんかには負けるわけあるか！負けてたまるか!!全力で g e i o s i a c u o r e を倒そう!!」

孝「そこなくっちゃ！」

曜「いつもの千歌ちゃんらしくなったであります！」

千「そして戦いを華麗に勝ってみせて、その後みんなでカレーでも食べにい——」
曜& amp ;孝「それはもういいからっ!!」

油断も隙もありやし……

すぐにオヤジギャグを言おうとするんだから……

千「あつはは……よし！とにかくそうと決まれば作戦会議だよ！みんなで学校に集ま

ろう!!」

曜 & amp; 孝 「おーおー!!」

「A q u o r s v s g e l o s i a c u o r e 〱 渡辺曜争奪戦〱」が、ここで幕を開けた――

孝 a s i d e o f f

月 s i d e

佐伯麗奈 「月、A q u o r s はどうだったんだ?」

月 「あー、A q u o r s っていうより、リーダーと話をつけてきたんだ!」

結城朋華 「リーダー……高海千歌ちゃんどどげん話ばしてきたと?」

月 「ま、バトルに勝った方が曜ちゃんの隣にいられるって、自分のグループのメンバーに出来るってことを伝えてきたよ!」

麗 「私は渡辺曜に関しては興味はないが、私たちと同じく急成長を遂げ、人気も実力も全国レベルの強いグループとスクールアイドルとして戦えるのが楽しみだ」

朋 「そうやなあ、色んなグループと一緒にライブばすりやするほど、自分たちが強

うなつていくのがわかるけん、ウチも楽しみばい♪」

おやおや、これは2人して頼もしい発言♪

曜ちゃんをこちら側に引き込むために2人にも協力して貰えそうだね♪

つていうか、やつぱり朋華の博多弁はとつても可愛いなあ♡

方言使う女の子つて素敵だよねえ♡

にしても――

「千歌の曜ちゃんは絶対に渡さない!!!」

月「ふっ、ふふふっ……これはこちらとしてもやりがいがあるそうだね……」

麗「おい、朋華。なんか月がやばいぞ。このままじゃただの悪役だ」

朋「なんだか開の月ちゃんみたいだね「なんか闇ん月ちゃんのごたーなあ……強そうだけど、

私は怖いのは苦手かなうちやえすかとは苦手ばい」

月「……さて、2人とも！今日の練習を始めようか！」

麗「ああ」

朋「はい♪」

私が遅れてきちやった分、取り戻さない！

待
つ
て
て
ね、
千
歌
ち
ゃ
ん
♡

月
s
i
d
e
o
f
f

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
⋮
⋮
⋮

ライバル — 邂逅 i n c o n t r o —

孝宏 s i d e

— ぎゃん

弦音が悪い音を立てた。

瞬間、これは外れると察した。

— とす

力なく飛んだ矢は、的ではなく安土あづちに刺さった。

孝「はあ、集中力足りてない……」

ここは家の近くの弓道場。

浦の星に弓道部はあるんだけど、残念ながら弓道場はない。だからいつもここに来て練習している。

……といっても、俺は弓道部員じゃなくて、中学時代に部活でやっていた弓道に再びハマりだし、”体験入部”という形でここ最近お邪魔している。

女子部員「あれ？珍しいね、1中？」

1中っていうのは別にどこぞの中学校のことではなくて、的に矢が1本しか中^{あた}ってないってこと。

弓道は基本的に4本の矢を1本ずつ放って、その中^{あた}った数で勝敗を決めるシンプルなスポーツ。

4本中4本中れば”皆^{かい}中^{ちゆう}”、3本中れば3中、2本中れば”羽^は分け”と呼ばれる。

孝「あはは、ちよつと集中出来てないみたい」

女子部員「なにか考え事？」

孝「まあ、そんなところかな……少し外に出てくるよ」

同じクラスの弓道部の女の子にそう言^いって、俺は残^{ざん}心の型^{しん}から弓倒^{ゆだ}しをして、一つ掛^かをしてから射場を後にした。

……………

月ちゃんたちとの”曜ちゃん争奪戦”が宣戦布告されてから今日で3日目。

俺も含めたAqoursのみんなで月ちゃんたちのグループ”gelosia core”のライブ映像を見て、少なからず感じた劣等感。

とても始めたてのグループの成せるものではないと、その場にいた全員が思い、恐ら

くルビイちゃんや花丸ちゃんは、畏怖すら覚えたと思う。

けど、みんなの思いとは裏腹に、逆に嬉々とした表情で映像を見ていた子が2人。
曜ちゃんと千歌ちゃん。

曜「みんな! ジーツとしてても、ドーにもならない! だよ!」

千「ふふつ、そうそう! やる前から諦めてちやしようがない! 私たちには、今まで培ってきたものがある。支えてくれるたくさん仲間たちがいる。応援してくれる人たちがいる。そして、A q o u r s がある。曜ちゃんがついて、梨子ちゃんがついて、ルビイちゃんがついて、花丸ちゃんがついて、善子ちゃんがついて、果南ちゃんがついて、鞠莉ちゃんがついて、ダイヤちゃんがついて、孝宏くんがついて」

曜「こーいーんな素敵なグループが、負けるわけないっしょ! それ、に! 私も A q o u r s の一員として、みんなと笑ったり、泣いたり、時にはふざけたり! これからずーっつと一緒にいたいし!」

ほんと、逞しい子になったね、2人とも♪

今の2人なら、どんな夢だって叶えられそうな気がしてきたよ!

諦めちゃダメなんだ、その日が絶対来る……

新たなA q o u r sの” S T A R T : D A S H !! ”だね♪

.....

遠くに遠くに……

力を込めすぎず……

肩甲骨を使ってゆつくりと……

ここで保って伸び続ける……

辺りの音は何も聞こえない。

視界もただ一点、的を捉えていて、他は何も見えない。

伸びの限界点。

そこで離れる。

——きやん

金属音にも似た高い弦音の音。

そこから放たれた矢は、迷うことなく真っ直ぐに、的を捉えた。

——ぱんっ

的中。

あの音を聞いて震え上がる自分がいた。

稀に見る綺麗な中りをした。

ど真ん中を捉えた、完璧な一射。

何も聞こえなかつたさつきとは一変、セミの鳴き声や近くを走る車の音、多少のざわつきといったありとあらゆる音が聞こえ、その音たちが俺を祝福しているかのように感じた。

女子部員「さすが秋月くん、急に変わったね！」

孝「はは、ありがと」

女子部員「外に行つてゐる間に何かいい事あつた？」

まさか曜ちゃんとか歌ちゃんのことを考えて嬉しくなつてたなんて言える訳もなく、ただ一言。

孝「素敵なことがあつたよ！」

セミの鳴き声はまだ俺を褒め称えているようだ。

孝 a s i d e o f f

曜 side

曜 「ほえ、やっぱ上手だなあ〜♪」

私、渡辺曜は今、孝宏くんが最近またやり始めた弓道の練習を見学しに来ています！
凛々しい表情で矢を番え、弓を引く姿はとても様になっていて、めちやくちやかっこ

いい……／＼／

女子部員 「あの一、曜ちゃん？いつの間にそれ着てたの？」

曜 「うん？ああ、今さつきだよ！家から持ってきたんだ！」

私は弓道部で使うような道着と袴を着て、女子専用の胸当ても付けた、”完全に傍から見たら女子弓道部員”な格好をしています！

女子部員 「えっ、曜ちゃんも弓道やってたの?!」

曜 「ん？全然？」

女子部員 「……なんで道着持ってるの？」

曜 「コスプレ？」

女子部員 「コスプレ?!」

——ぱんっ

おつ、また中つた！これで4本連続！

女子部員「およ、皆中だ。正式に入って戦力になってほしいもんだよ……」

曜「ふっふっふー、孝宏くんはA q o u r sのマネージャーだから渡さないであります！」

女子部員「くうー！先に一緒に活動してたからつてずるいぞ曜ちゃん！！うりやうりやうー！」

曜「あつはははははは！やめてえー！」

全力で腋をくすぐられてその場で悶える。

？「あつ、こらこら、曜ちゃんの弱点はここだよ？」

曜「へっ？」

声の主は分からなかった。

ただ分かったのは、腋ではなく脇腹をくすぐられていたこと。

脇腹：私の弱点であり、そこをくすぐられるととんでもなくくすぐったくなっておかしくなってしまう部分。

なんて解説している暇もなく、私は悶絶し、天に昇った際に渡る3本の川の2本目を

跨いでいた。

そんな私の脇腹をくすぐった正体。それは――

孝「あつ、月ちゃん！つて……曜ちゃんがぶつ倒れてるけど、どしたの？」

月「ちゃんでした。」

孝「宏くんが声をかけてくれずに月ちゃんがくすぐり攻撃を続けていたら、多分私は3本目まで渡りきっていたと思う……危うし……」

月「やつほく、孝宏くん！いやはや、この女の子が曜ちゃんの腋をくすぐってたから、弱点は脇腹だぞーって教えてあげたのと同時に実践してただけ♪」

孝「ああ、ナルホド……」

いや納得するんかい。

私今史上最大に悶絶して顔真っ赤っかにして大変なことになってるんですけど、ちよつと心配して？

孝「……／＼／／」

えっ、全然顔合わせしてくれないんだけど。

何？私もしかして嫌われたの？

孝「あー、曜ちゃん？自分の服装を確認して？」

ん？服装？

袴履いてて道着着て……

曜「びよっ?!」

見えたのは道着から覗く水色の下着。

いつの間にか胸当ては取れ、道着がはだけて下着がチラリズム。

孝「曜ちゃん、道着の下にはインナー一枚着るもんだよ……／＼／＼」

孝宏くんはきつと見ないようにつて顔をこちらに向けなかつたんだろうけど……

曜「みっ、見えたなら早く言つてよバカああああ!!!」

——ぼちゃん!

孝「ヨソロっ?!?!」

月「おー、的に中るよりいい音したねえ!」

ううっ、もうお嫁に行けない……ぐすっ……

曜「……それで？言うことは？」

月「やだなあ曜ちゃん、軽い冗談じゃ——」

——バンツ!!!

月& amp ;孝「に、や、つ、?!?!」

机を思いつきり叩いて立ち上がり、私は精一杯目を見開いた状態で月ちゃんに顔を近づけた。

曜「こ　つ　ち　は　死　に　か　け　た　ん　だ　け　ど　？」

ちよつと手が痛い……

月「おおおおお落ちて着いて曜ちゃん、目が死んでる、目が死んでるから！」

孝「月ちゃん！ここはもう素直に謝る他に生きる道はないよ！」

月「そ、そうだよね！……ごめん曜ちゃん！つい魔が刺しちゃった☆」

孝「あつ——」

このあと月ちゃんをめちゃくちゃ叱りました。

お詫びに松月でみかんタルト奢ってくれて、気分良くなって許しちやつたのは間違いだったかな……？

月「いや、まさか曜ちゃんがあそこまで怒るとは……小さい頃はもつとかわいくぶりぷり怒ってたのに……もうガチ怒りだよ……」

曜「……あれ？みかんタルトだけじゃなく、みかんどら焼きも所望で？」

月「ままま、まっさか〜!!!」

孝「あはは、月ちゃんも懲りないねえ〜」

バスの中、3人で他愛のない話をしてたら、松月から沼津駅にすぐに着いちやっつた。

孝「ほっ！沼津とうちやく〜！」

そんな中で私はとあることを思い出した。

曜「そういえば月ちゃん、なんであの弓道場に来たの？」

月「ん？ああ、実は——」

？「月ちやああああああああん!!!!!!」

孝「えっ、この声は……」

——はぐっ

月「おっとと、あれ？どうしたの朋華？」

朋「どうしたの？やなしゃなないばい！ずつと探しとつたんばい！」

孝「朋華……ひ、久しぶり……」

朋「ん？あんた……もしかして孝宏くん?!きやー！久しぶりやなあ!!会いたかったば

い!!!」

——はぐっ

朋「お久しぶりんハグばい！えへ♡」
 んー……と？

え、なんかめっちゃハグしてる……

おーい、彼女は私だぞ。

え、なんぼしよると？

こげんことして許されると思つとーと？

孝「ちよ、こら！誰でも彼でもハグするなつて言つてるでしょ！」

朋「いやん、孝宏くんつてば！うちがハグするんなあいらしいか女の子とあいらしいか男の子だけやつてば！」

孝「遠回しに俺の事可愛いつていうのやめてよ……」

まつて、孝宏くんが博多弁理解してる?!

え、すご！住んでたわけじゃないのに！

朋「……ん？あ、そつちんあいらしか女ん子はもしかして……A q o u r s ン渡辺曜ちやん？あいらしかく！本物もすごか美人しやんだあ♡」

——はぐつ

曜「ふえつ?!／／／」

孝「あはは……ごめんね曜ちゃん、朋華はかわいい子を見つけるとすぐにハグしちゃ

うんだよね……まるでどこかの脳筋ダイバーさんみたいだね？」

果『へくちつ！……んー？誰かが私のよからぬ噂をしているな……？きつと千歌だ、そうに違いない』

千『へくちつ！……むむつ、千歌のこと、誰かが話の種にしてるなく？どーせ果南ちゃんが千歌のことバカにしてるんだ！……よしつ、次会ったらみかんの刑だ！』

急に知らない女の子からハグされてとんでもなくキョドってる渡辺曜、17歳であります！

けど……なんだか……

とくくくくくくくくくくてもいい香りがする……♪

優しいフローラルの香り……

うつとりしちゃう……♡

？「おい朋華、渡辺曜が困惑しているぞ」

朋「あつ、麗奈ちゃん！来るのが遅かばい！何しとったと？」

麗「いや、すまない……ここに来る途中で荷物をたくさん持ったおばあさんに遭遇し

てな。目的の場所まで荷物を持って同行してあげたから遅くなってしまった」

月「ふふっ、人助けが大好きな麗奈らしいね♪」

ん……？ちよつと待って……

この2人見たことあるよ……？

麗「ん？もしかしてお前……孝宏か?!」

確かこの2人、月ちゃんと一緒にスクールアイドルやつてる……

孝「えっ、まさか麗奈?!久しぶり!!」

g e l o s i a c u o r e の 2 人 だ ……

つまり月ちゃんが今日弓道場に来た理由って……

月「はいはいはい!! 曜ちゃん、孝宏くん! 君たちに会いに来た理由は、もう分かるよね?」

孝「ふっ、随分と豪華なご挨拶なこと……」

月「紹介するよ。ボクたちが g e l o s i a c u o r e のメンバーだ」

曜「この3人が……」

改めて見るとすごい迫力。

なんて言うんだろう……：オーラというか、貫禄というか……とてもスクールアイドル始めたてのグループの醸し出せるものじゃない雰囲気纏ってる……

写真とか動画で見るとは違う……

リアルで会ってこそわかる迫力が、そこにはあった。

ううっ、平気とか思ってたけど、これもしかして結構やばい……？

麗「改めて、gelosia cuoreの振り付け担当の佐伯麗奈だ。よろしくな」
朋「うちや作詞作曲担当ん結城朋華ばい！よろしゅうね♪」

月「そして、衣装担当兼リーダーの渡辺月です！……ってボクの紹介はいらんか
……あはは」

鳥肌が立った。

私たちと遜色ない。

それどころか、その上を行くかもしれない。

そんな可能性を秘めた、とても恐ろしい敵に遭遇している。

次のラブライブに出場するには、こんな化け物を倒さなくちゃいけないの……？

曜 s i d e o f f

ライバル ―― 欠けた核心 ――

孝宏 side

月「つてなわけで、この3人で”gelosia cuore”だよ。改めてよろしくね？」

改めて見ると、なんともすごいメンツだなあ……

てゆか、朋華と麗奈の2人をコントロールできる月ちゃんがすごすぎる……

【博多の暴れ馬】として福岡県内にその名を馳せていた朋華。実は今みたいにおっとりふわふわわわって感じじゃなくて、超活発なやんちゃガールだった(らしい)。

こつちに引つ越してきて俺と友達になった時にはそんなこと無かったんだけど、一体どうしてこうなった……？

【佐伯家の狂犬】こと麗奈は、未だにその通り名が付いていて、麗奈の実家の佐伯家は東証一部上場企業の”佐伯ホールディングス”。強面の親父さんがCEO(最高責任者)で、その娘でありながら親父さんの専属ボディガードをしていたためにその名がついた。実際は優しい心の持ち主なのだが、ツリ目が全てを物語っているかのよう、その

通り名を未だに消させてくれない。

……とまあ、こんなヤバい子達なんだけど……

どうやって手懐けたんだか……

月「これからボク達は、君たち *Aquors* を全力で倒しに行く。そして曜ちゃんを *gelosia cuore* に連れてくる」

麗「まあ、私は渡辺曜を手に入れて何か利益があるとかいうのはないから、そこに興味はない……が、強いグループと戦うというのが私をもっと強くさせてくれる気がする。この戦いには価値があると私は思っている」

朋「うちもこん戦いには興味があるばい！傷つけあう戦いは好かんばい……ばってん、スクールアイドルとして、正々堂々とお互いん実力ば競うんな好きばい！」

私を強くする……

正々堂々実力を競う……

この3人には、スクールアイドルとして確固たる柱が、己の中にしっかりと築かれている。

そりやここまで人を惹きつける強さがある訳だ……

……でも。

曜「私たちは負けないよ。だって、輝きを追い求めて常に高みを目指してるんだから

！」

あら、曜ちゃんも言うようになったね。

なかなかいい事言うじゃない。

……ここにあのみかん娘がいたら、この発言に反応して、「あ、今のは高海千歌の高海と、高みをかけた……」とか言いそうよね。

よかつたなくて……

孝「そうだね。俺たちは確実に強い。みんなの想いと、希望と、熱い気持ちをもって、まだ見ぬ輝きを目指して、精一杯羽ばたいているからね！」

朋「孝宏くんも言う言ううことことななったたねえ……あん頃ん泣き虫くんとは大違いやなあ」

孝「誰が泣き虫か！」

月「あははっ！でもまあ……今のは宣戦布告つてことで捉えちゃっても、いいんだよね？」

月ちゃんの目付きが鋭くなった。

本気の顔だ。

曜「もちろん！これで正々堂々、恨みっこなしの勝負が出来るね！」

麗「フツ……いい勝負ができることを期待しているよ」

孝「こちらこそだよ麗奈。全力を尽くしていい勝負になるように、お互いがんばろう

か」

朋「燃えてきたー！うち、たくしやん頑張つて練習して、絶対にこん勝負に勝つけんね！」

決意新たに、2つのグループの一大勝負の火蓋が、ついに切つて落とされた。

孝「つてことで、絶対にこの勝負、負けるわけにはいかないんだ。今まで以上にきつい練習になるかもしれないけど、頑張つて着いてきて欲しい！」

千「もちろん！曜ちゃんを守るためにも、A q o u r sとしての誇りを掛けて、絶対にこの勝負に勝とう！」

果「そうだね！負けるのはプライド的にも許せないし、何としてでも勝ちにいこう！」
善「クククツ、約束されし刻ときが来たようね……この最終戦争ラagnaロクで我々に優美しよなる栄光りをもたらすことを、今ここに堕天使の名において高らかに宣言致しましょう……」

鞠「ソーハードなプラクティスを華麗に乗り越えて、ストロングなライバルを見事に蹴散らしてやるデース！」

なんとも頼もしい発言の数々……

これならみんななんとか練習に耐えきつてくれそうだ！

……だけど、

ル「る、ルビィ、そんな大変な練習こなせるかなあ……」

花「マルも不安ずら……体力が持たない気がする……」

梨「私もそこまで出来るかどうか……あんまり自信が無いわ……」

ダ「なかなかハードなものになりそうですものね……」

こちらの4人は少々不安そうな面持ち。

今までにやった事のない練習も取り入れるし、練習時間も延長する。

これまでに以上にハードな練習になるのは間違いないけど、それを乗り越えられれば間違いなく *geiosis* *cuore* に勝つことが出来るはず！

だからこそみんなには頑張ってもらいたい。

孝「みんな！この戦いには曜ちゃんだけじゃなく、*Aours*としてのプライドも掛かっている。後から出てきた新参者のグループに負ける訳にはいかない！なによりそれは *Aours* のプライドが許さない！だから、かなり酷なものになるかもしれないけど、これ乗り越えれば間違いなくみんなはステップアップできる！」

曜「彼氏の言い分だからって訳じゃないけど、私は孝宏くんを信じる。キツくて、ツラくて、体力おぼけの私や果南ちゃんですえ苦しいものになるかもしれない。けど、

きつとやった分だけ返ってくると思う。きつと……必ず!」

果「私もそう思う! 考えるより先に動いちやうけど、結局そうしてみた方が案外上手くいくって!」

ダ「ですが……私と果南さんとで違うように、メンバーそれぞれ持ち合わせている体には差異がありますし、回復力にも差異があります。とてもみなさんが同じハードな練習メニューでやるというのは……」

ダイヤちゃんの言うことはごもつともで、核心を捉えた至極真つ当な意見。

確かにその通りだ。みんながみんな同じメニューなんてこなせると思っていない。

ルビイちゃんに遠泳30kmやらせるようなもんだから。

孝「うん、もちろんみんな同じメニューじゃないよ。それぞれに合ったメニューを考えてきた!」

鞠「What?! 昨日の今日で作ってきたっていうの?!」

梨「すごい……本当にみんなそれぞれメニューが違う……」

ル「こ、これならルビイでも出来るかも……!」

俺の作った練習メニューは、いつもやってる基礎のトレーニングを鑑みて、それぞれがこなせるであろう少し上のレベルのトレーニングを加えたもの。最強の果南ちゃんに課したメニューを+1.0とするならば、ルビイちゃんや花丸ちゃんは+2ほど。

曜「……みんなのこと、しつかり見ててくれてるんだね？」

孝「まあね。これくらいしか俺には出来ないし、少しでもこうしてみんなに褒めてもらえるのはやっぱり嬉しいよ」

まあそれはいいとしても、少し上のレベルのトレーニングとはいえ、かなり身体に負荷のかかるトレーニングだ。

体力面で一番不安な面が残るルビィちゃんと花丸ちゃん。

きつと大丈夫だとは思っているけど……

孝「……………んっ……………ん……………えっ？」

どこだここ……

いつの間に寝てたんだろう。

目を開けるとどこか知らない場所にいた。

見えるのは真つ白な天井と、薄い緑がかかったカーテン。

微かに香る薬剤のような独特の匂い。

時折聞こえる〇〇〇号室の患者さんが云々という言葉からしてここは……

孝「……病院……だよなあ……」

でもなぜ……

身体が不調を訴えていた訳じゃない……はずだったんだけど。

曜「……あつ、孝宏くんっ!!」

孝「うわっ?!」

曜ちゃんの声が聞こえたと思つたら、次の瞬間には曜ちゃんの腕の中にいた。

すすり泣く声、曜ちゃんから聞こえるものだ。

徐々に俺を抱きしめる力が強くなっているのがわかる。

孝「よ、曜ちゃん……どうしたの……?」

曜「どうしたのじゃないよ!!!突然倒れて意識を失つて……心配してたのに……」

突然倒れて意識を失つた、ねえ……

今こうして病院のベッドに寝かされてるってことは、何かしらの処置が終わっているってことだよな。

診断結果とか出てんのかな?

曜「孝宏くんは」いっかせいしきしようしつほつせ「一過性意識消失発作」、簡単に言えば失神……孝宏くん、働きすぎ

ちやつたんだよ……」

孝「失神……そっかあ、俺働きすぎたのか……」

まあ思い当たる節はある。

g e l o s i a c u o r e の研究に明け暮れてつい夜更かししちやったり、午後練終了後も翌日の練習がしやすくなるような環境づくり、最後まで残って片付けや掃除、部室の鍵締めなんかの後処理もしてきた。

梨子ちゃんに勧められてやった作詞が思いのほか楽しくて、つい寝る間を惜しんで作詞しちやったり……いや、これは単純に俺が馬鹿なだけか。

直近で言えば、対 g e l o s i a c u o r e としてみんなそれぞれの練習メニューを1日で完成させてきたりなんかもしてた。

これらの理由から俺は過労で倒れたのか。

びつくりするほど体は元気なだけだなあ……

曜「これから向こう1週間は絶対安静。孝宏くん、最近あんまりご飯食べてなくて栄養足りてないみたいだから点滴も」

孝「1週間?!そんなに休んでたら g e l o s i a c u o r e との対決が……」

曜「それは大丈夫、私たちだけでなんとかするから!だから……孝宏くんは今自分のことだけを考えて……?」

孝「でもっ……!」

曜「お願いだから!!!」

見たことの無い曜ちゃんの厳しい表情、聞いたことも無い激しい声。そんな曜ちゃんの強い口調と威勢を前に、俺は押し黙ることしか出来なかった。曜「お願いだから……これ以上心配させないで……」

夜。

外はいつの間にか暗くなつて、街灯がつき始めている。

病院の中は至つて静かだ。

……なんか時々ものすごいびびきが聞こえるのは無視しておいて。

夜の病院にはいろんな噂話がある。

主に心霊系の噂なんだけど、さすがにそれはないだろうっていう噂なんかもある。

人間の好奇心というものは末恐ろしく、噂とわかつていても確かめずにはいられないものだ。

孝「これ以上心配させないで、かあ……」

昼間聞いた曜ちゃんのあの言葉。

過労で倒れるなんて、生まれて初めてだ。

練習メニューでみんなが倒れないか心配してる前に自分の体調を心配してなかっただなんて、呆れた。

自己管理は出来ていたと思っていたのになあ……

孝「今はとにかく自分の体を最優先に、だよな」

ならばもう寝よう。

噂話を確かめに行つてまた倒れてしまったらどうしようもない。

今は大人しく、曜ちゃんのあの言葉の通りにおかないとだな。

孝
a
s
i
d
e
o
f
f

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:

番外編

バレンタインデー&amp; a m p ; ホワイトデー合併特別編

バレンタインデー編――

曜 s i d e

曜「……んー、こんなもんかな……?」

今日、2月13日はバレンタインデーの前日!

そして今は夜の10時20分!うーん、眠い!

……ってそんなこと行つてられないや、頑張つて作らなきゃ!

そう、私は今チョコレートを作っています!

正確に言えばチョコレートテリーヌっていうお菓子なんだけど……

作るの簡単なんだけど、そこにどうアレンジを加えようかちよつと悩んで、ドライフルーツとかナッツを乗せたら美味しいかなって思つて実践中……

だつて……最愛^{本命}の人に送るチョコ^{チョコ}だし……
／／

ありきたりじやつまらないから……／／

曜「……考えるだけで恥ずかしいって何事……!!／／／」

……って、だからそんなこと考えてる暇もないんだってば!

しつかり作って早く寝よう!寝坊なんてしたら最悪だし!

よし、曜ちゃん印のチョコテリヌ!

待つてろ孝宏くん!!!

曜 s i d e o f f

千歌 s i d e

千「わーっ!志満ねえ!また失敗したー!!!助けてよおーっ!」

志「あらあら、大丈夫じゃ……なさそうね……」

うう……やつぱり苦手な料理とかやるべきじゃなかったのかなあ……?

でもでも!チョコを溶かして分量通りの材料混ぜて、型に入れて焼くだけなんだよ?

何故か全部焦げ焦げになっちゃうんだよ……

志「あら?千歌ちゃんこれ、焼く温度がレシピと違うわよ?設定200℃って高す

ぎないかしら？」

千「200℃?!?! 170℃にしたはずなんだけど?!」

あう……原因はこれだったのか……

機械の設定も出来ないなんて、千歌はダメな子だね……

千「千歌、作るのやめるべきかなあ……？」

志「ふふつ、大丈夫よ千歌ちゃん。どんなに焦がしても、想いが伝わればきつと喜んでくれるわ♪」

千「うう……！志満ねえ……！！！！わかった！千歌がんばる！！！」

志満ねえはやっぱ優しいなあ！

よーし、頑張つて作るぞー！！おー！！

千歌 s i d e o f f

孝宏 s i d e

明「……おやおや？孝宏くんは2月14日の今日この日に一体全体何を期待してそわそわしているんだーい？口が激硬で有名な美人お姉ちゃんに話してごらーん？」

孝「そつ、そわそわなんてしてないし！期待も何も無いし！それに！口が激硬な人は自分から激硬なんて言わないし、自分で美人とか言っちゃやうあたりどうかしてる……つてもう！ツツコミどころ満載すぎて大変なんだけど！！」

明「あつははははは！いや、ごめんごめん、たあくんがそわそわしてるからつからかいたくなつちやつてさ！」

孝「だから！そつ、そわそわなんて……して……ないし……」

我ながら嘘をつくのが下手くそだとこれほど思ったことはないな……
ほんとはめちやめちやそわそわしてる……つてかわくわくしてる。

毎年毎年思うんだけど、美人幼なじみ3人とA q o u r sの美人6人からバレンタインチョコ貰えるなんてほんとにすごいことだと思っただよね……どうしても顔がにやける……

明「無理もないよね、だってこんな美女からチロルチョコひとつ貰えるんだから、そわそわするのも仕方が無いよ」

孝「あー、はいはい、ソウデスネー、タノシミスギテオレチャイソウダヨー。コトシハドンナアジノチロルチョコガモラエルノカナー、タノシミダナー」

明「そっかそっかー！ほい、今年は「アゴ出汁寄せ鍋味」だぞ！味わって食べるよ！」
 孝「棒読みでもいいんだ……って「アゴ出汁寄せ鍋味」つてなに?! チョコ成分どこにあんの?! 「砂糖と間違えて塩使っちゃった! てへぺろ!」つてレベルじゃないでしょそれ!!!」

はあ、朝っぱらからなんて仕打ちだ……

もうバス来ちやうよ……

曜「あつ、お、おはヨーソロー! 孝宏くん!」

孝「お、おはおはヨーソロー! 曜ちゃん!」

曜「きよ、今日もいい天気でありますな!」

孝「そ、そうだね!」

曜& a m p ; 孝「……………」

これも毎年そうなんだけど、変に緊張して俺も曜ちゃんも話せなくなっちゃうのはな
 んでなの!!!

うーっ、はやく千歌ちゃんと梨子ちゃん乗ってこないかな……

梨「あ、二人ともおはよう! いい天気ね!」

曜& a m p ; 孝「「梨子ちゃん!!!」」

梨「わっ、ど、どうしたの〜? ……あつ、ふふつ、顔真っ赤にしちゃって……♪」
 救世主梨子ちゃんはこの状況にどうやら勘付いたようで、何やら不敵な笑みを浮かべている……

梨「ふふつ、それじゃあ孝宏くん! はい、バレンタインチョコどぞ! 甘すぎるの苦手つて言つてたから、ビターチョコのトリュフを作つてみました♪」

孝「おお、好みまで分かってくれていたなんて……ありがと梨子ちゃん!」

梨「ふふつ、どういたしまして♪……ほら、千歌ちゃんも早く乗りなよ?」

千「……うう、うん……」

千歌 ちやんブルートウス、(やっぱり) お前もか。

と思つたら、なんだか千歌ちゃんは浮かない顔をしている。毎年恒例、千歌ちゃんの顔がみかん……ではなくりんごのように真っ赤になつてバスに乗つてくるのとは違つた。

千「あのね……今年、初めて手作りチョコを作つてみたんだけど……何回やつてもどうしても上手くいかなくつて……焦げてるガトーショコラになつちやつて……」

孝「うそ! 千歌ちゃん手作りしてくれたの?! もうそれだけでうれしいよ!」

千「えっ……?」

孝「だって、今まで既製品のチョコをそのままくれたのに、今年はわざわざ手作りし

てくれたんでしょ？だったらその想いだけでじゅーぶん嬉しいよ！」

梨「ね？だから言ったじゃない。孝宏くんならそう言ってくれるって♪」

千「孝宏くん……えへ、ありがと！／＼／＼」

孝「おう！……あ、確かに焦げてるけど、普通にめっちゃ美味そうだよ……あ、やっべ、ヨダレ出た……」

曜「えっ、朝ごはん食べたんじゃないの？」

孝「いやあ、それが色々あつて食べ損ねたんだよね……」

色々……ほんとに色々とあつてね!!!

姉貴め……

ちなみに「アゴ出汁寄せ鍋味」のチロルはゲロマズでした。まじでただのアゴ出汁寄せ鍋……

曜「じゃ、じゃあさ！これ！食べない??作ったんだけど……」

おつ、今年は渡すタイミングが早いなあ、嬉しいぞ〜！

孝「……ん？曜ちゃんこれ……なに？」

曜「いや、なにつて、チョコテリーヌ……えっ」

曜ちゃんが渡してきたものは、なんと……

曜「ば……ぱんっ……?!?!」

孝「……くれるんですか？」

曜「あ、あ、あ、あげないってば！バカー!!!／／／」

孝「なんつ——へぼふあ?!?!」

強烈ボディーブローいただきました……

別の意味でごちそうさま……でし……た……

孝宏 s i d e o f f

——ホワイトデー編——

孝宏 s i d e

孝「ほい、姉貴。ホワイトデーだから一応これあげるわ。ありがたく食べたまえよ！」
明「えっ、マジ？あんなものあげたのにお返しとかくれるんだ？サンキュー！……っ

てなにこれ」

孝「ん？デスソースクッキーだよ？美味しく食べてね、感想待ってるZ E ☆」

明「仕返しのもり……？」

孝「まさか！バレンタインのお返しだよ」

明「じゃあお返しはこれを食べるアンタの馬鹿面つてことでっ!!!」

孝「むっふおあ?!?!ちよ!!!なにこれ嘘でしょ?!?!辛っつっつっつ!!!えっ、辛っ——痛てえ

?!?!めっちや痛てえんだけど?!?!」

明「あっははははは!!!だっせえ……ぶっ、ふははははは!!!あー、涙出てきた！面白

きるわ！あっははははは!!!」

くそ！もうこの姉貴ぜってー許さない!!!

今に見てろ！すっごい仕返ししてやるんだから！

……辛いよ、とても、辛いよ……

孝「はあ、酷い目にあつたよまつたく……」

曜「あはは……それは大変だったね」

孝「あのあと辛味を抑えるために牛乳飲みまくって、軽くお腹壊しかけたよ……つと、それはそうと。はい！曜ちゃんお返しね！一応今回はキャラメル風味のクッキーとみかんペーストを混ぜたみかんクッキーの2種類を作ってみました！」

曜「えっ、すごい！みかん味のクッキーとか見たことないなあ……なんか孝宏くんほんと女子力高いよねえ……ありがと！おいしくいただくね？」

なんか曜ちゃんに褒められるとめっちゃ嬉しい♪

千歌ちゃんと梨子ちゃんにも喜んでもらえるかな？

千「おいーっす！二人ともおっはヨーソロー!!」

梨「えと、おはヨーソロー♪」

なんだろう、2人のおはヨーソローにはなにか決定的な違いがある……

曜「おはヨーソロー！それより2人とも！今年の孝宏くんのはすごいです！」

梨「え？すごい？」

千「そっか、梨子ちゃんはこっちでのホワイトデーは初めてだもんね！孝宏くんは料理めっちゃや上手で、毎年ホワイトデーにはすごいものお返ししてくれるんだよ！……今年はどうなのかな♪」

孝「あはは……あんまり期待しないでね？」

楽しみにしてくれるのは嬉しいんだけど、毎年期待値が高すぎて困ってるのは内

緒ね？

梨「なんだか私も気になってきちゃった！どんなものを作ったの？」

孝「今回はクツキーで、キャラメル味とみかん味の２種類を作ったんだ！」

千「みかん?! いやったあ〜!!!」

あつはは、案の定大はしやぎしてる……

孝「ちよつと食べてみてほしいんだ！感想を聞きたくて……」

曜「うん、わかった！それじゃあ……」

「「いただきまーす」」

どうかな……

「「?!?!」」

んん?!なんだ?!不味かったのか?!

「「辛つつつつつ!!!」」

曜「なにこれ！めづちや辛いんだけど!!!」

千「口の中ひりひりして痛いよ〜!!!」

梨「刺激……強すぎ……」

まさか！作ったはずのクツキーじゃなくて、デスソースクツキー詰めちやったの?!?!

いや、ちゃんと作ったやつを入れた！

じゃあ、誰かにすりかえられた……？

となると……犯人はもう割れている……

孝「あのバカ姉貴イイイイ!!」

その日、内浦には辛さに悶える3人の少女の悲痛な叫び声と、姉への復讐を誓った1人の少年の怒りの叫び声が響いていたという……

孝宏 s i d e o f f

T o b e c o n t i n u e d …

渡辺曜生誕祝賀祭2019 前編

孝宏 side

ここは浦の星学院スクールアイドル部部室。

孝「今日はみんな集まってくれてありがとう、これからみんなにとある極秘任務の内容を伝えたいと思う……」

ル「極秘、任務……ゴクリ……」

果「みんなって……曜がいないけど？」

ダ「曜さん抜きで平気なんですか？」

集まったメンバーは1年生と3年生、そして千歌ちゃんと梨子ちゃんと俺。

果南ちゃんの言う通り曜ちゃんがいらない。

孝「いやいや、むしろ今は曜ちゃんがいちゃいけないんだよ、ダイヤちゃん」

花「どういふことずら？」

よし（ヨハネよっ！）ヨ「まさか……ッ！曜が天界に昇天して、地獄との最終戦争に備えているから、私たちで対抗策を練ろうと言うのね?! だからヨハネの存在が必要不可

欠だったというわけなんだわ！さすがリトルデーモンダンタリオンね！」

孝「色々違うけど、何よりリトルデーモンダンタリオンってもしかしくなくても俺の事だよね……」

ル「あはは……それで、曜ちゃんはどうしていないの？」

話がそれかけてた、ナイスルビイちゃん！

孝「集まってもらったのは他でもない……そう、来たる4月17日！」

鞠「April 17th? Tomorrow? Why?」

孝「え、えーと、び、びこーず……」

梨「孝宏くん無理しないで、日本語で平気だから……もう鞠莉さんってば、孝宏くんは英語苦手なんだから英語で聞いちゃダメですよ？」

鞠「Oh! Sorry sorry! But I can't speak Japanese. I want you to speak English?」

孝「最後日本語じゃなかっ……って、また話が逸れた……」

鞠「ふふっ、ゴメンねっ？孝宏が英語を頑張って話そうとしてるのが可愛らしくてっい、ね☆」

完璧なウインクをばちこーんと決められてしまった。

ううつ、やっぱ鞠莉ちゃんには敵わない……

孝「と、とにかく！4月17日はなんと……！」

千「なんと曜ちゃんのお誕生日なのです!!！」

孝「あーっ!!!なんとという卑劣な横取り!!!卑怯なり……高海千歌卑怯なり……っ!」

千「ふっふっふ、まだまだ甘々だぞ孝宏くんや。もつと精進したまえよ!」

孝「くっ、悔しい……」

果「さつきから一体なにしてんの……」

か、果南ちゃんにツッコまれる日が来るなんて……

花「もしかして……曜ちゃんの誕生日だから何をプレゼントしてあげればいいか悩ん

でるすら?」

孝「そのとーり!いい勘してるねマルちゃん!」

ダ「今の会話の流れからして誰でも気が付くと思うのですが……」

鞠「細かいことを気にしちやダメよダイヤ。きつと孝宏は曜への誕生日プレゼントがいつもありきたりすぎるから、恋人同士になつて結構経つてるのもあるし、ありきたりな今までのプレゼントから脱却すべく、何か違う新しいものをプレゼントしようと思つて頭がいっぱいいっぱいになつちやつてるから……」

孝「心と脳内を隅々まで詠んだ上に的確な説明どうもありがとう鞠莉ちゃん!!!／

鞠「あら？ドンピシャだったみたいね♪」

そんなに俺ってばわかりやすいかな……？

顔には出さないタイプって自負してるんだけど、もしかしなくてもそんなことない、のか……？

曜ちゃんにはいつも思考読まれてはからかわれるし、千歌ちゃんには幼なじみ特有の何とかがつてやつで考えてることバレるし、梨子ちゃんには「孝宏くんってわかりやすいわね♪」なんて言われたし……

きつとみんなの勘が鋭いだけだ、うん、絶対そうだ、そうに違いない (☒◀☒)

孝「まあ鞠莉ちゃんが言ったことは全て正しい！もうなんも間違つてない！だからみんな！どうか、どうかこの孝宏めにすんばらしいアイディアをちょうだい……」

いやはや情けない。

毎年毎年曜ちゃんの誕生日は、曜ちゃんに似合うと思つていつも洋服しかあげられてないんだよね。

1回だけ「これじゃいかん！」と思つて、手作りクッキーなんかあげようと思つただけ……

あの時の孝宏くんには料理の才能があまりにもなかったみたいで……

あれ……思い出ただけで涙が出てくるな……おかしいな……

孝「べつ、別に！失敗して丸焦げになったりしていつも通りのプレゼントしかあげられなかったなんてことないんだから勘違いしないでよねっ！」

花「わっ、いきなりどうしたずら?!」

ヨ「地獄の悪魔達が扱う闇の炎に存在を掻き消されたりでもしたのかしら……?」

花「それはないずら」

ヨ「なんでよっ!!」

果「でも明日誕生日なのにどうして今日私たちに話したの？」

孝「いや、ギリギリまで自分でアイディア出そうと思って悩んでただけど、結局出なくて今日になっちゃったんだよね……」

果「いつもの良くも悪くもある、いつもの癖が出ちゃったんだね……」

千「んー、じゃあ千歌はやっぱいつも通り洋服をプレゼントしてあげるのが無難だし、いいと思うんだけどなあ……結局誕生日の前日になっちゃったわけだし……」

梨「えっ、いつも洋服をプレゼントしてあげてるの？」

千「あー、ほら！この前梨子ちゃんと曜ちゃんであわしまマリンパーク行った時の曜ちゃんの服覚えてる？あれが去年孝宏くんがプレゼントしたワンピースだよ！」

曜ちゃん、去年の服まだ着てくれてたんだ……

なんかすげーうれしい!

梨「あのワンピース孝宏くんが選んだものなの?!すっごく可愛かった!孝宏くんセンスあるよね♪」

孝「えっ、そ、そうかな……?」

去年あげたワンピースはオーバーサイズシャツワンピースって言って、ちよつと大きめに作られてるワンピース。

水色のストライプ柄で、前後両方にたつぷり入ったウエストタックが印象的なもの。

スニーカーなんかで合わせるとオシャレなもの。

って店員さんが言ってたんだ……

千「いやいや、孝宏くんにあんなセンスないっつて。どうせ店員さんのオススメしてくれたものを真に受けて、「これしかないっ!」とか言っつて買ってるんだよ」

孝「なんでそういつもわかっちゃうの……?」

千「幼なじみだから?」

孝「もうそれ聞き飽きたーっ!!」

「「「「「あはははははははっ!」「「「「「」

そしてこの日は後に加わった曜ちゃんも含めて、しつかり部活をやつて、無事に帰路

に着きました。

……つておい、なにも解決してないじゃんけ！

うーっ！どうすんのさこれ……

仕方ない……あの助っ人に助けを求める必要があるな……

多少の犠牲は……それなりに覚悟してる、うん。

つてか、みんな居ないんだけど……

今日俺ぼっち帰宅？

はあ……

孝「なんて日だ！」

いや……あの、言いたかっただけですはい。

孝宏 side off

曜 side

……なんだろう？

孝宏くんの様子がここ最近おかしい……

話しかけても、忙しいだのなんだのでなかなか話せないし、話せてもどこか上の空だし……

ひどい時には私を見た瞬間逃げ出したり……

もしかして私……孝宏くんに、き、嫌われた……？

私、孝宏くんは何かしちやつたかな……

この間部屋にあつた孝宏くんのちよつとオシャレなラスクを食べちやつて、孝宏くんをぶんすこさせちやつたけど、まさかまだあれを根に持っていたりするのかな……？

確かにお詫びの品を用意できてないのは私の至らない点ではあるんだけど……

うー……あれだけでそんなに怒る孝宏くんではないはずんだけどなあ……

？「……ちゃん」

でももしかしたらあのラスクはとても大切な人からもらった大事なラスクだったのかもしれない……

？「聞こえてないのかな……？おーい、よーちゃん」

だとしたら大問題かも……でも大切な人って誰だろう？明日奈さん……は別として、うーん……

？「よー！うーちゃん！ん！」

曜「わあっ?!……ち、千歌ちゃんかあ、びつくりしたあ……」

千「びっくりしたあ……じゃないよもう！何回呼んだと思ってるのっ！」

曜「ご、ごめん！ちよつと考え事してて……」

あは、ボケつとしてた……

梨「考え事、ねえ……でも、あんな悲しそうな顔して、一体どんなことを考えてたの？」

曜「えっ……」

悲しそうな顔、してたんだ……

あはは、これじゃ孝宏くんのこと言えないや……

曜「べ、別に大したことじゃないよ。次の制服、どんなものにしようかって……」

千「そんなこと考えててどうして涙を流してるの？」

曜「……！……！……そ、んな……涙、なんて……」

自然と頬を伝う熱い想いの結晶。

孝宏くんに嫌われてるのかもって思うだけで、とめどなく目から溢れてしまう涙。次第に嗚咽混じりに泣き始めてしまった。

しばらくの間、私は千歌ちゃんと梨子ちゃんに抱きしめられながら泣いた。

梨「ねえ……教えて曜ちゃん。曜ちゃんが何にそんなに苦しんで泣いているのか……」

千「曜ちゃんが泣いてると千歌まで悲しくなってくるよ……」

曜「二人とも……」

信頼してる二人だし、話せばもしかしたら解決の糸口が掴めるかも。

曜「実は……」

千「なんかそんな感じだと思っただよね」

梨「さっきの部活の時もぎこちなかったし……まったく2人して不器用さんなんだか

ら……」

あれれ？思ってたより冷静？

もしかして私一人で超深刻に考えてた感じ？

でも……彼女だし……嫌われたくないし……

千「どうする？きつと孝宏くんはサプライズにしたいと思ってるんだろうけど、これ

じゃあ曜ちゃんを混乱させるだけだね？」

梨「これは孝宏くんには申し訳ないけど、曜ちゃんに教えてあげるべきよね」

曜「二人とも、こしよこしよ話してどうしたの……？」

何か知ってるのかな？孝宏くんのこと……

千「あのね曜ちゃん！実は……」

水泳部員「渡辺先輩！少しお時間よろしいでしょうか？今度の大会についてお話があるんですが……」

曜「あー……うん、わかった。すぐ行くよ！……ごめん二人とも、ちよつと時間かかりそうだから今日は先に帰ってて？それじゃ……」

千「あつ、曜ちゃん……」

二人が何を知ってるかはわからないけど、今は水泳部の用事を終わらせなきゃ……

曜「孝宏くん……会いたいよ……」

また熱い想いの結晶が1つ、頬を伝った。

曜 s i d e o f f

千歌 s i d e

梨「教えてあげられなかったね……どうしよう？」

果「ここは様子をみるべきかもね♪」

千「わあっ！か、果南ちゃん！様子を見るってどういうこと？」

果「んー、きつと誕生日になれば曜だつて孝宏がいままでしてたことこの理由に気が付くと思うし、何より！その方が余計に孝宏のことが好きになるでしょ？ちよつと距離があつたのに、一気にまた縮まるわけだし♪」

おー、果南ちゃんがすごく大人っぽいこと言ってる！

これはあれですな、「オトナのレディー」ってやつですな！
ん？でも……

千「果南ちゃん、もしかして好きな人出来た？」

果「ふえ?!／／」

梨「あつ、果南さん赤くなってる！まさかほんとに……」

果「なつ、ないない！絶対にないから！だつて私があんなやつのこと……あ」

千&mp;梨「あんなやつってだれ!？」

これは果南ちゃんにも季節的にも春が来たって感じ??

こんな真つ赤になつてる果南ちゃんなんか今まで見たことないよ！

いつもからかわれてる分、今日からかつてやるんだー！

千「もしかして！この前からずっとダイビングショップに来てる背の高い人？」

果「ちつ、違う違う！あいつじゃない!／／」

梨「お客さんに向かって……あいつ？それほど親しくなってるってことじゃあ……」
 果「うう、マル！二人がいじめてくる〜!!」

あつ、花丸ちゃんに助けを求めている！

だが果南ちゃん、残念だったね。

花丸ちゃんはさつき部活終わりに渡した「のっぽパン」で既にこちらの陣営に引き込んでいるのだ！

花「よしよし、大丈夫ずらよ果南ちゃん。マルが守ってあげるずら！」

千「ええ〜?!花丸ちゃん！約束と違うずらよ?!のっぽパンの契りを忘れたの?!」

花「マルはそんな契りは交わしてないずら〜」

千「や、やられた……」

ヨ「契り……?暗黒界との闇の契りのことかしら……っ!」

ル「そんなわけではない、ずら♪」

ヨ「ツッコむのずら丸じゃなくてルビイかい！」

ダ「まったく……いつまで経ってもこのA q o u r sのメンバーは騒がしいですわね

……ほら!バスの時間が近いですわよ!急いで準備なさい!」

「「「「「は—————い「「「「「」

梨「それで千歌ちゃん、結局あの二人のこと、どうするの?」

千「えー、梨子ちゃんそれ聞く？もう分かっていることじゃないの〜」

梨「ふふっ、それもそうね、果南さんの意地悪な作戦にのっちゃおっか♪」

ゴメンね曜ちゃん、ちよつとだけ小悪魔な千歌が出てきちゃったみたい♪

果南ちゃんの言う通り、少しだけ様子を見させてね♡

千歌 s i d e o f f

渡辺曜生誕祝賀祭2019 後編

曜side

水泳部員「……先輩……なべ先輩……渡辺先輩！」

曜「えつ、な、何?どうしたの?」

水泳部員「今回の選手登録はこのメンバーで平気ですか?」

曜「あー、う、うん、大丈夫だよ!よーし、じゃあみんな大会頑張ろーっ!」

「「おーっ!!!」」

はあ、もう全然集中できてないや……

大会のメンバー登録っていう大事な話し合いなのにボケつとしちやつて……

でも、どうして孝宏くんは私の事避けてるんだろ……?」

やつぱり「オシヤレなラスク事件」が事の発端なのかな?

でも孝宏くんはそんな些細なことですつと怒ったりするタイプじゃないはずなんだ

……

曜「……いつも詠める心が、今だけどうしても詠めないよ……なんでかな……?」

水泳部員「先輩、どうかしたんですか……?」

曜「あつ、ううん、なんでもない!それじゃみんなお疲れ様!」

「「お疲れ様でした!」」

考えてもしようがない事って分かってはいるけど、やっぱり考えちゃう。

今はその事しか頭にな……

……そういうえば、明日って私の誕生日だっけか。

誕生日か……去年は孝宏くんに可愛いワンピースもらったなあ……

一昨年は白のロンTと白黒のオシャレなスニーカーをもらって、その前は確か「No Swim No Life」って書いてあるTシャツもらって大笑いしたっけ?

思い出してみると孝宏くんはいつも私のためにいろんなものをプレゼントしてくれてたなあ……

そんなことを考えているとあつという間に家に着いて、自分の部屋にいた。

ふと思いついて、思い出ボックスを開けてみた。

曜「わあ、懐かしい……」

小さい頃ずっと抱いて寝ていたシロクマのでかぬいぐるみに、おままごとで使っていたおもちやの野菜やナイフ、子供用の船長帽まで出てきた。

曜「あつ、これ……」

小学校3年生の時、孝宏くんから初めてもらったプレゼント。

錨のチャームのついたネックレス。

誕生石のダイヤモンドがあしらわれていて、チャームは淡い水色。

貰った時は嬉しくて嬉しくて、どこに行くにもずっと着けてた記憶がある。

ずっと使いついで、壊れちゃったからここにしまっておいたんだよね。

曜「孝宏くん、どうして……どうして今まで通りに話してくれないの……？」
静かな部屋に私の声が響く。

視界がぼやけて、そのぼやけの正体が床に落ちる。

とめどなく溢れるこの涙はどうやったら止められるんだろう……

拭っても拭っても止まらない涙。

不安、絶望、恐怖……色んなものがこもった涙。

曜「教えて……私に……答えを……」

虚しく響く私の弱々しい言葉は、孝宏くんに届くはずもなく、消えた。

曜 s i d e o f f

N e x t d a y

孝宏 side

孝「とういうわけで、今年はこれにしてみました！どうかな……ありきたりかもしれないけど、今までにない新鮮な感じでしょ？」

千「いや、あの孝宏くんからこんなアイディアが生まれるとは思わなかったよ！キザなオトコになりましたなあ」

孝「いやはや照れますなあ高海さん、褒めても何もでないですよ？」

千「えっ！何も出ないの……？」

そつ、そんなうるうるした目をされたら……

孝「仕方ないなあもう……はい、みかんどーぞ♪」

千「わーい！みかんだー！みっかつんっ！みっかつんっ！」

みかんあげるしかないよね？

「みかん大好きっ娘にはみかんを与えよ」ってことわざもあるぐらいだし！

……異論、反論は認めないからそこらへんよろしくう！

梨「それにしてもよくこのアイディアを思いついたね！もしかして……」

孝「そ、姉貴に協力してもらって、どんなのがいいか話して決めただい！」

梨「さすが私の師匠!!!」

あ、まだやってたんだその関係……

果「それにしてもかなりキザだねえ……曜がこれをどう思うかだね」

千「きつと大丈夫だよ!こんな素敵なプレゼントもらったら曜ちゃんだって嬉しいはずだよ!」

ル「ロマンチックだよね……はあ、きれい……♡」

ダ「ほらみなさん、もうすぐ3限目が始まりますわよ!教室にお戻りなさい」

「「「「「「はーーーーー!」」」」」

よし、あとはこれを曜ちゃんに渡すだけ……

でも、今日は朝から曜ちゃんの姿が見えない。

バスにもいなかったし、LIMEの返信もない。

時刻は午前10時半を少しすぎたところ。

今日の授業は今年度最初の授業が多いからガイドダンスだけ。

それならやることはひとつしかない。

良い子のみんな!あと悪い子のみんなも!

真似しちゃダメだぞ?

ダイヤちゃん、今日だけは見逃してね？

孝「せんせー、悪寒がするんで保健室行きまーす。多分帰りまーす。きつと熱が39.0℃超えてまーす」

千「孝宏くん？……なんかちよつとキャラが違うような……」

梨「なんかワルそうな感じね……それになんだか胡散臭い……」

教師「んあ？おー、それはしゃーないな。早く帰って、おかんの作ったお粥食って、悪寒を治せよ、なんつってえ???ギヤハギヤハギヤハww」

孝「あーい」

梨「先生はこの上なく雑ね……」

よっしや、関門は突破した。

あの先生ほんといい人だわ……

こんど貢ぎ物でも持っていこうかな？

ともかく、あとは部屋に置いてあるプレゼントを持って曜ちゃんの家に行くだけだ！

孝宏 side of f

曜 side

曜「はあ、何してるんだろ、私……」

ママに言い訳して今日は学校をずる休みしちゃった……でも今日はどうしても学校に行く気にはなれなかった。

孝宏くんに会うのが怖い……

また何かして嫌われちゃったら嫌だ……

まともに話をできる自信がない……

曜「どうすればいいの……?」

昨日から幾度となく流れる涙。

乾くことは一晩たつてもなかった。

もういつそのこと……このまま止まらずにこの想いを洗い流してくれたら……

曜ママ「曜、ちよつと入るわよ。あ、寝てていいからね?」

曜「うん……」

何しに来たんだろ……?

病院に連れていかれたりするかも……

体はめっちゃめっちゃ元気だけど、心が弱りに弱ってる……

曜ママ「それじゃ、ごゆつくり、うふふっ♪」

曜「……ごゆつくり？」

私はママの残した言葉が不可解で、思わず起き上がった。

曜「……!!!」

孝「よっ、元気そうだね曜ちゃん。ずる休みするなんて悪い子だなく……まあ、仮病使つて授業抜け出した奴が言えるセリフじゃないとは思うけど……」

曜「な……んで……ここに……」

孝「なんでつて……曜ちゃんのこと心配だったし……」

そんな……でもなんで……

孝「それに！今日は曜ちゃんにとって特別で大事な日だから！」

曜「えっ……」

そういうと孝宏くんは、ずっと背後に隠していたあるものを私にくれた。

曜「これって……9本のバラ？それに赤じゃなくてピンク色……」

孝「あはは……みんなにキザって言われちゃったんだく……」

うん、言われると思う……私もそう思ったし……

でも……

曜「……ありがとう、うれしい……／／／」

孝「ほ、ほんと？よかった〜……あ、このバラの花束なんだけど、特別な意味があるんだ！花束に刺さってるカードを見てもらってもいい？」

曜「カード？あ、これか……」

カードにはこう書かれていた。

9本のバラの花言葉

「いつもあなたを想っています」

「いつも一緒にいてください」

ピンク色のバラの花言葉

「しとやか」「上品」「可愛い人」「美しい少女」

そして

「愛の誓い」

曜「愛の……誓い……」

孝「あはは……柄でも無いことしてるのは分かってるんだけど……」

曜「でも……どうして、どうしてこんなことしてくれるの？孝宏くんは私のこと……」

嫌いじゃ、ないの？」

孝「はえ？俺が曜ちゃんのことを嫌い？なんで？」

曜「だって、話そうと思つたら避けられるし、話せてもどこかの空だったし……」
孝「えつ。あ、あはははは、それはほら！そのく、俺つてば隠し事苦手じゃん？曜ちゃんにも千歌ちゃんにもすぐ心詠まれるし……それで、曜ちゃんと話してボロでも出ちやつたら大変だと思つたから、少し距離を置いてちやつたんだ……ごめんね……」
そつか、私のためを思つて……

確かに隠し事はめちやくちや下手くそだけど……

曜「じゃあ、嫌いになつた、とかじゃない……んだよね？」

孝「あはは、まつたくバカだなあ曜ちゃんは！俺が曜ちゃんを嫌うわけないじゃないのく！そんなことこの世から地球がなくなつてもありえないよ！だって俺……！」
そういうと孝宏くんは顔を赤くして頭をポリポリ掻き始めた。

孝「あー、俺は……曜ちゃんのこと、この世で誰よりも愛しているから」

高鳴る胸。この心臓の音が孝宏くんに聞こえてしまうかもしれないほどに高鳴つていた。

大好きな人に、少し距離が出来ていた人に、「愛している」と言われる幸福感。

曜「……………孝宏くん！」

彼のその「愛している」の一言は私の心のモヤモヤを振り払うのに十分すぎるもの

だった。

私はたまらず孝宏くんを抱きついた。

孝「わわっ、どうしたの曜ちゃん？なんで泣いてるの？」

曜「いいのっ！」

孝「もー、涙で顔くしゃくしゃだよ？」

曜「いいのっ！」

孝「あはは、もー泣き止んでよー」

今はただ、この時間が幸せで、愛しくて、かけがえのないもので……

孝宏くんと一緒にいられるこの時間が何よりも大好きなんだって思えた。

孝「ね、曜ちゃん。ちよつと左手かしてもらえる？あ、あと目を瞑っててもらえるか

な？」

曜「？うん……」

左手を差し出して目を閉じる。

暗闇の世界が広がる中、私の左手を優しく持つてくれる孝宏くんの温かい手。

何か、かばんから取り出してる音がする……

孝「はい、目を開けていいよ」

視界に光が差し込み、孝宏くんの顔を捉える。

孝「確か意味合的にここで合ってるはず……」

曜「えっ、孝宏くんそれ……!」

孝「えへ、これは誰にも言っただけじゃなかったんだ……よつと。安物で申し訳ないけど、一応予行練習みたいな?」

孝宏くんは私の左手薬指に、指輪をはめた。

淡い水色のリングに誕生石のダイヤモンド。

孝「あの時と同じ色……だよな?」

曜「あ……」

覚えててくれたんだ、あのネックレスのこと。

プレゼントをあげた側って時が経つと、あげたものを忘れちゃうって言われてるけど、孝宏くんは覚えててくれた……

孝「薬指にはめる指輪の意味は「愛を深める」なんだよ」

今日の孝宏くんはとことんキザだなあ……

孝「いつか、本物を……」

曜「えっ?」

孝「ああつ、ななな、なんでもない!／／」

曜「顔真っ赤にしちやっつてどうしたの? 何考えてたのかな?」

孝「な、なんも考えてないってば〜！」

曜「怪しいなあ〜、私にぶつちやけちやいなYO！」

孝「なんにも考えてないよ〜！」

曜「あははははっ！」

孝「あはははっ！……よかった、ようやく笑えたね♪」

曜「あっ……」

そっか、孝宏くんはずっと私のことをきにかけてくれてたんだ……

あの時避けられてたのも、上の空で話してたのも、全部私のために……

曜「孝宏くん、ごめんね……ありがとう！」

孝「?うん!どういたしまして!」

私たちは再び抱き合った。

抱擁を解いて、キスをした。

曜「んっ……」

時間にしておよそ5秒くらいだっただろうけど、とても長く感じるキスだった。

曜「ねえ……もう1回、しよ……?」

孝「……うん」

そう言うなり、私たちの唇は再び重なり合った。

すると孝宏くんは少し口を広げ、舌を私の口の中に滑り込ませた。

曜「!!」

世間一般で言う「ディープキス」というやつだ。

突然のことにびびくりしたけど、私はそれを受け入れた。

お互いの舌が絡み合い、唾液が混ざってひとつになつていく感覚。

とてもじゃないけど正気を保っていられそうになかった。

孝宏くんも限界なのか、10秒程すると唇が離れていった。

離れていく舌から唾液が糸を引き、切れる。

私たちは荒くなつた呼吸を整えるかのように、見つめ合い、微笑み合った。

曜「忘れられない誕生日になつたよ……／＼／＼」

孝「そっか……それならよかった……／＼／＼」

再び抱擁を交わし、眠るように倒れ込んだ。

違うな……押し倒された。

孝「ならもつと、忘れられない誕生日にしない……?」

ああ、きつと私はここで大人への第一歩を踏み出すのかもしれない……

曜「うん、してほしい……／＼／」

抗えない。この欲望には抗えない……

曜「つてそつちじゃないんかい！」

孝「えつ、そつちつて何？」

孝宏くんが忘れられない誕生日にするためにしたことは、なんと、ケーキ作り。

確かになんかイベントがないと作らない食べ物かもしれないけど、あの雰囲気で、あの状況で、忘れられない誕生日にすることと言ったら、そういうことじゃないんかい！

まあでも、私たちらしいかな……♪

曜「あははつ！孝宏くんつてば、ほつぺにホイップクリーム付いてる。つまみ食いしたな？」

孝「はつ、いかん！バレた！」

曜「まったくも……」

——ペロツ——

孝「なつ……！／／／」

曜「いひひひつ、顔真つ赤♪」
孝「まったくずるいんだから……」

私たちらしき、これからも大事にしなきゃだね！

ありがとう、孝宏くん！

だーーーーーいすきっ!!!

曜side of

To be continued…

And HAPPY BIRTHDAY!
YOU WATANABE!!

I, m waiting on the coast street.

孝宏 side

孝「んー……来ない……」

波の音を聞きながら独りごちる。

あんな次々と押し寄せる波のように、待ち人もやって来ないものか……
そういえば今年の初めに引いたおみくじには、

「待人 来ず」

って書いてあつたっけ……

神の宣告ならもうどうしようもないか……

つて、ダメダメ！変に弱気になつたらそこで試合終了だ！

きつと来る、そう信じるしかない。

でも来るのは目の前を走り去る車だけ……

颯爽と走っていく真つ赤なポルシェ……

……緑の丘じゃないのか？

いかんいかん、変な思考に陥った……

とにかく、あの子 came たらちちゃんと伝えなきやいけない。あの時言えなかった、「いめんね」を。

——2日前——

曜「ええっ?! 孝宏くんハンバーグにチーズ入ってるの反対派なの?!」

孝「えっ、あー、まあ反対ではないけど、好んで食べるわけじゃないかな〜って」

曜「信っじられない……世の中にそんな奇異な人がいるなんて……」

孝「そんなにかな?」

この話のきっかけは、曜ちゃんのある一言。

ハンバーグにはチーズが入ってなきやだめだよ

いやいやいや……

お肉の味を堪能するためにはやっぱりチーズなんてお子ちゃまなもの（全世界のチーズ好きの皆さんに謝れ）が入っていちやいけないんだよ。

考えてもみてよ！

国産黒毛和牛A5ランクのお肉だけを使用した超豪華、究極にして頂点のハンバーグにチーズなんてINする?!

しないでしょ!!そんなんもつたいないわ!!

普通のハンバーグなら別に時々入ってる程度ならいいけど……

……そう心の中で思っていたと思っていた時代が私にもありました。

えー、ダダ漏れでした。

それを聞いた曜ちゃんから、なんとも蔑まれるような視線を頂きました。ありがとうごじます。

……いや、DMじゃないんだけどね?

曜「ハンバーグにチーズが入っている時のあの幸福感といたら……もう、言葉にできないぐらいの嬉しさがあるでしょ!お母さんが「船長グランプリ 優勝おめでとう、曜ちゃん!今日はお祝いだから、曜ちゃんの大好きなハンバーグよ!し・か・も!チーズ入りよ♪」なんて言われたら、最っ高に嬉しいじゃん!」

船長グランプリ……？

孝「うー……あんまり？」

曜「が……」

その日の帰り道、曜ちゃんはいつもよりなんだか機嫌が悪かった。

んー、なんだかくだらなことで気まずい雰囲気になっちゃった……

途中でちよつと強い口調で曜ちゃんに食ってかかっちゃったしなあ……

それに呼応するように、曜ちゃんもぶんすこしておこだったし……

でも、俺と曜ちゃんの仲だし、きっと俺の想いも分かってくれてるはず。

だって、今までもそうだったから。

俺は今、曜ちゃんに謝りたいんだってこと。

孝
s i d e o f f

曜
s i d e

曜「はあ……憂鬱……」

明日が「テストだ」とか、「放課後補講だ」とか、そういう時はいつも憂鬱なんだけど……

学校に行くことが憂鬱なのは、初めてかもしれない……

曜「いつもみたいに、普通にありのままの笑顔を見せられるかな……？」

自信が無い……

今の私の心は航海に出発できません……

はあ……なんであんなことでプンスコしちゃったんだろう……

”ハンバーグにチーズをINするかしらないか問題”

——ようない曜内法廷 開廷——

曜「ハンバーグにチーズをINしないなんてありえないって！INしない孝宏はまともな教育受けてないってもんよ！ヨーソロー！」

そうそう！そうであります！

チーズをINしないなんてありえないであります！

光曜「そんなことないです。孝宏さんの言う通り、お肉そのものの味を愉しむという点においてはやはり一理あります。ヨーソロー。」

うーむ、確かに……

お肉本来の味を損なってしまうのならチーズは邪魔になっちゃうのかな……？

闇曜「でも普通のハンバーグにチーズをINするのはいいんだよな？つてことは実際孝宏もINする派の人間なんじゃねーの？ヨソロー！」

確かに！あれだけ言っておいて結局INする派なんじゃん！

光曜「ですが孝宏さんは”時々入ってる程度なら良い”と仰っていました。孝宏さんがチーズIN派の人と断言するにはまだ早いです。ヨソロー。」

あー、言つてたねえ……

つてことはやっぱり孝宏くんはINしない派なのかな……？

闇曜「つて、あんた自身はどうなのYO！チーズINしない孝宏のことを許すのかい？ヨソロー！」

光曜「結局最後の判断はあなたにかかっているんです、裁判長。ヨソロー。」

えっ、わわわ私?!

うー………

—— 闇内法廷 閉廷 ——

曜「許す、許さない、の問題じゃないよ……私は、謝りたい。あんなことで孝宏くんに激おこぶんぶん丸しちやったこと……」

でも……勇氣が出ない……

翌日。

少し寝不足気味な私は、いつもより少し遅いバスに乗って学校に着いた。やっぱりまだ顔を合わせづらいから、違うバスに乗ってきた。

謝りたい……でも勇氣が出ない……

小さいさかいでお互いに謝ることはこれまでに何回もあつた。

けど、今回はなんとなくいつもと違うから、お互い謝りづらくなっちゃってる。

教室に着くと、孝宏くんはもう席について、仲良しの男子たちと話していた。

私も席につくなり、千歌ちゃんと梨子ちゃんがやってきて、ちよつとした質問攻めにあつた。

「なんで遅かつたのー?」とか、「なんだか疲れてる?」とか

……「孝宏くんと何かあつた?」とか。

その質問をされた時に、少しだけ体がピクリと反応した。人間の反射つてものはつくづく恐ろしいなあ……

その場はなんとか取り繕ったけど、2人にはなんとなく怪しまれてる……気がする……

孝宏くん、今どんなこと思ってるんだろう……？

はあーあ、今からなるとなーく偶然を装って、孝宏くんの近くをフラつとして様子を伺ってみようかな？

でも、なんかそんなのさっぱりしないし、そんなことを考えるだけで気持ちが落ち込む。

”きゅつ”って胸が締め付けられる。

あー！もう！やだやだ!!なんなのもう……

はあ……私たちもしかしてこのまま……

別れちゃったりするのかな……？

曜 s i d e o f f

孝宏 s i d e

孝「はあ……結局話せなかつたな……この強情ツ張り孝宏め……」曜ちゃんが話しかけてこないからこつちも話しかけないでやるんだ！なんて馬鹿なこと考えおつてからに……」

なんて自分への苛立ちを呟きながらついた帰路。

バスに乗らずに歩いて帰ろうと思ひ、海岸沿いのこの道をとぼとぼ一人歩く。

部活がなかつたのがよかつたのか、悪かつたのか……

結局曜ちゃんとは顔も合わせられなかつた。

孝「おお……綺麗な夕日……なんて言うんだらう……空も海も風も、みんなオレンジだなあ……」

なんだかこの綺麗なオレンジ色をした海や風が、意地つ張りな俺の心を照らして、元気をくれてるみたい。

「早く仲直りしなさい」

つて言われてるみたいだ。

よし、じゃあいつちよやつたりますか。

決めるぜ覚悟、振り絞れ勇氣、起こすぜ勇氣！

変な掛け声を心の中で唱え、俺は歩くスピードを徐々に速めていった。

千「なるほど……それはまたなんともおバカな喧嘩ですなあ……」

孝「くつ……何も言い返せない自分がツライ……」

ル「でも2人ともとつても仲良しさんだから、そういうことで喧嘩になっちゃったのかも……?」

孝「そう言ってくれると嬉しいよ、ルビイちゃん♪」

ル「うゆ!」

結局仲直りするには謝るしかないんだけど、なんとなく顔を合わせづらいから、どうすればいいのか相談するために、千歌ちゃんの家に来た。

CYaron!の集まりだったらしく、ルビイちゃんもいた。

幸い曜ちゃんはまだ来てなかったみたいで、今はこの3人。

千「とりあえず曜ちゃんにお手紙とか出してみたら? お家近いんだから、ポストに入れてくるぐらい昼飯前でしょ?」

孝「手紙かあ……確かにいいかもしれない……」

ル「ち、千歌ちゃん……それを言うなら”朝飯前”だよ……?」

千「えっ! あ、あはははは……// //」

後輩に言葉の間違いを指摘される先輩……

千歌ちゃん大丈夫なんだろうか……？

孝「でも手紙になんて書けばいいだろう？ 無難に「ごめんね」って書くのかね？」

まあ当然だろうけど、謝罪の文言は入れるべきだよな？

千「ふふふーっ、あえて「ごめんね」は入れないっていうのはどう？」

孝「えっ？ な、なんで？」

千「お手紙出しちゃえば、出す前に比べてなんとなく気持ちが悪くなるでしょ？ だから、「どこどこで何時に曜ちゃんとお話したい」って書いてみようよ！」

なるほど……

謝るための待ち合わせが出来るわけか……

孝「それいいかも！ 手紙で言うより、ちゃんと会って謝れば誠意も伝わるだろうし！」

ル「ルビイもそれ賛成です！ それに加えて、曜ちゃんへの愛も一緒に伝えたらどうですか？」

孝「うんうん、確かにそうだな……って、ん？ な、なんでそれ伝えるの?!」

流れで領いちゃったけど、黒澤家の次女さんが大変なことを口走りましたよ!!

千「それいい！ 千歌も賛成だよ！」

ル「だよねっ！ だって今回のことで、2人の間に少し溝ができちゃったと思うのっ！」

千「そこで大切になってくるのが、”愛”っていうフアクターなんだよ！」

孝「千歌ちゃんの中から”フアクター”ってものが聞けるとは……」

千「む！孝宏くんは千歌のことバカにしすぎだぞっ！千歌だつてそれぐらいわかるのだ！」

ル「昼飯前……」

千「わーわーわー!!千歌なんにも聞こえない!!」

まったくもつていじりがいのある幼なじみだなあ……

ルビイちゃんも素晴らしいいじりだった……

孝「でも、そうだね。距離ができたのは確かだから、この際一緒に”愛”も伝えておかなきゃだね」

千「うん！そうすればいいと思うよ！」

ル「きつとその想いは伝わるよ！がんばルビイ！」

孝「あははつ、よしや！ありがと千歌ちゃん！ルビイちゃん！そんな手紙書いて、曜ちゃん家のポストにインしてくる！」

千「がんばってね♪」

ル「フアイトです！」

千歌ちゃんの家を後にし、俺は家まで走っていった。

孝宏 side of f

ルビイ side

千「がんばってね〜♪」

ル「フアイトです！」

千「……………ふう、びっくりしたなあもう……………まったく二人揃って仲良しさんだね？」
そういつて千歌ちゃんは掛け布団をひっぺがす。

中から現れたのは、布団の中に籠った暑さなのか、孝宏さんの言葉を聞いて恥ずかしくなったのか、ちよつとだけ頬を紅潮させた曜ちゃん。

千「孝宏くんはああ言つてたよ？曜ちゃんはどうするの？」

曜「まだ……………決められない……………勇気が出ないんだ……………怖いんだよ……………」
ル「曜ちゃん……………」

千「はあ……………すう……………しつかりしろ渡辺曜!!」

ル「ピギツ?!」

曜「っ?!ち、千歌ちゃん?!大声出すとお客さんの迷惑につて美渡さんが……………」

千「言っちゃ悪いけど本当にくだらないよっ！はつきり言つてどっちでもいいわ！どっちも美味しいわ！曜ちゃんやんがチーズINのハンバーグが好きなのは知ってるし、孝宏くんが別にチーズが入ってるか否かに興味無いのも知ってる！千歌が言うのはあれだけど、そんなことで言い争つて険悪ムードになつて、2人とも筋金入りのおバカだよ!!!」

曜「ちか、ちゃん……」

千「私、曜ちゃんのこと大好きだよ。それに、孝宏くんのことだつて大好き。だから……そんな大好きな2人が……嫌な空気になつてるのは……私……耐えられない……」
 そう言つた千歌ちゃんの目から大粒の涙が、ポロリポロリ次々と零れていく。

曜ちゃんを想う気持ち。孝宏さんを想う気持ち。

大切な幼なじみ2人を想うからこそ、素直な感情がそのまま溢れている。

ああ、素敵だなあ……ルビィもこんな優しく可愛くてカッコイイ幼なじみがほしかったなあ……

高望みしすぎですわ！つてお姉ちゃんに言われちゃいそう……♪

曜「千歌ちゃん……ありがとう。私も千歌ちゃんのこと大好き。それに……孝宏くんのこと大好き……だから……仲直り、したいっ……!」

千「っ！曜ちゃん……!」

曜「私、孝宏くんに謝りたい！早く孝宏くんに会いたい！」

千「曜ちゃん!!」

曜「千歌ちゃんのおかげで勇気が出たよ、ありがとう♪」

千「えっへへ、どういたしまして♪」

うーゆ？これルビイ必要だったかなあ？

出る幕もなく解決しちゃいそうな雰囲気……

ルビイ置いてきぼりです！ルビイもお話に混ぜて〜っ！

っていうか、曜ちゃんと孝宏さんの喧嘩の原因って、「ハンバーグにチーズをINするか否か」なんだよね？

その仲直りまでこんな長い道のりなの？

幼なじみって難しいんだあねえ……

なんだかおばあちゃんみたいになっちゃった……うゆ……

ル「……？ねえ2人とも、なにか聞こえない？」

曜「えっ？……この音……足音？」

千「う、なんだか嫌な予感がする……」

あつ、きつとその千歌ちゃんの予感は大当たりな気がする！

——ガラリラっ！——

美「バカ千歌ア!!! デカい声出すなって言われてんだらうが!!!」

千「ひええ……美渡ねえも声大きい……」

曜 & amp; ル「ぶっ、あはははははははははは!!!」

えへ、千歌ちゃんは可哀想だったけど、曜ちゃんが笑顔になってよかった!

ルビイ side off

孝宏 side

——現在——

孝「あつ、さつき見たポルシェだ……なんで戻ってきたんだろ……忘れ物かな?」
そろそろ立って待っているのも疲れたので、道の脇にあるコンクリの上に座った。
未だ曜ちゃんは来ない……

あの日、手紙にはこう書いた。

——あの海岸通りで待つてるよ

——どうしても伝えたいんだ、曜ちゃんに

——何より曜ちゃんに会いたいよ

想いは伝わってくれたかな？

まだ待つてるよ、早く来てね……

「海岸通りは友情のシーサイド」ってオシヤレな言葉を誰かが使ってたっけ？

なかなか思いつかない言葉だよね、考えた人すごいや！

だからそんな「友情のシーサイド」に今日、曜ちゃんに来てほしいんだ。

来るかな？来ないかな？

来ない？いや、来て……！

？「お、おっす……」

孝「……！よ、曜ちゃん……」

曜「……来たよっ……」

孝「う、うん……」

ううっ、気まずい……

でもきつとそれは曜ちゃんも一緒。

なら勇気を振り絞らなきゃいけないのは……わかるね？

「あのっ!!」

きつとまたやり直せる。

2人の歯車はまた噛み合い、動き始めた。

孝宏
s
i
d
e
o
f
f

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
……

白百合の恋愛抒情歌

孝宏 side

梨「3人とも、そろそろAqoursとしてもラブソングなるものを作ってみたいんだけどどうかな？」

おう、唐突だね梨子ちゃん。

どれくらい唐突かっていうと、玄関開けたら砂糖のご飯ぐらい唐突。

佐藤じゃない、砂糖。

千「おお、ラブソング！いいねえ！スノハレみたいなやつ歌いたーい！」

スノハレっていうのは、かの有名なスクールアイドル”μ’s”の2nd sing
le「Snow halation」の略称。

切ない恋を描いた歌詞と、冬場に撮影されたPVが相まって、リリースされて以来、未だにその人気を不動のものとする。

曜「でも……なんでまた急に？」

梨「ふふっ、歌詞の参考になりそうな子がここにいるから、よ♡」

孝「それって……」

曜「まさか……」

何かを察した俺と曜ちゃんは目を合わせ、頷き、一目散に駆け出した。

千「あつ、逃げた!!!」

こんな静謐せいひつかんび甘美な秋の夕暮れ時に帰り道で全力ダッシュするなんて思ってもみな

かった……

なんて考えてる暇もない！ちやつちやつと逃げてラブソングなんて諦めてもらおうぜ

!!!

孝「わぶつ?!」

?「きやつ!」

曲がり角から急に現れた何かに激突して、そのまま倒れ込んでしまった。

なんかやけに柔らかい緩衝材のようなものに包まれた気がしたんだけど……

……現在進行形で緩衝材に包まれてないか?

痛みを堪えて恐る恐る目を開くと、眼前に広がりしは布。それも白い布で、近くに灰

色の布と緑の布も見える。

曜「ちよつ、孝宏くんだいじょうぶ……」

なんか曜ちゃんの声が途中で止まったんだけど、なんかあつたんか?

そこで、状況を確認しようと思つて起き上がつてみた。

起き上がつてまず最初に見えたのは、我らが幼なじみの姐さんこと松浦果南さん（18）

振り返るとそこには、顔を真っ赤にした僕のかわいい彼女こと渡辺曜さん（17）
改めて前を見ると、ゆらりと立ち上がる果南先輩。

後ろを見ると俯いてゆっくりとこちらに近づいてくる曜先輩。

あつ、これなんだかよくわかんないけど、現世にサヨナラを告げる時が来たみたいだわ。

お父さんお母さん、さようなら——

曜& a m p ; 果「このドスケベ大明神がああああ!!!」

孝「ホゲー——ツツ!!!」

無事に意識が飛びました。ありがとうございました。

果「まったく……ちゃんと前見て、走らず歩いてよね……」

孝「……反省してマース……」

あのあと意識がぶつ飛んだ俺を千歌ちゃんの家まで運んでもらって、ただいま絶賛療養中兼説教中です。

果南ちゃんに怒られた理由としては、左右確認せずダツシユして十字路を突っ切ろうとしたことと、果南ちゃん緩のスイカ断2玉材に顔を突っ込んだじやったこと。

あの柔らかい物体は果南ちゃんの——

いかん、考えるのはやめておこう。

曜「あーあ、結局梨子ちゃんには捕まっちゃうし、孝宏くんはドスケベ大明神だし……

踏んだり蹴ったりだよ……」

孝「あはは……申し訳ない」

梨「それより、あそこでぶつかってくれたのが果南さんでよかった♪」

千「ふえ？なんで？」

梨「だって——」

嫌な予感がした。

それと同時にこれはチャンスだと思った。

孝「果南ちゃん！悪いことは言わないから、曜ちゃんと俺と一緒に逃げよう!!」

果「えっ、なんで？」

曜「早くしないと2人に——」

千「ふっふっふー、もう遅いのだ！」

孝「あっ」

退路を塞ぐ千歌ちゃん。

その千歌ちゃんの手には……

曜「あーっ！それ今作ってる途中の衣装!!」

果「あーっ！それ私が大事にしてるカメ助!!」

右手には、この間作り始めたっていう曜ちゃんの新作衣装。今回のミニスカ婦警さんらしい。

左手には、果南ちゃんが小さい頃から飼ってるカメのカメ助。今年で生誕10年目になるらしい。

千「返して欲しければこちらの条件を飲むのだ！」

曜「くう……そんなあ……」

果「千歌がそんな卑怯な手を使ってくるとは……」

2人ともこれは条件を飲むしか道はないね……

孝「ま！俺にとつてなんの不利益も生じないから、これで俺はドロシよかな」

あとは2人に頑張ってもらって。

俺は家でゆっくりと漫画を読みながら、みかんジュースでも飲むかしら？

梨「そういえば孝宏くん。この間明日奈さんに聞いたんだけど、孝宏くんって小学校5年生まで明日奈さんと一緒にお風呂に——」

孝「桜内さん?!?!/ /」

あのバカ姉貴!!何をペラペラと梨子ちゃんに話してくれちゃってるのさ!!!
クソ!!そんな弱み握られてるんじゃない……

梨「ふふつ、手伝ってくれるよね？」

孝「はい、よろこんで……」

千「やったね梨子ちゃん！これでスノハレみたいな曲が作れるんだあ……！」

ああ、桜内さん……あなたにはきつとそつちの^サ気が^ドあるんでしょね……

……敵に回さんようにしよ、うん。

梨「……まだなの？」

孝「あー、いや、その、なんていうか……/ /」

曜「心の準備というか、なんていうか……/ /」

果「唐突すぎちゃって、なんていうか……/ /」

千「きれいにおんなじ文字数にするのやめない？」

あのあとダイヤちゃんや鞠莉ちゃん、花丸ちゃん、善子ちゃん、ルビィちゃんたちに、次のA q o u r s の新曲についてこちらの意見を言ったところ、満場一致、ラブソングになることが決定したため、ただいま歌詞を製作中です。

いやはや、ダイルビ姉妹の決断力の速さが尋常じゃなかったね。

”スノハレ” って単語を出した瞬間にOK出すんだもん。お兄さんびつくりしちゃった……

千「イメージくらい出してくれないと何も始まらないよ？」

孝「そうは言ってもですよ高海さん、自分たちの経験を歌詞にするっていうのはものすごく恥ずかしいことなんですよ！」

梨「は、恥ずかしがるようなことシたの?!」

あか「……桜内さんの妄想の暴走がとまらな……い!!!」

曜「り、梨子ちゃんのおバカ!!! そんなわけないでしょ!!! / / /」

果「その必死さが返って怪しいんだけど……」

まあね?! してないっていったら嘘かもしれないけど、シてはいないから?!

その……2人ともチキンハートだから、頑張ってもちゅっちゅする程度なんだよ……

／／／

曜「た、孝宏くんも何か反論してよう……／＼／＼」

孝「シてはいない！そこは間違いない！！／＼／＼」

梨「シてはいないのなら、何ならしたの？」

フアー……！！

ダメだ、梨子ちゃんがただの U n s t o p p a b l e 暴走列車 T r a i n と化してしまった

……

ほらそこの純情千歌つちが顔を真っ赤っかにしてるよ！

悪影響しか及ぼさないなこの人!!!

曜「梨子ちゃんのバカ！エツチ!!!／＼／＼」

ああ、曜ちゃんも顔真っ赤っか……かわいいかよ……

こんな曜ちゃんが拝めるなら梨子ちゃんがヘンなこと言うのもあり……

梨「恥じらう子を見るのはやっぱりいいわね……妄想しがある……♪」

前言撤回、やっぱこの人だめだ……

話が大きく脱線したから、一旦梨子ちゃんには出て行ってもらった。

部屋の空気が落ち着いたところで帰ってきてもらったんだけど、なぜか梨子ちゃんはものすごく清々しい、何か心の中の余計なものを削ぎ落としたかのような表情で戻ってきた。

怖いから何があつたのかって誰も聞けなかったよ……

千「それで具体的に曲のイメージなんだけど、梨子ちゃんは以前からラブソングを作つてみたい気持ちがあつたみたいで、メロディーに関してほぼ出来てるみたい！そうだよ、梨子ちゃん？」

梨「ええ！大方イメージはまとまつて、あとは歌詞を付けるぐらいかな！曲調は失恋とか告白する前とか言う感じよりも、現在進行形でお付き合いしている2人をイメージしたのになつてるの♪」

ほほう、それで俺と曜ちゃん、果南ちゃんに目をつけたってわけか。

薫くんも呼ぶべきかな？

曜「それで、私たちは千歌ちゃんの作詞に助言をすればいいってこと？」

果「それなら私にもできそうだね！昔は歌詞も書いてたし、少しくらいなら千歌の力になれそうかも♪」

千「ぶぶぶ……果南ちゃん、見かけによらず面白いギャグを言うねえ！」千歌のちから
「なんて……ぶぶぶぶ！」

この子はまったくもう……

すーぐオヤジギャグに反応するんだから……

果「いや、まったく面白くないんだけど……」

梨「あはは……それでね！今回の作詞は千歌ちゃんじゃなくて……孝宏くんをお願いしたいと思ってるの！」

……え。

………えっ？

俺が……作詞……??

孝「むっ、無理無理無理無理！俺なんかが作詞なんて出来ないよ！」

できるわけが無い。やったこともないし、自信なんてサラサラない！

孝「大体、なんで俺?! 曜ちゃんとか、それこそ果南ちゃんの方が適任なんじゃないの?!」

梨「それはほら、曜ちゃんは衣装作りがあるし、果南さんはダンスフォーメーションを鞠莉さんと一緒に作ってるし、千歌ちゃんは日頃の慰労を、ね♪」

そっか、みんなA q o u r sのこと考えて行動してるんだよね。

俺は「マネージャー」っていう立場に甘んじて、みんなの練習のサポートしかいまま
で出来てなかった。

しかもそのサポートも、練習の合間の休憩時間にみんなにドリンクとタオルを配ったり、ダンスレッスンの時にカウントしたり、あとは多少の雑務程度。

なら、俺はもつとA q o u r s に貢献しないと、みんなと一緒にいられる資格なんてないのかもしれない。

孝「……わかった。出来るかどうか不安だけど、やれるだけやってみる」

千「ほんと?!」

孝「うん、よく考えてみたら、俺はA q o u r s への貢献度があまり芳しくないから……ここらでいっちゃよ、みんなに貢献できることを始めたいなって!」

梨「ふふっ、ありがとう孝宏くん♪」

曜「いい歌詞ができるのを楽しみにしてるであります!」

果「孝宏の味を存分に出した歌詞を期待してるよ♪」

孝「うん、みんなありがとう! 頑張っいい歌詞作るよ!」

不安材料は山積みかもしれないけど、やれるだけ頑張ってみるとしますか!

孝「とは言ったものの……」

曜「いきなり……？」

舞台は移ってマイハウス。

お手伝いということで曜ちゃんに来てもらったんだけど、やっぱりセンスがないのかいい歌詞が浮かんでこない……

果南ちゃんにも助けを求めただけど、

果『ここは付き合って日が長い2人に任せるよ。私たちはまだまだ付き合いたてのひよつこだからさ♪』

とか言っただけで逃げられた。

まったく、逃げ足も速いだなんて……

けどまあ、頑張るって宣言しちゃったし、やるしかないよなあ……

孝「いつも千歌ちゃんが言うてる”輝き”ってのは今回のラブソングには当てはまらないってのは何となくわかるんだけど……」

曜「そこから先に進めない、かあ……」

孝「ラブソング、ねえ……」

そう言っただけで、俺は何となく曜ちゃんの肩に頭を預けてみた。

曜「！……もう、びっくりしたよ♪」

孝「はは、ごめん♪」

曜ちゃんも嫌がる様子はなく、何となくいい雰囲気。

特別甘い雰囲気じゃなくて、なんかこう……いい雰囲気。

あー!! こういうのを歌詞として表現できればいいんだけど……なんて表現すべきか分からない……

曜「でも……孝宏くんの方から甘えてくるのって、何気に初めてな気がする。いつもと違って新鮮で、なんかいいかも♪」

いつもと違って新鮮……

長い付き合いの中にも、経験のないことがまだまだたくさんあるってことだよね……ソフアーに2人並んで座るっていうのはいつも通り。その中で、俺から曜ちゃんに甘えに行くっていうのは初体験。

でもそれは何ら特別な事じゃない。

もしかしたら、俺と曜ちゃんの2人の日常の中に、たくさんのヒントが埋もれているのかもしれない!

ようし、そうなれば……

孝「ねえ曜ちゃん」

曜「んー? なあに?」

孝「キスして」

いつもと違うっていうのはこんなに緊張するものなのか……

曜「じゃあ……目、瞑って……／＼／＼」

孝「う、うん……／＼／＼」

瞼を閉じると広がる暗黒の世界。

静寂に包まれたこの空間に響く心臓の音。

左の頬に触れた曜ちゃんの手は、小さくて、あつたかくて、震えていた。

瞬間、唇が重なった。

2, 3秒ぐらいだっただろうか。

それでもその時間が永遠に続くかのように長く感じられた。

唇同士の一時の逢瀬が終わったところで、目を開けると、部屋の窓から入り込む夕日に照らされて、艶めかしい表情になっていた曜ちゃんがそこにはいた。

照れて顔が紅くなっているのか、夕日がそうさせているのか定かではないけれど、前者であつてほしいと、静かに願った。

曜「ど、どうだった……?／＼／＼」

孝「どうしようもなくよかった……／＼／＼」

曜「そ、そっか……じゃあ歌詞のヒントになつたかな?」

孝「ばっちり!この調子でやっていこう」

曜「えっ、まだなにかやるの——?!?!
／／／」

このあとめちやくちや未体験HORIZONした。

R—18なことはしなかったけど、2人で今までにしたことのないことをたくさんした。

主に途中からノリノリになっていった曜ちゃん主体で。

まあこの経験があつてこそ、作詞も上手くいった……のかどうかはいささか不明だけど、何はともあれ出来上がったからよしとしよう、うん！

梨「……………」

孝「あ……あのう……梨子さん？」

梨「……うん、いいと思う♪」

孝「ほんと?!?!」

梨「特別上手って訳じゃないけど、なんて言うのかな……孝宏くんの曜ちゃんへの想いが伝わってくる、そんな歌詞ね♪」

な、なんか褒められてるのかな？

ちよつと……かなり嬉しい!!

曜「やったね孝宏くん！頑張った甲斐があつたじゃん！」

孝「うん！ありがとう曜ちゃん！」

千「ほお〜！千歌にも見せて見せて〜！」

ル「ルビイも気になる！」

ダ「私も！す、スノハレ……！」

鞠「スノハレじゃあないけどねえ……」

果「ま、鞠莉がツツコミを……?!これは雪でも降るか……」

鞠「ちよつ、果南！どくゆく意味イ〜?!」

花「マルも作詞のお手伝いしてみたかつたぞら」

善「ずら丸の場合”月が綺麗ですね”しか出てこなさそうね……」

花「失礼ぞら！マルだつて”あいらぶゆう”の一つや二つくらい言えるぞら！」

善「なんでそんなカタコトなのよ……」

曜ちゃんと2人、いい雰囲気度過ごすのは間違いないものだけど、こうしてみんなとワイワイ騒いで過ごすのも悪くない、ね♪

梨「孝宏くん、作詞……楽しかつた？」

孝「うん、最初から壁にぶち当たって大変だったけど、曜ちゃんに協力してもらって、少しずつフレーズが思い浮かんできて、出来上がった時の達成感っていうのは、今までに味わったことの無いような快感だった!」

梨「ふふつ、そっかそっか!……それで、曜ちゃんにどんな風に協力してもらったのかな?」

孝「え」

梨「精神的に?身体的に?ど・ん・な協力をしてもらったの??」

孝「ちよ、あの、梨子さん……?」

なんか見覚えあるぞこの梨子ちゃん……

背中に冷えピタシート貼られた気分……ゾゾゾって……

梨「言えないのなら仕方がない……みんなに孝宏くんが小学校5年生まで明日奈さんと一緒に風呂呂に入ってたことを——」

孝「や、あの、言います、はい……」

梨「ふふつ、素直でいい子ね♡」

ああ、神さま……僕はなんて弱い存在なのでしょう……

梨子ちゃんには逆らえないことがよくわかりました……

孝宏 s i d e o f f

僕はキミへの愛を歌う / A q u o r s

作詞：秋月孝宏 作曲：桜内梨子

桜が舞い散る遊歩道 キミと手を繋ぎ歩いた春

青空に煌めく太陽 キミと砂浜を駆けた夏

特別な事じゃない 当たり前にある日常

そう教えてくれたのは 他でもないキミだった

僕はキミをまだ何も知らない

あの日の笑顔も あの日の涙も

キミも僕をまだ何も知らない

あの日の勇気も あの日の痛みも

何もかもを知りたくて僕は

また明日も逢いに行くのだろう

鮮やかに色付いた木々 キミと夕焼けを眺めた秋

家の庭に降りしきる雪　キミと雪だるまを作った冬

特別な事じゃない　でもかけがえないもの

そう感じていたのは　僕だけじゃなかった

僕はキミをまだ何も知らない

あの日のキスも　あの日の震えも

キミも僕をまだ何も知らない

あの日の想いも　あの日の視線も

何もかもを知りたくて僕は

またキミのことを想うのだろう

唇が触れ合い　想いが伝わり

二人の愛は育まれる

世界は色めき立ち　キミは踊りだす

二人微笑みあつたかけがえないあの日々

僕はキミをまだ何も知らない

あの日の笑顔も　あの日の涙も

キミも僕をまだ何も知らない

あの日の勇気も　あの日の痛みも

何もかもを知りたくて僕ら

またキミと手を繋ぎ歩きだす

T o b e c o n t i n u e d

渡辺曜生誕祝賀祭2020

曜side

曜「けほっ、けほっ……」

まぶたが重い、頭が痛い、全身の倦怠感がすごい……

電子音が私の腋から鳴る。

いつからそこにいられたのか忘れてしまうほどに、少しの間、ボー……つとしいた。

腋に挟んでいたそれを取り出し、文字を確認する。

38.5℃

現在の私の体温。

平熱は高い方だけど、これを平熱といったら多分相当頭がいかれてる。

風邪だ。

ああ、完全にやらかした……

なんとたってまた自分の誕生日に風邪をひくかな……

もつと別日にしてくれてもいいのに……

どつかの墮天使さんから不幸体質が伝染ったかな？

パパは例のごとく船の上だし、ママも仕事。

兄弟姉妹なんていない一人っ子の私は、両親がいない今、この家に風邪をひいているにも関わらず、たった1人でお留守番をしているのです。

風邪をひいた私が悪いから自業自得ではあるものの……

ママだって仕事があるんだし、「私のために休んで、ママ！」なんて子供みたいなこと言えるわけないし言いたくないし。

おでこの冷却シートがひんやり心地いい。

けどこれ、役目を終えたあとの処理がすごく嫌い。

ずう〜とひんやりのしつとりでおでこに居てくれたはずなのに、気がつけばガツピガピのカラツカラに乾いちやうじやん？

あれがとんでもなく嫌いなんだよねえ……

つけてる間は大好きなんだけど。

ふと今の時刻を確認すると、もうすぐ12時になるところ。

平日で学校は普通にあるんだけど、A q o u r sの誰かが来てくれたら嬉しいなあ

……

欲を言えば、孝宏くんとか……

曜「いやいや、来るわけないから……げほっ、げほっ！」

いけないいけない、独り言は脳内で完結させないと。

それにしても暇だ。

身体を動かすのが生きがいな私だけに、ベッドで布団にくるまってじーつとしてるのは得意じゃない。

ずつと身体を動かしてないとおかしくなっちゃう。

あたしやマグロか。

あーあ、一曲踊ったら風邪治らないかなあ？

激しいやつやったら結構風邪とか吹っ飛びそうだけど。

例えばなんだろ……スリリング・ワンウェイとか？

あれやったら絶対に風邪治りそう！

よし、早速やってみようっ♪

って思ってたベッドから起き上がろうとしたんだけど。

曜「痛ッ……！」

激しい頭痛が私を襲う。

酷い鈍痛だ、ずつと何かハンマーのような固いもので殴られてる感覚。

だめだ、こんなんじゃ踊れない。

今はもう大人しくする他、早く治る方法が無いや……

仕方ない、このまま何もすることがないなら寝てしまおう。

そうすればこの頭痛も、気だるさも、1人でちよつぱり寂しいこの気持ちも、食欲も
忘れる……

いや、食欲は忘れられないかも。

ちよつと……お腹すいたかも。

朝食べてないし、実を言うと昨日の晩御飯も食べてない。

乙女は体重の増減に敏感なのだ。

……ちよーつとここ最近、松月でみかんタルトを（2，3個）食べただけなのにあんな
増えていただなんて。

果南ちゃんに知られたら、限界値の数倍の距離を走らされるだけで済むかどうか……
つてそんなことより、普通にお腹すいた。

でも、さつき起き上がろうとしただけで頭痛くなつたからなあ……

仮に起き上がって階下のキッチンまで行つたとして、風邪つぴきの私は料理なんて出
来るのか？

それじゃあ、大人しく晩御飯まで待つてるしかないのかなあ……？

でもそれだと私の腹の虫が騒ぎに騒いでそれこそ寝られないんじゃない？

あーあ！誰か料理が上手で美味しいご飯を私のために作ってくれる素敵な人がこのタイミングで現れないかなあ！

曜「もう、ほんと孝宏くん大好き♡」

孝「あはは、ありがと」

私のお腹の救世主となってくれたのは、孝宏くん。

欲にまみれて、孝宏くんが来てくれたらなあ……なんて考えてたらほんとに来てくれちゃうんだもん、すごいよね。

曜「お粥おいしい……普通のお粥と違って鶏肉とかきのことか入ってて、面白いしおいしい……」

曜「うんうん、気に入ってくれてよかった♪」

あつさりした味付けで、食べやすいサイズにカットされた具材がアクセントになって、とってもおいしい。

お腹すいてるからなんでもおいしく感じるんだろうけど、これは特別おいしく感じ

る、そんな気がするなあ。

孝「それで体調はどう？」

曜「んー、いいとは言えないかなあ。まだまだ熱もあるし」

孝「そつか。じゃあ安静にしないとだね。ダンスすれば風邪が治るみたいないない考えだけは間違つてもしないかね？」

曜「孝宏くんつてさあ、心を詠んだりできる人なの？」

孝「時すでに遅かつた……」

曜「み、未遂だから大丈夫！」

私の考えがお見通しだったなんて……

そんな分かりやすい性格してるかなあ？

曜「ところで孝宏くんはどうして今日来てくれたの？学校あるでしょ？」

孝「ん？今日は外部の試験だから午前だけで終わつたよ？」

あれ？それつて今日だったっけか！

そうか、だから早く終わったん……

曜「いやいや、でも部活あつたでしょ？」

孝「あつはは、曜ちゃんつてば熱が出て全部忘れちゃつた？3年生の試験が午後まで、みんな揃つての練習が出来ないから今日はなしつてなつたじゃん」

曜「あ、そっか……」

そう言つてケラケラ笑う孝宏くん。

うーん、うっかりしてた。

そういうえば昨日の夜から少し体調悪かつたっけ？

家に着くなりすぐにお風呂に入つて、すやあ……したんだよね。

風邪薬でも飲んでおけばよかつた……

曜「は、おいしかつた！ご馳走様でした！」

孝「お粗末さまでございました……さき、風邪つぴきの曜ちゃんは早く寝ましようね？」

曜「えーっ？まだ孝宏くんと話してたいいい……」

孝「だーめ、早く寝ないと治る風邪も治らなくなっちゃうよ？」

曜「ぶー……はっ、その時はダンスして風邪をふつとば——」

孝「せないから早く寝ましよう」

曜「ちえ……」

仕方ない、ここは大人しく寝るしかない。

じやないと孝宏くんが風邪つぴきの私にも容赦なく怒ってくる……かもしんない？

孝「ほら、着いていってあげるから早く寝る寝る」

曜「は〜い」

孝宏くんは食器をあつという間に洗い終えて、私の背中を押して階上へと運搬する。そして私の部屋に着いて、ベッドに寝転がった私に布団を掛けてくれた。どこまでも優しいなあ……

曜「えへへ……」

孝「なにどうしたの急に笑いだして……」

曜「ううん、なんでもない」

そう言いながらも弛緩しきった頬は一向に治る気配はない。

幸せなんだ。

大好きな人が私のためにこうして尽くしてくれることが。

優しく、私を看病してくれることが。

愛されてるんだなって、実感できる。

ああ、こんなに幸福でいいのかな……？

例の墮天使さんにこの幸せを分けてあげたいくらい。

こんな幸せな気分に含まれたまま、私の意識はベッドに入って数分で途切れてしまったのです。

孝「おやすみ、曜ちゃん……」

最後に聞こえたのは確か、そんな言葉だった気がする。

目を開ける。

そこに広がっていたのは、暗くなった私の部屋。

夕日もすっかり沈んだ時間まで寝ちやったみたい。

寝ぼけ眼をこすってぐぐつと伸びをする。

そしてゆっくり起き上がろうとしたんだけど、何やらお腹の辺りが重たい。

何かが乗ってる？

視線をお腹の方に移すと、そこには私のお腹に頭を乗せて寝てしまっていた孝宏くんがいた。

……あれ？なんで孝宏くんがいるの？

ご飯を作ってくれて、ベッドまで連れて行ってきて、それで……

ん？

ベッドまで連れて行ってきて?!

そうだ！私あの時なんの疑いもなく孝宏くんを私の部屋に入れて、そのまま眠っ

ちやつたんだ！

なんてこと……なんてことをしてしまったんだ私は！

あああああ、恥ずかしすぎるよう……／＼／

彼氏とはいえ、男の子を自分の部屋に入れて、なおかつ眠りに落ちる瞬間を見られ、さらに言えば寝顔まで晒したってことだよね？

孝「んお………あ、おはよう曜ちゃん……」

曜「おつ、おとおおお、おはよう………ごきます……／＼／」

孝「あれ………もしや俺は寝てた？」

曜「う、うん、私のお腹の上でぐっすりでした……／＼／」

孝「まじか！ご、ごめん！よだれとか垂らして………ない、よかつたあ……」

いや、何も良くない！

よだれとかそんなことよりもっと大事なことで、いろいろふつとばしてる！

ああ、でも孝宏くんからしたら役得なのか。

看病して彼女の寝顔を見られたなんて。

ほんとにそれって役得なのかな………？

違う気がする……

ん？なんだろうあれ？

孝宏くんの足元になにか置いてある。

袋だ。青い小さな袋にリボンなんかが付いてる。

曜「ねえ孝宏くん、その袋って何？」

孝「え？……あ！こ、これはそのつ、違って、あの、えーつと……ああ、ダメだ、隠し事なんてできなかつた……」

曜「隠し事？どういうこと？」

孝「あー……その、お誕生日おめでどう曜ちゃん」

曜「えっ？」

びつくり。

青い小さな袋を私に差し出してくる孝宏くん。

そつか、これは誕生日プレゼントだったんだ。

孝「きつと喜んでくれると思って買ったんだ」

曜「中見てもいい？」

孝「うん！」

袋の中には小さな白い箱。

箱の上面に黒字で「E s p e c i a l l y f o r y o u」って書いてある。

箱を開けると、入っていたのはネックレス。

曜「これ……ダイヤモンド？」

孝「おつ、さつすが〜」

でもこれ、偽物の安いダイヤモンドじゃない。

前に孝宏くんがくれたリングのダイヤモンドは恐らくそれなんだろうけど、これは違う……

曜「ねえ孝宏くん、こんなこと聞くのは失礼だけどさ……いくらしたの？」

孝「あ、気づいちゃうか……まあそんな高くはないよ？」

嘘だ。

だって今明らかに「気づいちゃうか」とか言ってたし。

絶対これ、数千円で買えるものじゃない。

曜「でも、どうして……？」

孝「そんなの当たり前じゃん、大好きだからだよ」

曜「……！」

ああ、本当に。

私ばかりこんな幸せでいいのかな。

私なんかを大好きになってくれる素敵な人がいていいのかな。

曜「孝宏くん、こつち来て……」

孝「ん？どうし——」

キス。

その味は甘酸っぱいって、昔読んでた少女漫画に書いてあった。

実際その作者さんが経験したものは甘酸っぱかったのかもしれない。

でも、私が今感じているのは。

極上のスイーツよりも、甘い。

チョコに蜂蜜に練乳に砂糖、全てを一気に食べてしまったかのような味。

それなのに嫌にならない。

むしろもつと欲しくなる。

そんな不思議な味がするんだ。

曜「こんな素敵なプレゼントを、本当にありがとう！」

孝「は、はは、参ったな。これじゃあどっちがプレゼントをあげたのかわかんなくなっ

ちやうよ……／＼／

ふふん、どうやらお返しには十分すぎるサプライズをプレゼントできたみたい♪

孝「ねえ、曜ちゃん。それ、俺につけさせてくれないかな？」

曜「ふふっ……喜んで！」

どうやら風邪は、こんな幸せな気持ちがかき消してくれたみたい。
ありがとう、孝宏くん。

今までも、そしてこれからも、よろしくね。
愛してるよ！

曜 s i d e o f f

数日後、孝宏は風邪をひいた――

T o b e c o n t i n u e d . . .